
黒い瞳の貴公子 ~ brown eyes at noble ~

御堂志生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い瞳の貴公子 (brown eyes at noble)

【Nコード】

N8242H

【作者名】

御堂志生

【あらすじ】

『Academy Award for Best Supporting Actor』200X年アカデミー賞、ひとりの日本人俳優がハリウッドに築かれたアジアの壁を乗り越えようとしていた。それは、4年来の恋人である女優マリー・ドレイクにとって、待ち望んだ瞬間だ。そしてこのオスカーが、ふたりの関係に変化をもたらすであろうことにもマリーは気付いていた。彼の名はショウ・カザハラ。日本人ゆえの冷遇に耐え、長いトンネルを抜けた時、ショウは瞬く間にハリウッドスターへの階段を駆け上がった。黒い髪黒い

瞳を持つ彼を全米のマスコミはこう呼んでいる 「brownie
yesatnoble」 黒い瞳の貴公子、と。全34話+後日談2話
ノブログ&サイトでもご覧いただけます。

第1話 backstage1「プロローグ」 (前書き)

海外ロマンス風の小説です。セリフや設定も出来るだけソレらしくしています。

「こんな言い方はない」「都合が良すぎる」「等、作者を叱らないで下さい(苦笑)

人物や団体・施設などの名称は、全て架空のものとして判断下さい。実在のものとは一切関係ございません。

ヒーローのモデルは全くおりません。さんに似てる女優・俳優が出てきても気のせいです(苦笑)

所属事務所って、作品名って……全部、“気のせい”でよろしくお願ひしますm(——)m

ハーレクイン程度のラブシーンは出てきます。苦手な方はご遠慮ください。

実際のハーレクインに年齢制限はありませんが、一応、R15に指定させて頂きました。

サブタイトルに「backstage」と入っていれば現在で、「offstage」と入ってれば過去です。

ブログ連載完結済み作品です。

アラビア数字を漢数字に訂正するのが目標です!

先が気になる方は、ぜひ、ブログにお越し下さいませ(笑)

第1話 back stage 1「プロローグ」

二〇〇X年二月、ロサンゼルス・ハリウッドのコダックシアターで第X回アカデミー賞の授賞式が行われていた。

ハリウッドに籍がある一流の俳優はほとんど参加している、いわゆる祭典だ。

その中にひととき目立つ男がいた。

シヨウ・カザハラ……日本名・風原生。彼も今から二年前、ハリウッドの俳優組合に名を連ねた。黒い髪と黒い瞳を持つ、生粋の日本人である。ハリウッド出演四作目で準主演役に抜擢され、その卓越した演技力は二十七歳の若さで最高の評価を受けることとなった。

シヨウは今日、助演男優賞にノミネートされ、オスカー候補として授賞式に出席している。

ハリウッドのマスコミは、デビュー当初シンデレラボーイと呼ばれた彼に、その佇まいと血統から『brown eyes at noble (黒い瞳の貴公子)』の称号を与えた。

ちょうど五年前の三月、シヨウは大学の卒業と同時に、全てを捨てアメリカに渡った。その時失ったものは大きかったと言ってもいい。

なぜなら彼は、日本では連ドラ四本の主演歴があり、その全てに高視聴率を稼ぎ、若手トップと目されていたスターだったのだ。主演二作目の映画も封切られ、大ヒット間違いなしと言われた最中の渡米だった。

周囲の大反対を押し切り、所属していた大手の事務所からは業界に回状が廻り、戻る場所すらなくなった。

渡米後三年間はロクな仕事もなく、地べたを這いずるような状況だった。日本人というだけでオーディションすらしてもらえず、門

前払いの日々を過ごす。

好調時は、彼の長所となる完璧主義と真面目な性格が、上手く行かない時には足を引っ張り、シヨウを追い詰めた。苦悩から胃に穴が開き、神経性胃炎から胃痙攣を併発、救急車で運ばれたこともある。

だが、五年の月日が彼を強くし、そして今日の日を迎え……彼にはもうひとつ決着をつけなければならないことがあった。

もし自分が選ばれたら、その時は……彼は決意を新たに、レッドカーペットに足を踏み出した。

そんなシヨウを溜息と共に見つめる瞳がある。

今日のシヨウは、深みのあるアイボリーブラックのタキシードを着ている。彼のイメージに合わせたプラダのクチュールだ。主演映画のため、ベリーショートにしていた髪もミディアムに戻っていた。そして、前髪を右手でかき上げるいつもの仕草。それは考えごとをするときの、シヨウの癖だった。

(何を考えてるのかしら?)

心の中でそう呟いたのはマリー・ドレイク、二十五歳。アメリカ合衆国出身の女優である。

インディゴブルーの瞳と栗色に近いブルネット、そして完璧なボディ。彼女にとっては不本意なことに、セクシー女優と呼ばれている。

ずっと女優に憧れ、アクターズスクールで学んだ。そして、十八歳の時にテレビドラマの主演を勝ち取る。途中、ドラマの打ち切り

などに遭って下降線を描いたこともあった。だが今は映画女優として成功し、今日のアカデミー賞にもシヨウと同じように助演女優賞でノミネートされたのだった。

彼の黒髪は光にかざすとブルーブラックに変わる。そして、ベッドの上では、あの黒い瞳を輝かせ、黒豹のようになって襲い掛かるのだ。

『知ってるのは私だけじゃないけど……』

自分の声が耳から聞こえてきて、マリーはドキツとした。無意識で声にしていたようだ。

『今日から五年以内にハリウッドスターと呼ばれて見せる！』

黒い瞳を輝かせて、シヨウがそう宣言したのが昨日のことのようだ。

あの日から四年と三カ月……。

今年の夏には全米で彼の主演映画が封切られる。シヨウはマリーの隣に立つ資格が欲しいと言った。だが、その資格を手にしたとき、彼の欲しい一番が自分ではないことに、彼女は気付き始めていたのだった。

く
く
く
く

第2話 Offstage「4年と4カ月前」(前書き)

『』のセリフは英語とと思ってください。

後ほど「」のセリフが出てきますので、それは日本語です。

第2話 Offstage 1「4年と4カ月前」

二人の出逢いは四年と四カ月前、いや、正確には再会というべきか……。

シヨウは渡米後、アクターズスクールに通い、演劇を基礎から勉強しなおした。

事務所の紹介でエージェントとも契約する。当時は一年の約束で事務所に籍を置いたまま、彼は渡米していた。稼ぎ頭の彼を事務所が手放そうとしなかったせいだ。一年やらせて、ダメなら諦めて帰ってくるかと誰もが思っていた。

(周囲の思惑通りになるのはごめんだ！)

人一倍プライドの高いシヨウは、懸命にレッスンに励む。そして、役柄を選ぶ自由もなく、毎週オーディションに通い続けたのだった。

8

『君、日本人？中国人？悪いけど、この役はニンジャやサムライじゃないんだ。東洋人は要らない』

『英語上手いね。でもここはアメリカだ。もっとネイティブでしゃべれないの？』

『黒髪は染められるし、瞳はカラーコンタクトがあるけど、肌の色はねえ……』

どんなオーディションでも散々言われ続け、一度も芝居を見てもらうことすら出来ずにいたのだった。

ここまで来て初めて、自分がいかに甘やかされてきたかを肌で知ることになる。

彼の所属していた事務所は業界最大手だ。シヨウの両親が、帰国子女で友人の出来ない息子を知人に頼んで事務所に入れてもらった。小学校六年、十二歳の時だ。だが、いずれ父のような外交官になるうと考えていた彼にとつて、歌やダンス・芝居のレッスンは、稽古事の延長に過ぎなかった。

そんな彼に転機が訪れる。高校一年の時、ある学園ドラマのオーディションに数合わせと言われて参加した。それが、プロデューサーの目に止まった。

シヨウは、その人気シリーズでメインとなる生徒役に抜擢され、俳優としてデビューしたのだった。

どんなことでも、一旦引き受けた以上、全力を尽くすことにしている。

その結果……彼は見事に開花した。

同じシリーズで有名になった誰より早く、ドラマの終了と同時に、次回作の主演まで決まってしまうほどに。

その後も、オーディションを受ける必要もなく、当たり前のように主役が回ってきた。ニューヒーローの誕生だ、天才だ、と誉めそやされ、いい気にならない人間はいないだろう。

もちろん彼自身に、高い素養が備わっていたことは間違いない。

生まれた時から上流階級の水で育ったシヨウには、洗練された立ち居振る舞いが自然と身についていた。加えて、英語、フランス語、スペイン語、中国語が日本語同様に話せる。両親と一緒に様々な国で暮らしたおかげだ。

その語学力だけではない。デビュー当時一七七センチの身長は、二十歳の時には一八五センチまで成長した。細身のアイドルとは一線を画した立派な体格は、事務所では浮いていたが、逆にハリウッドでは強みになると信じていた。

だが……自慢の英語も、クイニーでは使えないと笑われ、レッスンでもセリフが聞き取れないと怒鳴られた。さらには、長身が災いとなり、アジア人の端役すら回ってこない有様だ。

それでもシヨウが、酒や女、クスリに逃げなかったのは褒めてやるべきだろう。

日本からも時々、シヨウのような若い男女がやってくるという。ハリウッドに憧れ、夢を追いかけてくるのだ。

中でも「日本でそこそこ売れたアイドル」というのは多い。日本で何かやらかして、ほとぼりが冷めるまで居るヤツや、アメリカンドリームを信じて、実力を勘違いして来るヤツ……等々。

シヨウは後者だ、とスクールのスタッフや関係者に嘲笑交じりに言われた。

ほとんどが三ヶ月から半年、中には一ヶ月で日本に泣いて帰る。だが、帰る場所のないヤツは、楽な道に逃げ、誘惑に溺れて身を持ち崩すケースも少なくない。

渡米から半年過ぎた時、残ってどうするんだ？ と真剣に人から聞かれた。

シヨウ自身、逃げるように渡米して、何がやりたかったのか、何をすべきか……迷い始めた頃、マリーに再会した。

第3話 Offstage2「ありがたくない再会」

やっと審査してもらえることになったオーディションに遅刻しそうな時だった。

地下鉄は事故があつて電車が動かないという。バスにも乗り遅れ、仕方なくタクシーを飛ばしてスタジオに着いた瞬間、タクシーに女が乗り込んできた。

『出して』

『待てよ、俺は降りるんだ、降ろしてくれ』

『早く出して！ 追いつかれるじゃない！』

『だったらお前が降りろ。俺を降ろしてから行けよ！』

『早く！ 掴まったら、訴えるわよ！ 早く出してっ！』

どうもアメリカでは、何かあれば『訴える』と皆喚きたてる。弁護士の数がやたら多く、訴訟大国というのも頷ける。

どうやらタクシーの運転手も揉めごとは避けたいらしく、慌てて車を出した。

『何で出すんだよ。止めるよ、降ろせ！ オーディションがあるんだ。やっと二次にこぎつけたんだぞ。受けられなかったら訴えてやる！』

そう叫んでも後の祭りであつた。

数分後、車内は微妙な空気に包まれていた。

『あなた役者志望なんだ……ふん』

高いハイヒールを差し引いても身長は一七〇以上あるだろう、身体の凹凸は日本ではお目にかかれない部類だ。金髪に染めた長い髪は、本来の栗色が見え隠れしている。暗い車内ではくすんだ藍色の瞳も、太陽の下では綺麗なブルーに見えるだろう。

『二次審査が精一杯なんて可哀想……東洋人にはそこが限界なのよ。諦めたら?』

いかにも自信有り気に、まるで男は全部自分にかしずくとも言わんばかりにシヨウを見下しているのがよく判る。

『相変わらず、偉そうな女だな』

シヨウは溜息まじりにポツリと呟いた。その言葉の内容が癪に障ったのか、彼女の表情は一変する。

『……どういう意味? あなた、本当は私が誰だか判ってないんでしょ?』

『「ブラッディエンジェル」のマリー・ドレイクだろ? そっちこそ、俺のこと忘れたのか?』

マリーはあらためて役者志望の東洋人をジロジロ眺めた。

今日のシヨウは、くたびれたジーンズにスニーカー、十月だというのにまだ半袖のTシャツを着ている。どこからどう見ても、アメリカンドリームに目が眩んだ売れない役者そのものだ。

『悪いけど……知り合いのようなことを言っても無駄よ。その手には乗らないわ』

『フィアンセはまだフィアンセのままなんだな。本気で結婚する気はあるのかい?』

『だから何? 私が婚約してることは皆知ってるわ。ああ……運転手さん、そこでいいわ、停めて頂戴』

二年前にセクシー路線で売れ始めてから、マリーにはこの手の男がよく近づいてくる。知人を騙って悪さを企む手合いに見えたのだろ?、彼女はシヨウのことを警戒しはじめた。

『へえ、俺が怖いのか? ようやく男として見て貰えそうだな』

別に魂胆はなかった。ちょっとした悪戯のつもりで、シヨウはわ

ざとらしく車のバックシートをにじり寄り、腰が触れそうなほどマリーに近付いた。

『そ、そんなじゃないわ。もう、ここでいいわ。停めて！』
せつついてもそこは交差点の真ん中だ。そんな場所じゃ車は停められない。

シヨウはそのまま悪乗りし、両腕で彼女を囲った。東洋人は小柄だと思われがちだが、シヨウに限っては例外だ。覆いかぶさるとか
なりの威圧感があり、マリーは身動きが取れなくなってしまふ。

『い、言っておくけど、私に何かしたらタダじゃすまないわよ！
た、逮捕されたら、デビューなんか絶対出来ないわ！　こんな風に
威嚇するだけで、充分犯罪なんだから』

『だから？』

丸つきり気にする風でもないシヨウの態度に、マリーは戦略を変えてきた。

まずは、身を守ることを優先したらしい。

『……わ、判ったわ。私が悪かったわ。あなたのチャンスを潰した
んですもの。でも、しつこいパラッチに追われて困ってたの。あ
なたは助けてくれたんだから、お礼をするわ。お金を払ってもいい
し……そうだ、仕事をあげるわ。テレビで使って貰える様に話して
あげる。だから』

『お礼をするわ、坊や　お礼はキスじゃなかったっけ？』

マリーはその言葉にハツと顔を上げた。

『あなた……去年の夏の』

第4話 Offstage3「パーティの記憶」

その一年前の夏、ハリウッドへの挑戦を迷っていたシヨウは、母の勧めで渡米した。

両親が招待されているパーティに出席し、何人かのハリウッドスターに紹介されたのだった。世界的ピアニストであるキョウコ・ミワの息子、日本大使令息、そんな肩書きでハリウッドの撮影現場も案内してもらえたのだ。

マリーと出会った夏は、長い間思い続けた初恋が実り、男としても自信を持ち始めた頃であった。仕事も選び放題で「自分に出来ない事はない」と、天狗になっていた時期とも重なる。

だがそれは、マリーの方も大差はない。

「ブラッディエンジェル」の人氣がピークでどこに行ってもチャホヤされていた頃、黒い瞳の少年に出会った。

業界にも顔が利く、一流ピアニストの息子で父親は日本大使だと紹介された。

日本のアイドルスターなどよく判らない。ただ、明らかに既製品とは違うスーツが生意気に思えた。

そのせいか、最初はロクに顔も見ず、生まれながらのコネと金を持った道楽息子、くらいの印象しか持たなかった。

マリーはその時、二十歳になったばかりであった。アルコールも酔っ払いも苦手だ。

いつの間にか、傍からいなくなったフィアンセを探して、彼女はパーティのメインフロアから離れた。

その時だ、酔っ払った大物プロデューサーのフランク・ウォーカ

ーに絡まれた。

『よおマリー。セカンドシーズンの視聴率はイマイチだな。このま
まじゃサードシーズンはおろか、打ち切りも覚悟しておけよ。つた
く、これからって時に婚約なんかするからだけ。しかも、なんだっ
てまたあんな野郎と……』

フランクはブツブツ言っている。

マリーはほんの三ヶ月前、彼女が二十歳になってすぐ、なんと「
ブラッディエンジェル」で共演したニック・ジョーンズと婚約した
のだ。十二歳も年上で、バツイチの子持ち……おまけに、業界であ
まり評判の良くない男を選んだ彼女に、ファンはノーを突きつけた。
無論、彼女にも言い分はある。だが、この世界は数字が全てだ。
金になる、と思われたら強気にプッシュしてもらえるが、終わつた
と判断された時は……。彼女は、手にしたほとんどを失うことにな
る。

『フィアンセがいるんだ。もうお堅いことは言わんだろう？ 俺の
言ってる意味は判るよな？』

アルコール臭い息が耳から首すじに吹きかかる。後ずさるマリー
の腰にフランクは手を回した。

『ねえ待って、フランク。ニックも一緒に来てるの。だから……』

フィアンセの名前を言うことで、怒らせずに大物プロデューサー
から逃れようとした。しかし、その思惑は見事に外される。

『ニック？ ああ……さっき、女の肩を抱いて階段を上がって行っ
たぜ。確か、女優の卵だったかな』

一瞬でマリーの表情は凍りついた。嫉妬ではない。またか、とい
う思いだ。

『どこが良くてあんな野郎と婚約したんだか。ああ、そうか、良か
ったのはあっちのほうか』

フランクの下卑た笑い方に、マリーは吐き気がした。引っ叩いて

この場を立ち去れたらスカツとするだろう。だがその時は、マリー・ドレイクの名前はドラマのクレジットタイトルから間違いなく消える。

どうやって逃げようかと考えているうちに、部屋に押し込まれそうになり……。

一人の少年がスツと現れ、フランクに向かって日本語で捲くし立てた。

マリーにも何を言ってるのかサツパリ判らない。だが、不意に向きを変えると、今度は彼女にも日本語で話し始める。

『ごめんなさい。私、日本語は判らないの。えっと……ノー、よ。ノー。判る?』

少年は全く判らないといったジェスチャーだ。

しかし、すぐにその少年が、パーティーの冒頭で紹介されたジャパニーズアイドルのシヨウ・カザハラだと思い出す。彼なら確か英語で挨拶したはずだ。

マリーが、シヨウの行動が自分を助けるための芝居だと気付いたとき、日本の少年は人懐こい笑顔を見せ、マリーに向かってウィンクした。

その少年らしからぬ洗練された動作に、一瞬目を奪われる。そのまま、強引に腕を掴まれ、中庭に連れ出されたのだった。

あの時の唾然としたフランクの顔は今でも覚えている。

『ああ、助かったわ。ありがとう。本当は英語、判るのよね? 君は、ミズ・キヨウコ』

・ミワの息子さんね。……お礼をするわ、坊や』
そう言つと、頬に軽くキスした。ティーンエイジャーの少年ならそれだけで飛び上がって喜ぶだろう、と思つたが……。

返ってきた言葉はあまりに予想外なものであった。

『随分、見くびられたものだな。お礼ならこれくらいはして欲しいものだ』

流暢なクイーンズイングリッシュが口から零れたと思った直後、その黒い瞳が煌き、一瞬で唇を奪われた。

身体を抱きすくめられ、数十秒そのままになっていた。激しく、奪い去るように押し付けたかと思えば、今度は舌先でなぞるように軽く触れる。マリーは背中に電気が流れるようなシヨックを味わっていた。

そして、唇が離れた瞬間……心ならずもウツトリと瞳を潤ませていたマリーは、シヨウの氷のようなセリフに自分を取り戻すことになる。

『坊や呼ばわりする割には、うぶなキスだな。ミス・ドレイク』

ハツとして、シヨウの頬を叩こうと、右手を振り上げた。しかし、その手が頬に辿り着く寸前、彼の左手でガッチリと掴まれてしまう。振りほどこうともがくが、ビクともしない。抗議したくても、焦りと興奮で声も出なくなっていた。

『おっと、叩かれるのは趣味じゃない。それに、僕が助けなければ、キスくらいじゃすまなかつたはずだ』

『わ、私……フィアンセが、いるのよ。こ、こんな真似して』

キツパリ言い切ろうとするのだが、ようやく絞り出した声は情けなく震えて、まるで少女のようだ。

『そのフィアンセは、君の貞操が奪われそうな時にどこに居るのかな？』

『それは……』

フランクの言葉を信じるなら、彼は女優の卵と一緒にだろう。そんなことは口が裂けても言えない。

『僕が挨拶をしたとき、隣に立っていた男性が婚約者だろう？ 彼

なら、上の個室に女性と入っていくのを見たよ。アメリカの女性は随分進歩的なようだ。それとも、君にとって、浮気ぐらいたいしたことじゃないのかな？』

『だから何！？ 何が言いたいなの？』

痛いところを突かれ、ついに逆切れした。

『あなたみたいな子供に何が判るっていうの？ キスの一つや二つでいい気にならないことね、坊や。ママに言いつけるわよ！』

『言いつけられたら困るな』

短く、そう口にすると、なんとマリーを一気に抱き上げた！

そのまま、横抱きにして歩き出す。中庭の奥に見える東屋に彼女を連れ込むまで、ほんの一瞬の出来事だった。

そして、ウッドベンチに彼女を下ろすと、さっきと同じようなキスで彼女の口を塞いだ。

『言いつけないと約束してくれるまで、続けることになる。どこまでいくかな？』

シヨウの低い声にマリーは背筋がゾクツとした。

フランクに、同じように囁かれた時は悪寒が走った。だが今度は、違う種類の感覚が体を駆け抜ける。危うく、誘惑に身を委ねそうになる。それを打ち消そうと、慌ててマリーは叫んだ。

『止めてっ！ 判った、判ったわ。言わない。誰にも言わないわ。』

私はそういう女じゃないのよ。ああいうことは、簡単には出来ないわ。お願い、婚約者がいるのよ』

『OK。僕も女性に困っているわけじゃない。 子供はそろそろ消えるでしょう。それでいいかな？ お嬢さん』

暗闇に紛れそうな漆黒の髪と瞳だ。その容貌はまるで悪魔のようだ、とマリーは感じた。

『では、素敵な婚約者とお幸せに』

口元に魔性の微笑を湛えながら、シヨウは気取ったオールドイン
グリッシュに切り替えた。触れてはじめて、彼のスーツがアルマ
ーニのオートクチュールであることに気付く。小憎らしいほど長い
脚だ。軽く身を屈め、貴族さながら、優雅に一礼して立ち去った。

(どうみても十代の少年なのに、キスはニック以上だわ)

マリーはそんな不謹慎なことを思い浮かべていたのだった。

第4話 Offstages「パーティの記憶」(後書き)

御堂です。ここまでご覧頂きまして、ありがとうございます。

とりあえず、今夜はこの辺で(苦笑)

基本的に数字の訂正のみですので、出来る限りサクサクUPするつもりです。

(誤字脱字が見つかったらもちろん訂正します)

良かったら読んでやって下さい(平伏)

第5話 Offstage4「タクシーの中で」

『ようやく思い出してくれたようだ。その後、フィアンセの浮気現場は押さえたのか?』

『バカなこと言わないで! ニックは……少し休んでいただけよ。それだけだわ』

『そうか。それなら良かった』

それだけでないのは誰もが知っていることだろう。だが、シヨウも自分が調子に乗り過ぎたことに気づき、あっさり引いたのだった。

一年前のことを思い出し、シヨウの素性が判ると、今度はマリイがシヨウを質問攻めにする。

『そうだ! あなた、どうしてココにいるの? 一体、何をやってるの?』

『は? よく言えたもんだな。あんたが俺の乗ったタクシーに乗り込んできて、オーディションをパーにしてくれたんだろうが』

『違うわよ! あなた、日本のスターだって紹介されたわ。どうしてロスにいるの? しかも、そんな格好で……。オーディションなんて受けなくても、人脈を使えば仕事にありつけるでしょう? だってあなたのご両親は』

『うるさい口だな』

言つなり引き寄せ、唇で彼女の言葉を遮った。

ピュー!!! タクシー運転手はミラーを覗きながら口笛を吹く。

シヨウは頭の中で十秒カウントした。一年前と同じだ。軽く重ねるつもりが、ストップモーションが掛かったようになってしまう。それ以上続けると他の部分が反応しそうになり、慌てて止めたのだった。

『礼はこれで充分だ。停めてくれ 俺はここで降り』

最後まで言い終わらないうちに、マリーに両手で突き飛ばされ…
…ゴン！ と反対側のドアに頭をぶつける。

『おい！ 何するんだ！』

『うるさいわね、このスケベ男！ すぐにキスする癖、直しなさいよ！ 本気で訴えるわよ！』

『うるさいのはどっちだよ………ったく』

『とにかく、もう二度と近づかないで！ 判ったわねっ！！』

近づいてきたのはそっちだろ？ と言いたいのを、グツと抑えた。

マリーはシヨウが無言でいるのを、了解と受け取ったのか、

『ここで降りるわ、いくらかしら？』

『十二ドル五十セントだよ』

運転手の言葉にマリーの動きが止まる。今の彼女は荷物らしきものは何も持っていない。パパラッチに追われ、走って逃げ切ったのは良かったが、家まで帰るタクシー代も迎えを呼ぶ電話代もないのだ。

シヨウは一目でそれに気付き、形勢逆転に思わず笑みを浮かべていた。

『ふ〜ん、警察に行くのはどっちかね。マリー・ドレイクが無賃乗車か………タブロイド紙が喜ぶな』

『待って。家まで戻ったら払えるわ。お金はちゃんとあるんだから』
『携帯も持ってないってことは………鍵はあるのか？』

『それは………』

手ぶらで走り出した自分の迂闊さを呪うように、マリーは小声で悪態を吐き、舌打ちする。

『ねえ、私が無賃乗車なんてするわけないでしょう？ 判ってくれるわよね』

マリーは一瞬で表情を変えると、運転手にお得意のハリウッドスマイルを向けた。

『そんなこと言われてもなあ。芸能人って、後から請求しても周りの連中に無視されるんだよね。本人には話し出来ないし。困るんだよなあ』

自慢のスマイルが十二ドル五十セントに負けてしまい、手立てがなくなつたようだ。マリーはシヨウクのあまり固まつてしまった。

『十二ドル五十セントね、俺、ここで降りるから』

シヨウは笑いを堪えながら、横からさつさと支払いを済ませてしまつた。

仕返しされたのが悔しいのだろう、マリーはシヨウを睨みつけていた。

『ほら、さつさと降りろよ』

そこはサンセット大通りを過ぎ、シルバーレイクに入ったあたりだ。繁華街ではないが、それなりに人通りはある。

『俺はバスでもう一度戻つてみるよ。あんたは……ほら、その公衆電話から助けでも呼ぶんだな』

そう言つとマリーの手に、二十五セント硬貨を数枚握らせた。

『あ、あの……返すわ、絶対。たかがコレくらいのお金で借りを作つたなんて思わないで』

『ほんと、可愛くない女だな』

この二三年、マリーの傍には黙つていても男が寄ってくる。誰もが『美しい、綺麗だ、君はなんて素敵なんだ』と絶賛するのだ。それがどうだろう、シヨウはやたら情熱的なキスはするくせに、称賛すらしようとしらない。

『そつちこそ、その歳でどんな悪さをして日本を追い出されたの？

お母様も気の毒ね、下半身のだらしない息子を持つて』

『そりゃあどうも。おかげでネイティヴらしくなつたろ？ で、人に迷惑を掛けても、助けてもらつても、「ありがとう」も「ゴメン

なさい」も言えない女に、下半身の詮索までされたくないな』

マリーは凶星を指されたのか、顔が真っ赤だ。シヨウはそんな彼女に追い討ちをかけるように言った。

『例のフィアンセの気持ちも判るな。あんたみたいな高飛車な女、俺だったら絶対嫁さんにはしたくないね』

『ご心配なく！ あなたみたいなお子様はお呼びじゃないわ！』

『婚約者にも呼ばれてないんじゃないのか？』

『なっ！』

『おっと、騒ぐなよ。ばれて困るのはそっちだろ？ 金は、俺があんたの位置まで上がったときに返してもらいに行くさ。じゃあな』

シヨウはそんな捨て台詞を残し、今にも出発しそうなバスに駆け寄ると飛び乗った。

『来られるわけじゃないじゃない、日本人に……』

呟いたマリーの言葉は、シヨウの耳に届くはずもないのだった。

第6話 Offstage5「真夜中の襲撃」

ふたりが再会した一ヶ月後、シヨウの住むアパートメントの前に、ひとりの女性が立っていた。マリー・ドレイクだ。

その後、彼女は気になって、シヨウのオーディション結果を問い合わせしてみた。

案の定、遅刻を理由にテストを受けさせて貰えなかったと聞き……。どうせ無駄だったと思う反面、自分にも責任の一端があるように思えて気分が晴れない。

何より、子供のくせにやけに偉そうで、しかも逢う度にキスしてくるシヨウがなぜか気になる。マリーは悩んだ結果、懇意のディレクターに声を掛けたのだった。

「シヨウ・カザハラ？」

「はい。呼ばれて来ました。本当に僕でいいんでしょうか？」

「ああ、まあ、大した役じゃないけどね。マリーの頼みだから……。ま、やってみてよ」

「え？ マリーって？」

「主役のマリー・ドレイクだよ。知り合いだろ？」

シヨウは声もなく固まる。

オフアールがあつたとエージェントに聞かされ、訪れたスタジオは「ブラッディエンジェル2」の撮影現場だった。

青くなるシヨウの顔色に何を想像したのか、ディレクターは近づくと声を潜めた。

『マリーとやったのか？ 婚約したまま結婚しないと想ったら、そういうコトだったんだな。上手くやったな』

シヨウの股間を拳で殴る真似をしながら、周囲のほとんどの連中は下卑た笑いを浮かべている。

眩暈がする……シヨウは、唇が切れるほど噛み締めるのだった。

その次の日、夜遅くにボロアパートの玄関を壊す勢いでノックする人間がいた。

シヨウは慌てて玄関のノブに飛びつくと、

『オイ！ どの阿呆だ！ 何時だと思ってる！』

時間は深夜〇時を回っている。大家に知れたら叩き出されるかもしれない。

『バカはどっち？ 人がせっかく仕事を世話してあげたのに。断わるってどういうこと？』

玄関のドアが開くなり、遠慮もせずにつかつか部屋の中まで入ってきて、マリーは怒鳴りつけた。

長い髪をまとめて帽子の中に入れ、細身のジーンズにウエスタンシャツを着て、まるで少年のようないでたちだ。

彼女は変装用のメガネを外すと、同時に帽子も取った。金色の髪がシヨウの目の前に煌いて零れ落ちる。仄かに香るダージリンティーは、彼女のつけた香水だろうか……。

そんな妄想を打ち破るように、彼女はテーブルの上にお金を叩きつけた。

『二十ドルよ。お釣は要らないわ！』

シヨウは大きく溜息を吐いた。一呼吸置いてからでないと怒りを

ぶつけてしまいそうだ。

『それはわざわざありがとうございます。では、プリンセス、お帰りはあちらです』

去年の夏のように、わざと格式ばったオールドイングリツシユを使った。

そんなシヨウの態度は、マリーのプライドを逆撫でしたようだ。燃え立つような瞳でシヨウを見据えている。

マリーから金を突きつけられ、一瞬ムツとしたものの、その瞳を見るうちに彼の中の衝動は別の方向を向き始めた。

(まいったな、気の強い女は嫌いじゃないんだよな)

メキシコ系アメリカ人でヒスパニック特有の肌の色をしたマリーは、全身から情熱の炎を吹き上げているようだ。シヨウの視線が少しずつ下がり、ジーンズに包まれたヒップラインに移るのは、悲しい男の性だろう。

『仕事を断わった理由を教えて頂戴。確かに悪役でセリフも一言だけど、あなたがこの間落ちたオーディションの役と大差ないはずよ』

マリーの剣幕に慌てて視線を元に戻し、シヨウは咳払いを一つした。

『落ちたを強調しなくていい。で、なんでそんなことするんだ？』

『お礼はするって言ったでしょ』

『礼はもう貰ったさ、そうだろ？』

腕を組み、思わせぶりに右手で唇をなぞる。

『キスはダメよ。ダメなんだから……』

マリーはシヨウのキスを思い出したのか、強気な態度を一転させ、後ずさりを始めた。

『だったら来るなよ。男の部屋に上がり込んで、襲わないで、なんてバージンじゃあるまいし』

『わ、悪かったわね！ 何よ、男なんて一人前のコト言っちゃってハイスクールには行ってないの？ まだ十六、七なんですよ？』

『二十三だ！ あんたの二つ上、大学も卒業した。なんなら、子供じゃないって証明して見せようか？』

『嘘……年上なの！？』

年下に思われていることは気付いていた。だが、あらためて言われると、いささかシヨックだ。

アジア系、その中でも日本人は年齢より幼く見えると言われる。

だが、日本にいるときは、シヨウは実年齢より上に見られていた。実際、演じてきた役柄もプラス四〜五歳といった辺りだろう。十七歳の現役高校生の時に、二十二歳の大学生……それも、有閑マダムの愛人役が回ってきたくらいだ。

マリーはシヨウの年齢を聞いてよほど驚いたのか、瞬きもしない。食い入るように見つめる青い光に、シヨウの体は着火寸前だった。

全米ナンバーワンのセクシー女優に、全身を撫でるように見つめられて、おかしくならないなら男として終わっているだろう。

シヨウは込み上げる欲情にそんな言い訳をして、不自然に横を向くと濡れた髪をかき上げた。シャワーを浴びたばかりだ、彼の黒髪は青みを帯びて……日本風に言うなら烏の濡れ羽色に光っている。毛先から落ちた雫が、無地の白いTシャツを濡らしていた。

第7話 Offstage6「恋の芽生えた夜」

肩を濡らす水滴が十月の気温に冷やされ……シヨウは軽く頭を振る。煩惱の中に埋もれそうになる理性を、必死になって掘り起こした。

『頼むから……そんな目で見るな。本気で証明したくなる』
『どうしようもない男の部分が刺激される。』

絞り出すような低い声でマリーに注意を促した。

『そ、そんな目ってどんな目よ。いい気にならないで！』
『あのなあ。いい気にさせてるのはそっちだろ！？』

これでも気を散らそうと必死なのだ。だが、無意識のうちに彼女の下半身に焦点を合わせてしまう。

そこは見事な曲線を描いていた。どんなに探しても下着のラインは見つからない。それが意味するものは……。あまりにも生地が少ないソレを想像して、急いで視線の位置をずらした。

しかし、その先にあったものは……大き目のウエスタンルックでも、隠しきれないほどの胸元だった。ひと目でカップのサイズまで言い当てられるほど、手馴れたわけではない。だが、その谷間が容易に想像できるほど、シャツの前は突き出していた。

どうにもお手上げだ。シヨウはわざと声を尖らせ、マリーに噛み付く。

『ディレクターも他のスタッフも、皆、俺があんたと寝て役を貰ったって思ってるぜ。はつきり事情も言わず頼んだんだろ？ 何バカなことやってんだよ。おまけにこんなトコまで来て、パパラッチに撮られてみるよ。言い訳出来ないぜ。判ってんのか？』

苛立ちに任せて、つついっい口調はきつくなる。

『……そうならたら迷惑？』

『ああ、迷惑だ』

取り付くしまもない態度なのに、マリーはおとなしく引き下がってはくれなかった。

『でも、名前を売るチャンスよ。仕事が来るかも知れないわ』

『いい加減にしろ！ 俺は親の名前で仕事を取る気はないし、女を利用する気はもつとない。バカにするな！』

夜中に怒鳴るわけに行かない。自分を宥めつつ、声のボリュームを下げる。

『どうして？ いいじゃない。利用できるものは何でも利用しなきゃ。そんな理想ばかり言ったら、永久に仕事なんか来ないわよ。』

親だって、こうやって知り合った私だって、成功を掴むためのチャンスじゃない！』

『チャンスは実力で掴む』

『運も実力のうちよ』

『知ってる。俺は運はいいんだ。強運だしな。そんなことは試さなくても判ってる』

『何それ？ じゃあ何でそうしないの？ ラッキーを使いなさいよ』

シヨウはドサツとベッドに腰掛けた。どうやら、このまま追い払うのは無理そうだ。

『俺は、自分の役者としても才能と実力に賭けたんだ。だから、何もかも捨ててきた。日本ではずっと戦わずに勝ってきた。シードされてたって感じかな。でも、それがなくても初戦から勝ち抜けると証明したいんだ』

『バツカじゃない！ シードされてドコが悪いの？ 生まれながらに恵まれてる人間は絶対いるわ。それを利用して何が悪いの？』

マリーは半ば呆れたような声だ。無理もないだろう。彼の理屈は、世間知らずのボンボンにしか思えないセリフなのだから……。それは自分でもよく判っていた。

『悪くはないさ。何もかも恵まれてる。成功は全部お前の力じゃない。そう言われたら、そんなことはない、と言いたいだろ？ ただ、俺が証明したいだけなんだ。同じスタートラインに立っても、誰にも負けない、と』

さつきまでの喧嘩腰とは違い、シヨウは冷静な声で話し始め……。マリーも自然に隣に腰掛けた。

『でも、そんな連中は何をやっても難癖をつけてくるわ。そうやって成功しても、きつと親に助けってもらったって、そんな風に言うに決まってる』

『そんなことは構わない。俺がフェアであることは、自分が知ってる。だから、アンフェアな真似は絶対にしない。自分を納得させるために口スまで来たのに、自分を騙すなんて意味がない！』

シヨウは照れることも臆することもなく、真正面を向いて夢と理想を語った。マリーは、そんなシヨウを不思議そうに見つめている。不意にシヨウは立ち上がり、テーブルの傍まで行くと20ドル紙幣を掴んだ。

『やっぱ、コレは預けておくよ』

そう言ってマリーに差し出した。

『えっ、どっつして？』

『必ず貰いに行くからさ。そうだな、全米公開の映画に主演が決まったら、返して貰いに行くよ』

『日本人に主演は無理よ』

『無理じゃない。やってやるさ』

『無理、絶対に無理』

『言ったな。じゃあ、もし出られたらどうする?』

『そうねえ。オールヌードでハリウッド大通りをダンスしてあげるわ』

大胆宣言にシヨウは呆れ返った。どうやら、完璧に信用されてないようだ。

『よし。絶対だぞ。忘れんなよ!』

『そっちは? 出来なかつたら何をしてくれるの?』

『なんでも、君の言うとおりにする』

『ホント? 何でも?』

『ああ、男に二言はない! ニッポンの有名な格言だ』

有名だが割りと踏み倒されることも多い。だが、そのことはあえて言わずにいた。

『でも、いつまで? 無期限なら決着がつかないわ』

『十……いや、五年でいいよ。今日から五年以内にハリウッドスターと呼ばれて見せるさ』

『いいの? そんな大口叩いて』

『ああ、早く決着をつけないとな。二十年後のヌードじゃ誰も喜ばないだろう?』

『ちよっと! 失礼だわ!!』

シヨウは笑いながら、再びマリーの隣に座ろうとした。ところが、マリーは逆に立ち上がるうとしたのだ。当然、ふたりは正面からぶつかることになる。

『きゃっ！』

ゆるめくマリーの体を抱き止め、もつれるようにベッドに倒れこむ。

『……悪い』

マリーを庇おうと、体の位置を入れ替えたため、シヨウのほうの下になっっている。そのまま、ふたりの視線はお互いの瞳を捉え……引き寄せられるように、ごく自然に、唇が重なった。

逃げようと思えば逃げられたはずだ。マリーのほうがシヨウの上に乗っているのだから。だが、彼女は逃げる仕草も見せず、逆に積極的に応えていた。

軽く啄ばむようなキスから、その内容はどんどんエスカレートして行く。シヨウの舌先がマリーの唇を割ったとき、ふたりは上下逆になった。

シヨウはそのまま、彼女の身体を広げさせようと両手を掴むが……不意に現実が、彼を引き止めた。シヨウの右手は、彼女の左手薬指に納まったエンゲージリングに触れたのだった。

(チクシヨウ！)

シヨウは勢いをつけると、マリーから体を引き剥がした。下半身に集中しかけた意識を、全身から追い出す。

『おいおい。いい加減止めてくれよ。本気で証明しちまうぞ』

『私……』

『送るよ。表通りに出ればタクシーが拾える』

『……ええ、そうね』

渡米から半年以上、女性に触れてない。マリーを欲しがった理由はそれだけだ。

シヨウがこの時芽生えた感情を直視するのに、まだしばらくの間を要するのだった。

第8話 Offstage 「傍にいて…」

あの夜から、毎週のように、マリーはシヨウのアパートまでやって来るようになった。

シヨウは、ハリウッドスターのマリーを特別扱いすることはなかった。遠慮なく命令したり、怒鳴りつけたり……。最後は決まって口げんかになり、マリーは思いきりドアを閉めて出て行く。なのに、また、数日後には、何もなかったかのように顔を出すのだ。

ここ数年、男性の甘い言葉は全て見返りを期待してのことだと彼女は学んでいた。

ところが「ブラッディエンジェル2」の低視聴率で、打ち切りの声が聞こえ始めた途端、甘い言葉は聞こえなくなってしまった。

代わりに耳にするのが、プロデューサーやエージェントの優しい言葉……彼らは遠まわしに「ヌードになれ」と言ってくる。

フィアンセのニックも同じだ。彼の愛情に期待などしていない。マリーの人気が落ちれば、アクセサリーの意味すらなくなる。元々冷たい態度が、さらに冷たくなってきていた。

そんな事情が、クリスマスも近いある夜、二人の関係に変化をもたらした。

シヨウは週四日、クラブでバイトしている。ジャズのピアノ演奏だ。

渡米時に、必要最低限の生活費は確保して来たが、ボイストレー

ニングやジムに通うために、お金はいくらでも必要だった。

マリーの顔を見るのは嫌じゃない。

いや 正直に白状するなら、彼女の訪れを待ってる自分がある。これは、甚だまずい状況だ。ブロンドのガールフレンドを作るために、ロスまで来たわけじゃない。

自覚が芽生えてからは、ことさらマリーに冷たく当たっている。ふたりの関係に進展がないのは、ショウが奇跡のような自制心を発揮しているおかげだろう。

彼は芸能界に入る時に、外交官の父から厳しい条件を出されていた。

この世界は十代の少年には抗い難い誘惑が多い。だからこそ、万に一つも墮落の兆しが見えた時は、強制的に引退させると言われている。

両親の名前や旧華族である風原家の家名に泥を塗るなど、許されないことだ。それは、彼にとっても『当然のこと』と受け止めている。

マリーにはカッコつけて経験豊富のように語ったが、実際の所は……様々な経験を入れても片手で足りる人数だろう。彼女には三十代のフィアンセがいる。おまけに、セクシーさが売りのハリウッド女優だ。どう考えても、期待通りの何かを証明できるようなスキルは、持ち合わせてはいない。口先だけ、と笑われるのがオチだろう。

それなのに、だ。

マリーの行動も、些細な仕草も、ショウの目には信じられないほど無防備で危険な誘惑に映る。わざとやってるのか？ と思えるほどだ。

なかでも、剣道二段のショウがアパートの屋上で素振りをする時、

背中に刺さるマリীর視線は凶器だ。素振りで煩惱を打ち払うどころか、溜まる一方になってしまふ。

(婚約者のいる女性との情事など、考えられない。引くなら今しかない)

だが、セクシー女優の仮面の下に隠された、傷つきやすい無垢な魂に触れた時、彼の理性はあっさり白旗を振ることになる。

その夜は雨が降っていた。

ロスの冬は雨が多い。気温はそれほど低くはないが、濡れるには冷たい雨だった。

バイトから帰ったシヨウがアパートの階段を上がると、ドアの前にうずくまる黒い塊が見えた。

『マリーか？ 何やってるんだ。合鍵を渡しただろう？ 部屋に入って待って……』

そこまで言って、彼女の様子がおかしいことに気付く。肩に掛けたバッグを放り出すと、膝を屈め、顔を覗き込んだ。

『どうしたんだ！ 誰にやられた!?!』

頬は赤く腫れ、唇は切れて血が滲み、額にも殴られたような跡があった。おまけに全身びしょ濡れで、コート裾からも雨の雫が落ちている。

『とにかく……中に入れ。身体を暖めるんだ。それとも、酷く痛むトコはあるか？ だったら、病院に』

シヨウは急いで鍵を開ける。

そして、ガタガタ震える彼女を抱き上げた。

『だいじょうぶ……おねがい……傍にいて』

『ああ、傍にいる。大丈夫だ。傍にいるから』
マリーを抱く腕に力が入る。こんな頼りなげな彼女は見たことが
ない。

(よくもマリーを！)

腹の底から溶岩が噴出^{ふきた}すようだ。
。やり場のない怒りに奥歯を噛み締めるシヨウだった。

第8話 Offstage「傍にいて…」(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

「12」だけはどうしても漢数字には出来ませんでした。ローマ数字は機種依存文字とかで入りませんし……諦めました(苦笑)

一部分大幅に修正が必要な箇所がありました。うっかり飛ばすところでした(苦笑)

第9話 Offstage「戸惑い」

外は、冷たい雨が降り続けている。

マリーはシヨウの用意した温かい湯船に浸かり、ようやく震えも治まった。

着替えを借りてベッドに腰掛け、差し出されたホットミルクを両手で大事そうに抱え、少しずつ口に運んでいる。なるべく唇の端に当たらないように……傷に触れたとき、彼女は少し顔をしかめた。

シヨウは氷水でタオルを絞り、マリーの頬や額をそっと冷やす。幸い、傷は酷いものではなく、とりあえずは安心する。

『ゴメンね。こんな風に来ちゃって……』

『いや……ホントに大丈夫か？ 横になってていいんだぞ』

『うん、ありがとう。ホント、大丈夫』

『何があったか……聞く気はないけど。でも、病院で診てもらったほうが安心じゃないか？』

シヨウが遠まわしに言わんとすることは、彼女に伝わったようだ。マリーは軽く微笑むと首を振った。

『レイプ……されてないから、安心して』

『ならいいけど。無理はするなよ』

シヨウの優しい言葉に、マリーの頬に涙が伝う。慌てて拭くと、それを隠すように俯き、少しずつ話し始めた。

『私がね、拒んだから……こうなったの』

『拒んだ？』

『もう、嫌だった。キスされるのも嫌で、突き飛ばしたら殴り返されて』

『ちよつと待てよ。それって』

『婚約……解消してって言ったたら、男が出来たんだなって。バッグの中に見慣れないスペアキーが入ってたから、取り上げられたの。ゴメンね……鍵、失くしちゃって』

シヨウは、傷の手当てを終えると、意識的に彼女と距離を取っている。ワンルールの部屋に椅子は一個しかなく、それはベッドから離れたキッチンカウンターの前だ。

この状況で、手の届く範囲にいることは甚だ危険だ。出来る限り、彼女から遠い位置に体を置く方がいい。彼は頭の中で必死に自分に向かって警告する。

だが どうやら限界らしい。

シヨウは椅子から立ち上がると、それを持ってマリーの前に移動した。

そこは、手を伸ばせば彼女の頬に触れ、身を乗り出せばキスすら出来そうなポジションだった。

『俺のこと、話したのか？』

『まさか！ 言ったら怒鳴り込んできてるわ。何も無いなんて信じたくない。シヨウの仕事だって潰されちゃうわ』

『……元々ないけどな』

マリーの的外れな心配に、思わず苦笑いだ。

『ゴメンね。迷惑ばかり掛けて』

『不気味だな』

『何が？』

『君に「ゴメンなさい、ありがとう」なんて言われたら、なんか怖いよ』

『失礼ね。お礼くらいちゃんと言えるわ。今までは……言わなかつ

ただだよ』

調子が戻ってきたのか、マリーはツンと横を向いて拗ねる振りをした。

『そのほうがいい。殊勝なのは君らしくない』

ふたりの間に暖かい空気が流れる。

この部屋の唯一の暖房器具、真ん中に置かれた石油ストーブの上で、スチール製のヤカンが規則正しく揺れていた。

必要最低限のものだけで、何も無い部屋の小さな窓に、どう見ても夏用の薄いカーテンがぶら下がっている。コンクリートがむき出しの壁と床……いくらロスでも、真冬にこれでは寒いはずだ。

マリーの手に『M』のマークがついたマグカップがある。日本でも有名な店のもらい物であった。この部屋には似合いの、だが、彼女には不似合いのソレを見つめながら……。シヨウは思わず近づけてしまった距離を、再び離すべきかどうか思案していた。

『ねえ、シヨウ。いつか、日本に帰るの？』

『え？ そうだな……俺が帰る時は、オスカーを獲って凱旋するか、犯罪者になって強制送還されるかのどっちかだな。喰えなくて野たれ死んでも、白旗だけは振る気はない』

カッコつけたセリフだが、背水の陣を敷くには、これくらいのハツタリは必要だろう。

『調子いいこと言っちゃって。日本で女の子が待ってるんじゃないの？ 帰ってきて、って言われたらホイホイ帰ったりして……』

『気になる？』

『べ、別に！ このアパートにも全然女の子とか訪ねて来ないし……』

…口で言うほど、もてるのかな、って思っただけよ』

シヨウは渡米を決めたきっかけを思い出し、真顔で答えた。

『こつちに来る時、別れてきたんだ。ロスに来てからは女の子と付き合ったことはないな。金で女を買う余裕はないし……一年近く、禁欲生活が続いてるよ。そろそろ限界かな……』

下心はあった。

軽く話を振れば、マリーから誘ってくれるんじゃないか？ とズルイことを考えてしまい……慌てて反省して、冗談だ、と言おうとしたが。

『い、いいわよっ！』

『は？ いいって何が？』

『もう！ 抱いてもいいって言ってるんじゃない！』

こつちが驚くほど裏返った声だ。おまけに、あまりにぶっきらぼうな言い方に……シヨウのほうが固まってしまった。

『嫌なの？ 私のドコが不満なのか言って頂戴！』

『いや……マリー、君ってフィアンセにもそういう態度な訳？ 俺には口説かれてるようには思えなくて』

『あんなヤツのことは言わないで！』

『すまん。でも、今はともかく、最初は好きだから婚約したんだろ？ 最初から、暴力をふるってたわけじゃないんだろ？』

マリーは俯くと、声のトーンを落とす。

『仕方なかったの。彼が初めてで……母に相談したら、結婚しなきゃダメって』

『ゴメン。ちよつと聞き取れなかった。今、結婚しろって、母親に言われたって言った？』

『だから……私の家は敬虔なクリスチャンなの。今でも毎週日曜日

には教会に通ってるわ。子供の頃から女の子は慎ましやかに、って育ったわ。中学に入って性教育を受けたときに、結婚するまで処女を守りなさいって言われて……』

一瞬、自分の頭の中にある翻訳機が故障したのか、と思ったほどだ。

それほど、マリーの話は、これまでの彼女のイメージを一掃した。

第10話 of f s t a g e 9 「告白」

マリーが語った婚約の経緯はこうだ。

あと一ヶ月で二十歳の誕生日を迎える。仕事も、何もかも順調だった。

そんな時、打ち上げの席で酒を勧められ、つい飲み過ぎてしまう翌朝、見慣れない部屋で目を覚ましたマリーの隣にニックが寝ていた。

ニックはマリーの髪に口づけながら恐ろしい言葉を口にしたのだった。『バージンだったんだね、嬉しいよ』と。

彼の言葉を聞いた瞬間、彼女は全身から血の気が引いた。自分を信頼してくれた両親と、神を裏切ってしまったのだ。

(黙っていよう、自分さえ黙っていたら誰にも知られない。パパやママにだけは知られたくない)

そう心に決め、何もかも忘れてしまおうとした。だが、予定日を一週間過ぎても来るべきモノが来ない。『ピルを飲んでると思ってる。この世界の常識だろ?』そんな調子でニックは悪びれる様子もなく……。

マリーはこの時、自らの行いを恥じた。調子に乗って神を軽んじた罰があたったのだ、と。

そして、とうとう耐えられなくなり、母親に打ち明けてしまったのだった。

両親はマリーの軽率さを責めたが、当然、ニックをそのままで済ませるはずもなく。娘を疵物にした、責任を取ってすぐに結婚しろ、しないなら十代で未経験の娘をレイプしたと訴える 烈火のごと

く怒り狂う両親にニツクは……。

『彼は青くなつて、すぐに結婚を申し込んだわ。妊娠はしてなかったけど……婚約は発表してしまつたから』

シヨウは開いた口が塞がらない。

こと宗教に関しては、彼は完全に日本人だ。代々の墓は寺にあるが、兄の結婚式は教会だつた。正月には神社にお参りして……神には願ひごとはするが、裏切る云々の感覚は全く判らない。

もちろん、同じキリスト教でもカトリックとプロテスタントの違いくらいは認識している。だが、アメリカは性に奔放だと思ひ込んでいた。事実、日本と違つて小学校から性教育があり、コンドームの使い方も教える。中には生徒に配る学校もあるくらいだ。

しかも、だ。ドラッグやフリーセックスの坩堝と言われるハリウッドにあつて、そんな女性がいるとは、夢にも思つていなかった。

『ヤツを愛してなかつたのか？ 去年の夏、俺が迫つた時は婚約者がいるつて必死で抵抗してたろ？』

『ああなる前は好きだつたの。女性の扱いもスマートで、何でも知つてて、私の癩癩も笑つて流してくれて、なんて素敵男性かしら、つて』

自嘲気味にマリーは続ける。

『でも、婚約して、すぐに気付いたわ。女性の扱いに慣れてるのは、たくさんの女性と付き合つてるから。十二も年上なんだもの、私より色々知つてて当然だし、聞き流してたのは癩癩だけじゃなくて、私の言葉全部だ、つてね。無知で愚かな子供だつたのよ。あなたが言つた通り、彼は二階のゲストルームで恋人のひとりとお楽しみだつたわ。私が訪ねたら、邪魔するなつて叱られた』

勝気な瞳から、ポロポロ涙がこぼれ落ちた。

『でも、彼の言うことも判るの。だって婚約してるんだもの。彼は私を求めたわ。でも、あなたに逢って、私……』
シヨウは親指でマリーの頬に伝う涙を拭った。

『今までも、殴られてきたのか？』

『少しは乱暴なこともあったけど、殴られたのは初めて。一度寝ただけで親まで引っぱり出して、脅して婚約までさせたくせに、私から心変わりなんて許せない。男がいるなら、婚約者を裏切った女だとタブロイド紙で晒し者にしてやる、って』

『ここに来たのはまずくないか？ もし、撮られたら、君の評判が落ちるだろ？』

心から、マリーを思いやっつての言葉だったが、

『それって……来ないほうがよかったってこと？ 黙って抱かれたほうがよかったって』

『違う！ そっじゃない！』

『じゃあ、言わないで。そんな風に言われたら』

頬の腫れが痛々しい。そっと触れて、そのまま指を髪の中に差し込んだ。身を乗り出すと、自分の胸元に引き寄せる。マリーはシヨウにされるがままだ。

『何で婚約なんかしたのかしら？ あなたに抵抗したのは、婚約者を裏切るのは、夫を裏切ると同じだと母に言われたからよ。夫と同じようにニックに従いなさいって。でも、もう嫌！ シヨウが好き。愛してるの。お願い突き放さないで！』

そう言つと、今度はマリーのほうからシヨウの首に腕を回した。

このまま黙って唇と重ねたら、今夜はもう止められないだろう。マリーもそれを望んでいる。だが……。

『マリー、俺は日本人で……日本では売れてたけど、今は単なるフリーターだ。今の俺は、自分ひとり食うのがやっとなんだ』
彼女を抱き寄せようとした手を止めて、わざわざ話し始める。
この辺りが微妙な律儀さだろう。

『だから、何？ 私も年収を申告しなくちゃいけないの？』
『そうじゃないけど……。ただ、俺はカトリックでもないし』
そう言った瞬間、マリーはシヨウを突き放した。その勢いで椅子から転げ落ちる。

『ちょっと待て！ 何すんだよ、いきなり』
『何よ、今まで散々思わせぶりなこと言っておいて。結局、土壇場で逃げるんじゃない！弱虫……意気地なし！ もういいわ、帰る！』
立ち上がって出口に向かうマリーにシヨウは飛びついた。

『待てって、そんな格好で何処に行く気だ？ 一ブロック行くまでに、裏道に引き込まれるぞ』

シヨウのシャツを一枚羽織っただけの姿だ。
『私がどうなるうと関係ないでしょ？ 放っておいて！』
『そんなわけないだろ……。いや、そうじゃなくて』

マリーの気持ちは判る。だがシヨウにとって、このハリウッドでの明らかな立場の違いは大きかった。しかも、道のりは更に困難を極めることが目に見えている。さすがの彼も強気のセリフが出て来ない。

息苦しいような静寂が漂ったとき、冷たいすきま風に、マリーの身体が震えた。

このままシヨウが背を向けたら、彼女はあのままの姿で出て行く

だろう。気の強さは半端じゃない。

シヨウは覚悟を決め、無言でマリーを抱き上げるとベッドに連れ戻した。

もちろん、マリーは抗議の声を上げようとするが、

『及び腰にもなるだろう。君を抱くってことは、結婚するってこと
だろ？ 決断するのに五分や十分はくれたっていいんじゃないのか
？』

シヨウの言葉にマリーは目を丸くする。

『私……そこまで言ってないわ』

『よく言うよ。結婚するまで処女でいたかったんだろ？ それとも、
一人知ったら後は何人でもいって言うのか？ 俺とは遊びでセッ
クスして、結婚相手は売れてる俳優を探すってんなら、最初に言っ
といてくれよ。後から重いだのなんだの、ゴメンだからな』

余計なことを言わずに抱けばいい、と判ってはいるが、どうも性
分だ。

『重いつて言われたことあるの？』

『男だから遊びでも女を抱けるけど、付き合っときは本気だ』

今度は正面からマリーの腰にしっかり手を回し、引き寄せた。

『ニック・ジョーンズと別れるよ。俺と付き合い合ってくれ。今はこん
なでも、必ずヤツ以上になってみせる！』

『私が好き？』

『ああ……好きだよ』

『私も好き。シヨウが好きよ、愛してるわ。離れたくない。お願い
離さないで』

第10話 offstage「告白」(後書き)

告白します。

実は最初に書いた時、ロスに雪が降らないと知りませんでした(爆笑)

前回、書き直しの時、うっかり訂正を入れ忘れ……そのままになってました。

これまでで最大の失態です。(気付いてないだけでもっとやってるかも知れません)

……次回R15です(宣伝?笑)

第11話 Offstage10「愛しのマリ」(前書き)

ラブエッチ……R15でお願いします。

(苦手な方はパスして下さい)

第11話 offstage10「愛しのマリー」

その夜、ふたりはシヨウの部屋の小さなシングルベッドで結ばれた。

「狭くて悪いな」

「ううん。ねえ、世間の評判通りだと思わないで……期待しないでね。狭いだけで良くなかったって言われたから」

「狭い？ ベッドじゃなくて？」

「バカ……でもシヨウにもそう思われたらどうしよう」

どうやら本気で心配しているようだ。そんなマリーにシヨウは苦笑いを浮かべつつ、冗談めかして言う。

「狭いのならありがたい。俺のコックは日本じゃ並だけど、白人には敵わないさ。仮に物足りなくても、小さいとだけは言うなよ。シヨックでダメになるぞ」

マリーはホツとしたように笑った。だが 今度は自分自身が落ち込みそうになる。ジムのシャワールームで見掛ける連中と比べて……。いや、いま思い出すのは止そう。

マリーの肌を隠しているのはたった一枚、それもシヨウのシャツだ。それを自分の手で脱がした瞬間。溜まらず、息を飲んだ。

日本の友人からメールがくるたび、金髪の美女はモノにしたのか？ と質問される。これまでずっと、肌の色や髪の色で女性を選ぶつもりはない、と答えてきた。今でもそのつもりだ。

しかし……このラテン系の、蜂蜜色の肌は反則だろう。

「キレイだ」

体中を駆け巡る興奮に、思わず口を付いて出たのは日本語だった。

意味が判らず、マリーはきよとんとしている。

『信じられないほど、キレイだ、と言ったんだ』

今度は耳元で囁くと、マリーは小さな声を上げて両手で顔を隠した。

彼女には日本で流行の“寄せて上げるブラ”というのはいらない。上向きで寝転がっても崩れない谷間というものに初めてお目にかかった。

シヨウはそこに、指先でそつと触れる。

久しぶりに触れる柔らかい肌だ。指で触れた場所を、今度は唇でなぞるように確認する。マリーの肌はピンク色に染まり、シヨウが唇で捉えた部分が、激しく上下した。その時、シヨウはマリーの指が必死になつてシーツを掴んでいることに気付く。そして、その指先は微かに震えていた。これほど上気した肌が寒いわけではない、緊張のせいであろう。

「愛してる。マリー」

『シヨウ……判らないわ』

『あ、ああ。ゴメン。愛してるよ』

興奮のあまり、つい日本語が出てしまう。マリーの緊張をほぐさなきゃならないのに、これじゃまるでチェリーボーイだ。

(しっかりしろ！)

思わず、胸の中で自分を叱りつけた。

『シヨウ……私って変じゃない？ 私じゃその気にならない？』

案の定、不安を与えてしまったようだ。

『マリー、その気になり過ぎて、翻訳機が壊れちゃった。たまに日本語が出るけどカンベンしてくれ。愛してるよ、マリー。お楽しみ

はこれからだ』

シトラスの香りだ。

マリーの髪に顔を埋めながら……鼻孔に感じたのはフレグランスではなく、シャンプーの香りだった。場違いな清涼感が妙に扇情的で、頭の中の翻訳機がショート寸前だ。

マリーの首筋に朱色の印を刻み付けたとき、その征服感はいやが上にもシヨウの興奮を煽りたてた。

だがシヨウは、戒律でマリーが嫌がることをするつもりはなかった。体を重ねた後も、あくまでマリーのタイミングに合わせる。

理由は簡単だ。もし、マリーが貪欲なまでにシヨウを求め、多くものを望んだら……正直言っ、その期待に応えることは出来なかっただろう。

だが、マリーは彼の下で身体を震わせ、リードされるのを待っている。その仕草は、シヨウに余裕を取り戻させたのだった。

ニツクによって傷つけられた心と体を、乱暴に扱うことなど論外だ。

彼女を抱く腕に渾身の力を込めながら、決して負担は与えず……。最後まで、自分の欲望を抑えて、マリーが初めての悦びに打ち震えるのを見届けたのだった。

く*く*く*く*

狭いベッドの中で抱き合い、気付くと朝を迎えていた。

雨は止んだ様だ。朝の陽射しが差し込んでくる。周囲の騒がしさでマリーは目を覚ました。子供の声や、子供を叱る母親の声……高

級コンドミニウムじゃ聞くことの出来ない生活音だ。

体を横に向けると、すぐ近くにシヨウの顔があった。黒い瞳は、今は閉じている。闇夜に紛れそうな漆黒の髪は、朝の光に透かしたら綺麗なブルーブラックに見えた。

ほんの少し体を動かすと……ベッドのあちこちから悲鳴が上がった。そういえば、昨夜は壊れそうなくらい軋んでいた気がする。無我夢中でシヨウにしがみ付いていたので、多分、ベッドが壊れて床に転げ落ちて、判らなかつたかも知れない。

(夢中で愛し合い、裸のまま抱き合って眠るなんて！)

とんでもないことをしたはずなのに、これが罪だなんて思えないいや、愛する人とのセックスがこんなに素敵なことなら、誰もが夢中になるのも当然だろう。

『あれ……もう朝か？ 全然、寝た気がしないな』

覗き込むマリーの視線を感じたのか、シヨウが目を覚ました。

『おはよう、ダーリン。気分はどうかしら、後悔してない？』

『ああ、おはよう。後悔？ そうだな、どうかなあ』

『もう！ してない、愛してるって言っただよ！』

朝っぱらから嘔み付きそうなマリーに警戒したのか、シヨウはサツとベッドから降りた。

バスルームに足を向けながら、「日本人に言えるかよ。そんな、こつ恥ずかしいセリフ……」どうやら日本語で言い返してるようだが、マリーにはサツパリ判らない。

『都合が悪くなると日本語に逃げるなんて、卑怯者！ 「サムライ」の恥よ！』

映画の影響で「サムライ」の言葉だけはしっかり覚えている。もちろん、正しい使い方がどうかは判らない。でも、シヨウが立ち止まり、振り返ったところを見ると、それなりに伝わったのだろう。

だが、マリーはこの時、視線のやり場に困っていた。シヨウは全裸で前を隠す素振りもないのだ。

(この無神経さはなんなの!?)

『何赤くなってるんだよ。さっさと来いよ』

『え、何?』

『ひと風呂浴びなきゃ、とても仕事になんないだろ?』

一緒に入ろうと言いたいの判った。

昨夜は、まるで、ガラス細工の壊れ物を扱うようにマリーを気遣ってくれた。甘く蕩けそうな夜を味わった後に、この素っ気なさでは何か物足りない。

『ベッドの上じゃあんなに優しくかつたくせに……キャ!』

小さな声で不満を漏らした瞬間、一気に横抱きにされた。初めて逢ったときからこんな風にマリーを抱え上げる。シヨウのクセだろうか? これまで何人の女性を抱き上げたのだろう、と思うと少し悔しい。

明るい朝の光の下で裸を見せるなんて、ママに知られたら『はしたない!』と叱られることは間違いない。両腕で胸を隠し、『下ろして』と言いかけた時だった。

『愛してるよ。　　恥ずかしいんだからな、何回も言わせるな』

マリーの耳に、昨夜の低く掠れる声が響いた。彼の顔は耳まで真っ赤だ。

この瞬間、裸を見せる躊躇いは霧のように消えた。

『シヨウ、大好き!』

シヨウの首に腕を回すと唇を押し付け、マリーからキスを奪う。そのまま、ふたりの間の境界線はなくなり……バスルームの中は十二月とは言いがたい熱気に包まれたのだった。

第11話 of f s t a g e 1 0 「愛しのマリー」(後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

綺麗に描けた感じのラブエッチシーンだと思うのですが…… いかがでしょうか？

シヨウのセリフは“海外ロマンス小説”を凄く意識しています。

日本人だと思うと「さ、寒い」とか「イタタタ」となりますので、
今後もご注意下さいませ(笑)

第12話 backstage2「レッドカーペット」

）
）
）
）

「もう間もなく、カザハラシヨウ風原生くんが目の前まで歩いてきてくれると思います！ これまでも数回、日本人俳優にもチャンスはありましたが、一度も受賞はありませんでした！ しかし、今回は可能性大です。なんとと言っても、前哨戦のゴールデングローブ賞も受賞されており

……」

真紅のベルベット・ロープが張られたレッドカーペットのすぐ脇、報道陣席から絶え間なく日本語が聞こえてくる。明らかに、借り物らしきタキシードに身を包んだ、日本人カメラマンの姿があった。世界中の報道関係者が押しかける中、限られたパスを手にすることの出来た“選ばれたマスコミ”だ。

『シヨウ……大丈夫？』

シヨウの腕を取り、顔を覗きこむのは、かつて『アメリカの恋人・ラブコメの女王』と呼ばれた大女優マーガレット・フォスレターだ。

マーガレットは、シヨウがオスカーにノミネートされた作品「a complex mother」の主演で、なんと母親役である。シヨウは彼女の息子を演じるために、ブルーのカラーコンタクトを入れ、髪をダークブロンドに染めた。

彼の役どころは、日米ハーフの十八歳の高校生。日本人の父に捨てられたため、大の日本嫌いで日本語は全く話せない役。それを演じたのが、シヨウが二十六歳の冬であった。

契約により、撮影から公開まで、公の席での日本語を禁じられた。

そんな事情を知らない日本のマスコミから、「風原は日本を捨てた！」と、叩かれていた時期もある。

しかし、それもオスカー候補に選ばれたことで帳消しだろう。

『ああ……ごめん。緊張してて、心配は要らないよ、ママ』

シヨウは親愛の証にマーガレットをそう呼んだ。可愛いジョークだ。彼女はお返しとばかりに、シヨウを屈ませると頬にキスをする。その瞬間、一斉にカメラのフラッシュがたかれた。

『ええ、そうね。何も心配してないわ。私の可愛い坊や』

クスクス笑いながら口元を押さえる仕草は、とても四十後半の女性とは思えない。

マーガレットもオスカーとは縁の薄い女優だ。ここ数年はろくなヒット作にも恵まれていない。今回もノミネートこそならなかったが……息子を頼りきって追い詰める、ダメな母親役を熱演し、高い評価を受けた。恋人役から母親役への転機となる作品に出会えた、と彼女自身もマスコミに語っている。

『坊やは酷いよ』

『だってママだもの』

『じゃあハニーがいいかな？ それともダーリン？』

『あら、それもいいけど……あなたと腕を組んでるだけで、ローラが睨んでるわ』

マーガレットの視線の先にいたのは、女優ローラ・ウィリアムズだった。

ふわふわの天然パーマが、肩より少し下で揺れている。黄金の髪が、カメラのフラッシュに煌きを放った。そして、瞳は透けるようなアトランティックブルーだ。日本人が“ブロンドの美女”と聞い

て思い浮かべる、そのまんまの姿であろう。

おまけに今日の装いはゴージャスの一言に尽きよう。ヴィヴィットな朱色のドレスは流行のワンショルダーだ。若干二十四歳で、エスカーダのドレスをこும்妖艶に着こなす美女は少ない。抜群のスタイルとあどけないルックスが、この場にいる男たちの血圧を確実に上げていた。

一月にあったゴールデングローブ賞には、彼女も助演女優賞にノミネートされていた。そのため、仕方なくシヨウがエスコートを引き受けた。共演したCMが今年から全米に向けて流されるので、宣伝活動の一環である。契約書にも書かれた条項なので、新人俳優のシヨウに逆らうことなど出来ない。

去年の夏、そのCM撮影のため、グアムで一週間のロケがあった。年下だと甘く見ていたのが、そもそも間違っていた。ローラの男を誘惑する手管は、免許皆伝の域であろう。ちよとどマリーと喧嘩していたこともあって……思い出すだけで気分が悪い。

『なんで僕なんかにこだわるんだろう？ まだ駆け出しで、しかも日本人なのに……』

契約の関係もあって何度かデートはした。確かにエスコートもしたが、それを脚色して思わせぶりに言い続けるのは反則だろう。

そのせいか、最近マリーの様子がおかしい。今日もそつだ。レッドカーペットはマーガレットと歩くが会場の中では一緒にいようとマリーを誘った。シヨウの気持ちはちゃんと伝えてあるはずだ。なのに……やはりあのことが。

『ねえ、本気で言ってるの？ 可愛い坊やね。あなたは自分の価値に気付いてないのかしら？』

軽く揶揄するようなマーガレットの問い掛けに、シヨウの意識は表舞台に引き戻された。

「価値？ 僕の父が日本大使ってことかい？ それともピアニストの母のおかげかな？」

自嘲気味に答えるシヨウに、マーガレットは声を立てて笑う。

「そんな理由でオスカーが獲れるなら、スキャンダルクイーンのス・ヒルストーンは百万回受賞してるでしょうね。そうは思わない？」

「思うよ。だけど……」

「シヨウくん！」

突然、ハイテンションの日本語が耳に飛び込んだ。振り返ると、見覚えのある民放局の女性アナウンサーが手を振っている。セクシーな黒のドレスで女子高生のような雄たけびを上げられては、周囲の海外メディアもいささか引き気味だ。

マーガレットには日本のファンも多い。一瞬、頭を抱えたシヨウとは逆に、ノリノリでカメラに向かって投げキッスのサービスだ。

「ねえ坊や。あなたはとても魅力的だし、このハリウッドで成功が見込める貴重な男よ。ローラだけじゃなく、ここにいる独身女優の半数は、あなたの首にロープをつけたくて仕方ないはずよ。私だってそう、後十年若かったら、ね」

視線はカメラに向けたまま、ハリウッドスマイルを浮かべて彼女は言った。

「もう、ロープは掛かってるんだけどね……」

日本語を呟きながら、周囲に目をやり、オスカー・デ・ラ・レンタのアイボリーのドレスを探した。オフショルダーでクラシカルなデザインを選んだのはシヨウである。

『何？』

『いや、なんでもないよ、ママ。でも……僕はカウボーイになりた
いんだ』

シヨウはお目当てのドレスを見つけた。一瞬で暗い色の瞳に炎が
燃え立つ、まるでカーペットの赤が映りこんだように。

そのまま、マーガレットに親愛の情を籠めてキスをした。多少は
マスコミ向けのサービスもしなきゃならない。

『そう？ 頑張ってね、ダーリン』

彼の視線の先に気付いたのか、マーガレットは思わせぶりに微笑
み、キスを返したのだった。

）
）
）
）

第12話 backstage「レッドカーペット」(後書き)

気になっていた部分を少し修正しました。

第13話 offstage 11 「秘密の関係」

秘密の友達が秘密の恋人に変わって三ヶ月が過ぎ。

マリーはエージェントを通して弁護士を立て、ニックに婚約解消を要求していた。

彼が、婚約後も数々の女性と不道德な関係を続けてきたことは、誰もが知っていた。証拠写真など、その辺のタブロイド紙を開けばいくつでも見つかる。破談は容易に思われたが……。

二人は周囲に關係がばれてないのをいいことに、わずかな時間を見つけては、アパートで密会を繰り返した。カタチだけとはいえ、マリーには婚約者がいる。シヨウとの關係は、カトリックにあるまじき大罪であった。彼女の両親が知れば怒り狂うだろう。

それだけじゃない。もしこれが、パパラッチに嗅ぎつけられたら……。二人とも未来を失いかねないことは、嫌というほど判っていた。だが、どうにも止められないのだ。

二人は樂園のアダムとイブのように……。
生まれて初めて口にした禁断の果実は、神の存在さえ忘れさせるほど甘く……恋人たちを、愛の闇に引き擦り込んだのだった。

く*く*く*く*

そんなマリーの裏切りを、ニックが見逃すはずはない。

彼に言わせれば、マリーも望んだ行為をしただけだ。それを、口ストバージンを理由に親までを引っ張り出し、結婚を迫った。彼は、結婚はもうこりこりだと思っていたのだ。そんな自分に首輪を嵌め

ながら、年齢の近い男が現れたからといって、ポイ捨てにされては我慢できない。

シヨウ・カザハラ……ニックは感情の映らない灰色の瞳で、手元にあるシヨウの写真とプロフィールを眺めた。

マリーにも相手の男にも思い知らせてやらなければならない。

彼は、マリーから取り上げたスペアキーを左手で無造作にもて遊ぶと、もう片方の手は携帯電話のアドレス帳を開き、ダイヤルボタンを押した。

く*く*く*く*

『ねえ、今度のオーディションはいけそう？』

『芝居を見て貰えたらね』

『ちよつとお！ なに情けないこと言ってるのよ。ハリウッドスターになるんでしょ！』

朝が少し苦手なシヨウは、ベッドに転がったまま中々出て来ない。マリーは毛布の上から枕でシヨウの背中をバンバン叩く。

初めて結ばれた翌朝、シヨウはバスルームでマリーを抱き締め約束したのだ。

マリーと並んで相應しい男になったら正式にプロポーズする、と。

マリーは初めての恋が楽しくて仕方なかった。仕事の合間に、それこそ寝る間も惜しんで、掃除や洗濯・食事の用意まで、かいたいしく世話をする。

もちろん、シヨウが頼んだ訳ではない。むしろ、昼夜問わずやってくるので、束縛感もあるようだ。だが、嬉しそうなマリーの様子

に「まあ、いいか」と言葉を濁す辺り……シヨウにしても、久しぶりの恋愛に浮き足立っていると見て間違いなかった。

今も、マリーは朝食の準備をしながら、何かとシヨウに絡んでいる。

キッチンカウンターのの上には、スクランブルエッグやトマトサラダが彩りよく並べてあった。チン！ とトースターに呼ばれ、マリーは手にした枕をシヨウに放り投げると、部屋の隅にあるキッチンコーナーに飛んで行く。

『なあ、マリー。お前ってホント、良妻賢母になるように育てられたんだなあ』

枕を脇に除けつつ、布団から顔を出したシヨウは、心底感心したように言う。

マリーにはシヨウの本心がわからず、少し不愉快そうに、口を尖らせた。

『どういう意味かしら？』

『いや、正直な感想……。これほど家庭的な女だとは思わなかった。なんか得した気分だな』

ちようどのタイミングで入るように、コーヒーマーカーのスイッチを入れると、再びベッドに近づいてくる。

そして、片手で髪をかき上げながら軽く腰をくねらせ……雑誌“ヴァニティ・フェア”の表紙を飾った時と同じ、挑発的なポーズでおどけて見せた。

『セクシー女優って何かの間違いでしょ？』

その瞬間、シヨウはマリーを腕の中に引っ張り込んだ。

『イヤ……ベッドの中じゃ充分にセクシーだ』

『ちよっと。……もう！ ねえ、シヨウ。トーストが冷めちゃうわ。』

コーヒーも。濃いのは嫌いだって言ったくせに
『トーストより君を食べたい』

第14話 of f s t a g e 1 2 「天国と地獄」 (前書き)

R15: ラブエッチありでお願いします。

(苦手な方はパスして下さい)

第14話 offstage 12 「天国と地獄」

シヨウにとってこの三ヶ月、だいぶ慣れてきたのがこの手のセリフだ。

ダーリン、愛してるよ、君が欲しい。

日本人女性に言ったら、それこそドン引きされるだろう。彼自身、これまで口にしたことのない口説き文句だ。

ところが……マリーは言葉にしないと納得してくれない。言えないと言うと、『愛してないのね』と泣き出す始末だ。それと、別れ際にキスをねだられる事も多い。

人目を気にしなきゃならないのは、シヨウよりマリーのはずだが、『タクシーでも、パーテイの時も強引にキスしたくせに！』と言われるので、甚だ弱っている。

シヨウにすれば、あの時のキスは芝居の延長だ。特にカメラの前なら、キスも、それ以上も厭わない。台本さえあれば、『ハニー』も『マイラブ』も簡単に言えるだろう。

恋人となった今、どこでも気楽にそんな真似は出来ない。思いの籠もったキスは人前でするもんじゃない、と思っている。

ただし利点はあった。シヨウの口から『スイートハート』がこぼれると、マリーはノーと言わない……いや、言えないのだ。

シヨウもそれに気付いていて……あつという間に背後から抱き締め、波打つ髪に顔を埋めた。軽く羽織ったシャツを脱がせると、キヤミソールの肩紐をずらす。

『ブラを着けてないってことは……期待してたって言えばよ』

『ち、ちがうわ』

昨夜、愛し合った情熱の証はまだマリーの肌に残っている。見え

る場所につけると怒られるので、腕の付け根や背中の中真ん中に口づけた。

『ねえ、シヨウ……オーデイションに遅れるわ』

『昼からだ。そんなにかからないさ』

少しずつマリーの呼吸が速くなる。シヨウの太腿に爪を立てる仕草が、本気で困ってはいないと、伝えていた。

その、荒い息遣いの合間を縫って キッチンから、コポコポとコーヒーメーカーの音が聞こえた。

『ねえ……スイッチ切って来なきゃ。苦いのは嫌いでしょ』

『OK。じゃ、手早く済ませよう』

『もっつー！』

キャミソールの隙間から手を差し込み、小刻みに震える頂を指で探り当てる。のけぞる首筋に唇を這わせながら耳元で囁いた。

『怒るなよ、マリー。君が欲しくて堪らない。マイルスウィート……こっちを向いてキスしてくれ』

マリーは振り返り、潤んだ瞳でうつとりと見上げた。

ようやくコーヒーの件を追い払えたようだ。瞳のブルーが一層濃くなり、それはシヨウの心を捕えて放さない。ぼつてりと厚みのある唇は濡れて光っていた。

彼女のセクシーさの象徴とも言われる口元が少し開き、『……シヨウ』その声は切なく響く。

性衝動は激しい方じゃない。どんな状況に置かれても、充分にコントロール出来ると思っていた。だが、マリーの声は、シヨウを制御不能に陥れる。

それは、苦い初体験と同じ感覚で……少し悔しくもあった。

「マリー……君は俺のものだ」
口から零れる日本語は、彼の興奮の度合いを示している。

タイトスカートの裾から手を入れ、愛すべき場所を探し当てそこはシヨウを求めていた。マリーの下半身を無防備にすると、そのまま満たそうと動き始める。

だが、彼女の肩が震えて……

『ああ。すまない。マリー、大丈夫だよ。さあ、こっちだ』

『ごめんなさい。私……』

正面を向き合つと、何度も謝ろうとする唇を塞いだ。せめて、神に許された体位で愛し合いたいと　そういうマリーを愛している。それでも、初めて抱き合つた時に比べたら、格段に積極的になつたほうだろう。シヨウの唇が、マリーの大事な場所に触れても怒らないくらいに……。

『マリー、ごめん。……ちょっと余裕ない』

さすがに、寸止めはきつい。それでも、出来る限りゆっくり、そして深く重なつた。

この時のマリーの顔を見るのが好きだ。彼女は恥ずかしいと嫌がるが、そこは譲れない。正面から抱き合つと、いつも彼女の表情が見られる。何度も、何度もキスを繰り返し、愛の言葉を交わし合つて、一緒にクライマックスを迎える。

愛の行為にゴールが見えてきた、その時だった！

玄関のドアが激しく揺れ　ガチャガチャガチャ、と何度もノブを回そうとする音が聞こえた！　尋常な音じゃない。

女はともかく、男がすぐに引けるわけがない。かといって、続け

ることが可能な状況でもなかった。

『シヨウ、何？ いったい、誰が』

人差し指で彼女の言葉を制すると、最後まで突き動かしたくなる衝動を必死に抑え、マリーから体を離れた。シヨウは、おさまりのつかない下半身を宥めつつ、床に落ちたバスタオルを取ろうと、足を下ろした直後

なんと、鍵が掛けてあったはずのドアが、勢いよく開いたのだ。

『誰だ！？』

毛布でマリーを隠し、背中に庇いつつ、厳しい声でシヨウは誰何すいかする。

だが、その答えは背中から聞こえた。

『パパ……ママ……』

第14話 of f s t a g e 1 2 「天国と地獄」 (後書き)

御堂です。ご覧頂きありがとうございます。

……好きですね、寸止めは(苦笑)

色んな作品でやってるかも知れませぬ。(ゴメンよヒーロー)
サクサク上げますので、引き続きよろしく願います。

第15話 offstage13「スキャンダル」

『えっ!?!?』

呻くようにマリーが呟く。シヨウは心臓を鷲づかみにされた気分だ。

マリーの父親は顔を引き攣らせ、大股で部屋に入ってくる。

『待って、パパ。シヨウを殴らないで!』

毛布で体を隠したまま、シヨウを庇おうと父親の前に飛び出した。すると、そんなマリーの頬を、父親はいきなり叩いたのだ。

『お前は……よくも、こんな真似を。恥を知れ!』

『ゴメンなさい……パパ、でも』

『ちょっと待って下さい! 俺が彼女を誘ったんだ、だから……』

シヨウが割って入ろうとした瞬間、

『そんなことは判っている! このジャップめ、よくも娘を墮落させたな! 貴様のような悪魔は日本に叩き返してやる!』

そのまま、シヨウはベッドから引き摺り出され、壁に叩きつけられた。マリーの父親は元軍人だ。身長はそうは変わらないが、体格はシヨウの軽く倍はありそうだ。

しかも、ベッドでお楽しみの最中だったのだ。そんな格好では抵抗することもままならない。数発殴り飛ばされた後、鳩尾を蹴られ、シヨウは床の上で呻いた。

『やめて。お願いやめて! シヨウのせいじゃないわ、お願いだから殴らないで!』

マリーは毛布を放り出すとそのまま立ち上がろうとした。

上はキャミソールを着ていたが、下は……ミディアム丈のタイト

スカートが、ギリギリのラインまで捲れ上がっている。しかも、右膝辺りに下着が引つ掛かったままだ。必死でスカートの裾を引き下げ、下着までは穿けない。

未婚の娘のあられない姿に、母親は両腕を掴んで引き止めた。

『メアリー、何て恥ずかしい姿なの？ 早く服を着なさい！ ニック、この子にコートを着せてやって。ここから連れ出すのよ！』

両親は彼女を本名のメアリーで呼ぶ。だが、それどころではなかった。

マリーはニックの名前を聞き、表情が一変した。シヨウの鼓動も速まる。両親に気を取られていて、二人とも気付かなかったのだ。マリーの母親のすぐ後ろに、ニック・ジョーンズが立っている。ニックは薄笑いを浮かべてマリーに近づき、キャミソールの上からコートを掛けた。その時、彼の指が肌に触れたのは、明らかにわざとだろう。

『いやっ！ 触らないで……シヨウ、シヨウ助けて！』

半狂乱で泣き叫ぶマリーの声が聞こえる。だが、さすがに急所に入れられると、ケンカ慣れしてないシヨウでは起き上がれない。

母親とニックに引き摺られるようにマリーは部屋から連れ出された。

『役者志望だと？ 仕事が欲しくて娘に言い寄ったんだな。このハリウッドで、黄色い猿の出番などない！ いいか、二度と娘に近づくな。警告を無視したら貴様を強制送還させるぞ！ 判ったな！』
そう言い捨てると彼も部屋から出て行った。

だが、シヨウにもプライドはある。一方的に殴られたのは仕方ない。乗り込まれた状況が最悪だった。アレを見せられたら、娘の親なら男を叩きのめすだろう。だが、一言も言い返せず、このまま惚

れた女と引き離される訳にはいかない。

シヨウは渾身の力で立ち上がると、ジーンズだけ穿いてドアから飛び出した。階段を駆け下りると、アパートメントのドアを体当たりで開け、転がるように外に飛び出す。

マリーの乗せられた車を見つけ、近づこうとした瞬間、ニックは後部座席のドアを閉め、シヨウに近寄った。

何の警告もなかった。

ニックは、いきなりスタンガンを押し付けたのだ。焼けるような熱さとシヨックで、息が止まる。屈んだ隙に数発パンチを喰らい、そのままシヨウは地面に倒れ込んだ。

『人の女に手を出した罰だ。思い知れ。クソガキ!』
吐き捨てるように言ったニックのセリフが、いつまでも耳の中に残っていた。

くわくわくわくわく

『この三月だ。それまでに、先の見込める仕事が取れなかったら契約は終了だぞ。その約束で預かってるんだからな。一番頑張らなければならぬ時に、女だと？ 呆れて物も言えないな。目指すのはハリウッドスターか？ それとも金髪美女とセックスしたいだけかい？ やる気がないならさっさと日本に帰ってくれ!』

肋骨二本にヒビが入っていた。打ち身と痣あざで、とてもオーディシヨンどころじゃない。タイムリミットまで一ヶ月。取り返しのつかないシヨウの醜態に、エージェントからはボロクソに叱られた。

あれから……

マリーからは何の連絡もなかった。彼女の携帯に掛けたが繋がらない。シヨウには詳しい住所も、連絡先も判らず……仮に判っていても、トップスターの彼女には近づくことも出来ないだろう。

そして、その直後、最後のオーディションに賭けるシヨウの目にとんでもない記事が飛び込んで来たのだった。

『「ブラッディエンジェル」のマリー・ドレイク、年下の新恋人と同棲中!』

ふたり寄り添って部屋に入る様子や、マリーにねだられた別れ際のキスまで、タブロイド紙に掲載されてしまった。

記事には、「相手は二十三歳の日本人、俳優を目指しており、周囲はマリーが利用されることを心配している」などと、わざわざシヨウの名前を出さない辺りが小賢しい。それでいて、関係者や身近な人間にはわかるように書いてあるのだ。

シヨウ・カザハラは有名女優と寝て仕事を取ろうとしている。マリー自身がディレクターに彼を推挙した経緯から、噂は助長され……。打ち消すことが出来ないまま、ビザの滞在期限まで、後数日となるのだった。

第16話 of f s t a g e 14 「愛と責任」

両親の名前を使えば延長は簡単だ。

母はジュリアード音楽院の講師もしている。一年の半分はアメリカに滞在することで、グリーンカードを持っていた。父は……言わずもがなであろう。家族としてなら残れる。

或いは、アクターズスクールではなく、ちゃんとした大学に入ればFビザが取れるのだ。そうすれば、ほぼ無期限で滞在が可能だ。

マリーとの関係をこのままには出来ない。だが、名も無き俳優志望の日本人では、彼女の両親は許してくれないだろう。父の名を出せば……。

そこは迷路だった。ミラーハウスの真ん中で、たったひとり取り残された気分だ。無数の鏡には、所在なげに立つ無様な自分の姿が映っている。

進む道を見失い、悩み続けた結果 胃に激痛が走り、シヨウは倒れたのだった。

く*く*く*く*

目が覚めた時、真っ白な天井が見えた。点滴のパックが吊り下げられ、自分の腕に針が刺さっているのが判った。

「シヨウ、気がついた？」

久しぶりの日本語にドキッとする。それは、母だった。

「母さん？ どうして？」

「久しぶりにロスに戻ってきたのよ。そうしたら、あなたが倒れたって連絡があつて……」

母、響子は呆れたように溜息を吐く。

「神経性胃炎から胃痙攣を起こしたんですって。胃に穴が開いてるかもしれないって言われたわ。入院治療が必要だそうよ、場合によっては手術も。一度、日本に戻りなさい。いいわね」

母の言葉を聞いたとき、シヨウはホツとしたのだ。

(病気でリタイヤなら、言い訳が出来る)

彼の脳裏を過ぎった言葉は、あまりに情けないもので……それはすぐに、羞恥と嫌悪に変わった。

「どうしたの？ もうギブアップ？」

母は意地悪そうに笑っている。

「日本から来たアイドルで、一年もスクールにいたヤツは初めてだって、皆に言われたよ」

「そう、新記録ね。おめでとう」

「自信はあつたのにな。無謀だったのかな」

「そうね。皆そう言ったわ。でも、決めたのはあなたよ」

「ビザが切れるんだ。今のエージェントは事務所を探してくれたところだから、もう契約は出来ないって言われた。社長に頭を下げて戻るか……でなきゃ、違約金を払わないと」

「いくら掛かるの？」

「……五千万」

「少ない金額じゃないわね」

「どうしたらいいのかわからない。やっぱり、才能なんかなかったのかも知れない。運だけだったのかも……」

涙を溢すのだけはグツと堪えたが、一度弱音を吐き出すと止まらなくなった。

「でも、どの面下げて日本に帰れるんだ！ 社長に頭を下げて一生飼い殺しなんて。それくらいなら、もう役者なんか」

「じゃあ簡単ね。お父さんに頭を下げなさい。社長さんには話を通してくれるだろうし、違約金も契約も綺麗に始末してくれるわ。自分では何も出来ない子供でした、と謝れば、許してくれるわよ」

あまりに挑戦的な母の言い草に、シヨウモカチンとくる。

「普通の母親なら、胃痙攣まで起こした息子に、もう少し優しいんじゃないのか？」

「あらそう？ こう言って欲しいんでしょ？ よく頑張ったわね、もう充分よ、これ以上頑張らなくてもいいのよ。……なんてね」

「別に……そういう訳じゃ」

悔しいが、凶星だった。

「それとも……大丈夫よ、あなたにはきつと才能があるわ。母さんがお金を出してあげるから、もう少し頑張りなさい。とか？」

母は、閉口する息子に追い討ちをかける。

「女性を利用するくらいなら、親を利用した方が楽なんじゃない？ 一年前の件は、相手も年上だったし、あなたの言葉を信用したけど……今度はそうもいかないでしょうね。まさか、タブロイドに書かれた『俳優志望の二十三歳の日本人』が自分じゃないとは言わないわよね？ どっちにしても、胃の穴が塞がったら、お父さんには釈明する必要があるでしょうね」

両親、とくに母は、四人の子供たちに、ああしろこうしろと命令はしない。だが……。

シヨウは一年前、交際中の女性とトラブルを起こした。それが渡米を早めた原因になったのは事実だ。そのことを、周りの人間から「女を捨ててアメリカに逃げた」と嘲笑された。

その噂が真実でないことを両親に説明したとき、父から言われた言葉がある。

「人生に不測の事態はつき物だ。重要なのは、どう対処できるかだ。困難に立ち向かうための協力は惜しまない。ただし、責任を放り出して逃げようとした時は、退路は断たれるものと覚悟しなさい」と。

一年前とは訳が違う。結婚を約束したマリーに対して、責任を取らなければならぬ。シヨウは迷った挙句、とんでもないことを言い出した。

「もし、芸能界を引退して、ハーバードのロースクールに入りたいと言えば、父さんは認めてくれるだろうか？」

「そりゃ、日本最難関の大学を出てるんですもの、もったいないとは思ってたけど……何？ 俳優やめて、弁護士にでもなるつもり？」
「肩書きが欲しいんだ、彼女の隣に立つ。でなきゃ、逢いに行けない」

さすがにその言葉に母も怒ったようだ。

「シヨウ！ いい加減になさい。それは誰に対しても失礼な言い方だわ！」

「責任があるんだ！ マリーには俺だけなんだ。早く迎えに行かないと、あの男が……」

自分を蹴飛ばしながら笑ったニツクの顔が忘れられない、マリーの助けを呼ぶ声も。

焦りと迷いで間違いを犯そうとする息子を、母は一喝した。

「責任は“持つもの”よ！ そんな苦々しげな顔で“取るもの”ではないわ！ それが判らない限り、あなたに居場所はないわ。アメリカにも日本にも、ね」

母の言葉は、スタンガンより彼の心にショックを与えた。厳しいが真実だろう。だが、ようやく腹が据わった。

「胃の穴が増えそうだ」

「穴の一つや二つで泣き言は言わないのね。平坦な道に敷かれたレールではなく、険しい山を選んだのはあなた自身でしょう？」

決して甘やかそうとはしない。さすがに母はよく判っている、シヨウが追い込まれば追い込まれるほど強くなる、ということを。

「判ってるよ。いや もう、判ったからいいよ。父さんは、ワシントン？」

「東京よ。二週間ほど戻ってるわ」

「そうか……帰るよ、日本に。戻って父さんに頼んでくる」

シヨウはビザが切れる前日、帰国を決意したのであった。

第17話 offstage 15「逢いたい」

マリーは実家に連れ戻され、仕事以外はほとんど軟禁状態となっていました。

携帯も取り上げられ、シヨウのナンバーも判らない。逃げ出すことも考えたが、駄目押しのようにすっぱ抜かれたスキャンダルに、身動きが取れなくなってしまふ。

それは明らかにニツクのリークによるもので……しかも、関係を続けるなら、今度はシヨウの名がフルネームで載るようにしてやる、と脅してきたのだ。

そんな中、予め決まっていた映画の撮影が始まり、彼女は泣く泣くロスを後にしたのだった。

マリーが二ヶ月ぶりにロスに戻った時、ニツクは上機嫌で笑いながら言った。

『婚約、解消してもいいぜ。ヤツも姿を消したし、お前の不貞も明らかになったからな。俺だけなら慰謝料がどうか言われたが……もう、支払う必要はないだろう』

『姿を消した……ってどういうこと？ 彼に何をしたの？ 何もしないって約束でしょ！』

『知るかよ。アクターズスクールはやめたって話だ。エージェントとの契約が切れて、ビザが取れなかったんじゃないのか？ 日本に帰ったんだよ。何を言われたか知らないが、あの坊やはさっさと逃げ帰っちまったんだ。可哀想にな、捨てられて』

シヨウの帰国を知って両親からの拘束はなくなった。だが……
『婚約者のいる身で、神をも恐れぬ大罪を犯したんだ。この先、人並みの結婚が出来ると思うな！ 異教徒の東洋人と夫婦の関係を結んで、お前の身体は汚れきっている。もし、再びこんな真似をした時は、親子の縁は切る！』

両親の怒りは本物だ。だが、この時のマリーの心は、彼らの元にはなかった。

喰えなくて野たれ死んでも、白旗だけは振る気はない。

シヨウはそう言っていた。

ニツクの言葉など信用する気にはならない。

だが、急いで調べてもらった結果、以前登録していたエージェンシーからシヨウの名前は消えていた。

オーディションも受けてはおらず、アクターズスクールも本当に辞めていたのだった。

やっと返してもらった携帯でシヨウに連絡をしたが、その回線はすでに解約済みだ。

もちろん、その前にシヨウはマリーの携帯に何度も伝言を残したのだが……それはニツクによって消されている。

マリーはシヨウと過ごしたアパートメントにも駆けつけた。だが、部屋は引き払ったあとで……。

シヨウの怪我も、病気も、マリーには判るはずもない。

(どうして……何処に行ったの？ 私を置いて、本当に日本に帰ったの？)

ニックと関係した時は、両親の言葉に恐れおののいたが……今度は違う。

ショウに逢いたい。罪を犯しても、もう一度抱かれない。彼を愛している。日本に行けば逢えるだろうか？ そんな風に思い詰めるマリーだった。

第17話 offstage15「逢いたい」(後書き)

今夜はこの辺で……

今回は「backstage」でオスカー当日のお話です。

ご覧いただきありがとうございました(礼)

第18話 back stage3「レストルームの攻防」

）
）
）
）

「ねえ、シヨウの恋人ってローラなの？ マリーとは別れたってホントかしら？」

「さあ。でも、日本にもアメリカにもたくさんいるんじゃない？ ローラもマリーもそのうちの一人でしょ」

マリーはコダックシアターのレストルームにいた。

そこは、全体的に落ち着いた色調の家具で統一されたスペースだった。仕切りのついたパウダールームは、覗き込まなければそこに誰がいるか見えない作りだ。瀟洒なムードをかもし出しているオーケ材の三面鏡に、ノミネート女優にしては冴えない表情のマリーが映っている。

「ここならシヨウが入ってくることは出来ない。彼には会いたくない。今はまだ……」。

そんな思いを抱え、独り佇むマリーの耳に飛び込んできたのが、さっきの言葉だった。向こうからマリーの姿は見えないのだから。当然、こちらからも見えない。だが、声だけでもそれが誰だか判っていた。

今日のコダックシアターは、石を投げたらハリウッドスターに当たる、というほどの混み具合だ。加えて、報道陣や映画祭スタッフの数も半端じゃない。だが、グリーンルームの奥にあるレストル

ムまで入り込めるのは、招待客とそのエスコートのみである。
声の主はプレゼンターとして呼ばれた女優とそのエスコート
役の……確か、妹のはずだ。ノミネートされている自分のほうが、
立場は上に違いないのだが。

『実家は日本の上流階級ですつてよ。親はビバリーヒルズに豪邸を
持つてるつて……ほら、タブロイド紙に載ってたゴールドコースト
の別荘。あれはすでにシヨウが相続した財産だつて話』

『マリーとの？』

『あれはタヒチ。ハワイにもあるんですつて』

『主演映画も撮り終えたんでしょ？ すぐに一本二千万ドル級の俳優
になるわよ。羨ましいわ。私も恋人のリストに入れてもらおうかしら』

二人は、冗談とも本気とも取れる口調で声を立てて笑った。

レストルームを出て行く音がする。

マリーがホツとして立ち上がったとき、目の前にいたのは、噂の
お相手、ローラ・ウィリアムズだった。

今やシヨウはタブロイド紙の常連だ。

毎号のように各紙が彼のモテモテぶりを書きたてる。

オスカーが囁かれ始めたこの一ヶ月は、日本とアメリカのマ
スコミが競争するかのよう書き立てるから、余計に白熱している。

そして、今、最もホットなニュースが、この目の前にいるローラ
との熱愛報道だった。

『あら、マリー、こんなトコで会うなんて変な気分ね』

ローラのバースデーは十一月だ。その日に、シヨウは彼女のためにシューベルトのセレナーデをピアノ演奏してくれた。と、ローラはタブロイド紙のインタビュアーに答えていた。

それも彼女の部屋で……朝まで、二人きりのパーティを楽しんだ。そう話したのだ。

もちろん、シヨウは「ローラの夢の中で過ごしたんだろう」と一蹴したが……。

『ねえマリー、今年のドレスはいつもと違うのね。もっと濃い色の、派手なデザインが好みじゃなかった？』

ローラとマリー、この二人は年齢も近く、そのセクシー度で比較されることも多い。

ダイエツトはしないと宣言し、そのボリュームのある体型とフアンイフェイスのギャップを売りにしているローラは、キャリアの上からもライバルだ。

というより、ローラの方が極端にマリーをライバル視している。マリーが、抜群のスタイルをしながら、それを見せることを嫌がり、自分は演技力で認められたいとインタビュアーに答えたことも面白くないのだろう。その上、ゴールドングローブ賞には自分がノミネートされたのに、アカデミー賞は入れ替わるようにマリーがノミネートされたことも理由の一つに違いない。

これまでのドレスは、セクシー女優のイメージに合わせて着ていただけで、マリーの趣味じゃない。それに今年は、

『ええ、そうね、このドレスは……』

シヨウが選んでくれたものだ、と言おうとした。

『私のドレス、シヨウが選んでくれたのよ。朱色が似合っつて。どうかしら？』

先にローラに言われてしまった。悔しさに唇を噛み締めたが、
『シヨウは……赤は嫌いよ。彼なら選ばないわ』
派手な色もデザインも彼の好みじゃない。それだけは自信があつた。

ローラの目は一瞬煙ったが、

『へえ、彼のことなら何でも知ってるってわけ？』

『……長い付き合いですもの。シヨウと』

私は。……そう続けようとしたマリーの言葉を遮り、ローラは身を乗り出した。そして、マリーの耳元に口を近付けると、信じられないことを言ったのだ。

『じゃあ知ってるわよね？ シヨウって口で愛し合うのが好きですよ』

マリーの表情が固まった。それを見て、ローラは得意げに言い募る。

『それに……彼って、ゴムを着けるのが嫌いなよね。私はピルを飲んでるからいいけど……』

まさに勝ち誇った笑顔だ。マリーはローラから視線を逸らす。

『助演女優賞の発表は二十二時過ぎですってよ。それまで、ここにいたほうがいいんじゃないかしら。シヨウが受賞した時、祝福のキスは私がするべきでしょう。あなたもそう思わない？』

言いたいだけ言つと、ローラは颯爽とレストルームから出て行った。

上手く頭が回転しない。だが、ローラの言ったことは事実だろう。カトリックのマリーは、口で愛し合う行為は禁止されている。後

るから、というのも獣の体位と呼ばれNGである。

中絶はもちろんだが、本来の目的から離れるので、避妊もダメなのだ。マリー自身は避妊はせず、すべてシヨウに任せている。結婚しない限り、直接関係を結ぶことはあり得ない。たとえ、お互いの安全が証明されていても……。

シヨウにとって、マリーとのセックスは不完全燃焼なのかもしれない。

そんな風に思い始めると、いつまでもレストルームから出て行くことが出来なくなってしまう……。

マリーは再び鏡を見つめ、溜息を吐いた。

シヨウと出会った時はブロンドに染めていたが……。中途半端にくすんだ様な栗毛はいつそブルネットならいいのと思う。濃紺の瞳も気に入らない。ローラのような澄んだ青が羨ましい。肌の色も…彼女の陶器のような肌とは比べるべくもない。

かつては、シヨウが、女優マリー・ドレイクの隣に立つ資格がないことを思い悩んだ。

だが今は……マリーのほうが、その自信を失いかけていたのだった。

く
く
く
く

第19話 offstage16「もう一度…」

シヨウと無理矢理引き離されてから二年半。

マリーはテレビ女優から映画女優に転向した。主演もこなし、仕事は順調だ。

数人の男性からデートに誘われ、食事やドライブ、パーティに付き合っが……心はあの日に置き去りのままだった。

何をしても、思い浮かぶのはシヨウとの日々だけだ。

プライベートの日本への旅行は両親に許されなかったが、映画のキャンペーンで一度だけ日本に行く事が出来た。

もちろん、必死で探したが……日本の芸能界からもシヨウ・カザハラの名はすでに消えていた。

そして、二度と会えないかも知れない、と諦めかけた頃、連続ドラマのクレジットに彼の名前を見つける。

それは人気ドラマ「捜査官シリーズ」のゲストで、彼が演じているのは……なんとレイプ殺人犯だった。

マリーは、テレビの画面を食い入るように見つめていた。

一見ただけではとてもシヨウに思えず、何度もクレジットで確認して、ようやく納得したのだった。

マリーは彼の登場シーンを何度も繰り返し見た……しっかりと見たいのに涙が溢れて、とても見てはられないのだ。

そんな彼女の姿を、人が見たら変に思うだろう。

狂ったように女を犯す殺人犯を、ハンカチを握り締め、涙を流しながら見つめる視聴者なんて、全米中探しても、他には見つかるま

い。

シヨウは諦めてはいなかった。

まだ、このハリウッドで挑戦を続けていたのだ。

テレビ界から遠ざかってはいたが、マリーにもそれなりのコネはある。「捜査官シリーズ」のスタッフに連絡を取って、シヨウの所在を探すことも考えたが……。

マリーの脳裏に、あの時のスキャンダルが過ぎった。

せつかく、チャンスを掴もうとしている彼の足手まといにはなりたくない。

それに、もし彼にとって自分が過去の存在になっていたら。それを考えると、一步も動けなくなるマリーだった。

ドラマの放送から一週間が過ぎ、マリーの心は不安と期待に揺れ続けていた。

そんなとき、彼女の携帯が鳴ったのだ。

二年半前から、何度機種を替えても、番号だけは替えられなかった。シヨウとの繋がりはこれしかなかったからだ。

マリーからシヨウの番号には、一度違う人間が出てから、二度と掛けてはいない。

表示には番号のみで名前はない。見知らぬ番号には、留守番電話になってから出るようにしている。いつもはそうだ。だが、テレビでシヨウの姿を見て、甘い予感にマリーの胸は震えた。

『……はい』

『やあマリー、俺、判る？』

まるで三日ぶりに掛けてきたような口ぶりだ。それは、忘れようもない声であった。

『殺人犯さん、捕まったんじゃなかったの？』
言いたいことはたくさんあった。でも、今は、少しでも声が聞きたい。

『留置場にも電話はあるよ。弁護人を探してるんだ』

『私は弁護士じゃないわ……他をあたれば？』

『君でないとダメなんだ、保釈申請をしたい。もう、手遅れかな？』
シヨウの言葉の意味は判った。……マリーは泣きそうになる。

『殺人犯にプロポーズされたって困るわ……』

『判ってる。実は、来月全米公開の映画に出るんだ。もちろん、主演じゃないけど……何番目かだけど、一桁でクレジットに載る』

『ホント？ 凄い！ 良かったわね、本当に良かった』

『逢いたい……もう一度、チャンスが欲しい。マリー、君に逢いたい』

『私も……逢いたい。逢いたいわ、シヨウ』

その夜、二人はロス市内のホテルで再会を果たした。

二年以上もの間、遠く離れていたが、愛し合う二人の前に、時間も距離も無意味だと、マリーは知った。シヨウの香りに包まれ、その腕に抱き締められ……一度は失った至福の時間を、二人は一瞬で取り戻したのだった。

『これからは……昔のように会える？』

『……ゴメン。普通りって訳には』

シヨウの胸に抱かれていたマリーが、ふいに身体を起こした。

『じゃあどうして？ どうして連絡をくれたの？ 遊びなら、放っ

ておいて欲しかった。私……帰るわ!』

途端に涙をこぼしてベッドから下りようとすするマリーを、シヨウが慌てて引き止める。

『待て待て……遊びつてなんだよ。早とちりするな! ようやく役者として、仕事って呼べるものになりつけたんだ。昔のように、口スで君の帰りを待つだけの生活には戻れないよ。それに、来週から撮影でニューヨークなんだ』

確かに、それはシヨウの言う通りだろう。

だが、マリーには、どうしても確認しておきたいことがあった。

『離れてた間……恋人、作った?』

『う……』

そんな躊躇はイエスと同じであろう。

『いたんだ。今も付き合ってるの? その人とは別れてくれる?』

『いや、違う。そうじゃないんだ。あの……恋は、してない。だから、恋人はいない。君と逢えなくなってすぐ、数回……数人と遊んだ。仕事もなかったし、どうにもやるせなくて。でも、本当にそれだけなんだ。二年以上、そんな馬鹿げた遊びはやっちゃいない。君に追い付きたい一心でここまで来たんだ! 信じてくれ!』

シヨウのその言葉を、マリーは信じた。

そして二人の恋の時間は、再び動き始めたのだった。

第20話 offstage 17「デート…嵐の前」

しかし、シヨウの言う通り、彼の生活は以前とはまるで違った。アクターズスクールは辞めていたがUCCLAに入学しており、大学と仕事の往復だ。

そして、以前彼が言っていた自分の「運の良さと強さ」は、一旦追い風に乗ると恐ろしいまでにその本領を發揮した。

十二月にはシヨウが出演した「twelve thieves」が公開された。

それは、当初、オーディションで落とされた作品だったが、急な配役の変更で、最終審査に残っていたシヨウに声が掛かったのだ。

ヒットメーカーであるネイサン・ギルバート監督に使ってもらえたおかげで、シヨウのオーディションはグッと楽になる。

小さな役どころではあるが、彼は次々に出演を決めて行ったのだ。つた。

ロサンゼルス市内のなるべく小さな映画館を探して、二人はやって来ていた。

マリーは変装して帽子を目深にかぶっているが、シヨウはそのまままだ。

『ねえ、サングラスも掛けなくていいの?』

『映画のポスターの横に立ってても、誰も俺だとは気付かないよ。だろ?』

映画のポスターは隅の四角い中にシヨウの顔があった。確かに、同一人物とは思えない。

『でも、シヨウ・カザハラって書いてある』
『ああ……ようやくスクリーンデビューだ。年が明けたら丸四年だ
な』

観る前は、作品名だけで役名は黙ったまま、大した役じゃない、
と言っただけで教えてくれなかった。だが……それなりの出番の多さと重
要さ、そして、クレジットは何と四番目に入っていた。

『凄いじゃない!』

『有名どころがラストに回ったからだよ。撮影は二週間もなかった』
『でも、凄いわ。メチャクチャカッコいい役じゃない。絶対にファ
ンが増えるわ!』

『増えるもなにも、今はファンがいないって』

そんな軽口を叩きながらふたりは映画館を出て、そのまま街を歩
く。

『次の作品は何?』

『ん? えっと、同じワーナーの作品だ。二月には公開される。主
演はウィリアム・キングだよ』

誰でも知ってる有名俳優の名にマリーは興奮する。自分自身より、
シヨウにチャンスが回ってきたところが嬉しくて仕方ない。

『彼って素敵よね? 身近で見てどうだった?』

マリーには全く他意のない、無邪気な質問なのだが……シヨウは
ムツとしている。

『そんなこと男の俺に聞くなよ。四十過ぎのオッサンだぜ。ああい
うのがタイプなのか?』

『そうねえ、スクリーンで見たら素敵に見えるわ。ハリウッドで二
番目に素敵ね』

『まだ上があるのか?』

いい加減、シヨウは呆れ顔だ。

『そう「twelve thieves」でスクリーンデビューした、プラチナブロンドの彼が一番素敵よ』

映画でシヨウは、サラサラのプラチナブロンドに髪を染めていた。国籍も年齢も不詳の役だ。あまりに綺麗なクイーンズイングリッシュに、誰も日本人とは思わないだろう。

『どんな大スターより、彼のことが世界中で一番好き』

マリーはシヨウの腕に抱きつくくと、頬にキスしながらそう言った。ストレートな言葉にシヨウのほうが赤面する。

『やだ……シヨウ、真っ赤よ』

『だから、苦手だつて知ってるだろ。頼むからカンベンしてくれ』

『何をカンベンするの？シヨウ』

マリーはシヨウの反応を楽しむように、わざとらしく体を押し付けてくる。

今のシヨウは、二……いや、三年前と違って、生活費ギリギリというようなことはない。

なぜなら、ハリウッドではエキストラでも、日本の映画界とは比べ物にならないほど好待遇だからだ。シヨウも当然、俳優組合に所属している。全米での上映館数三千を超える作品で、クレジット四番手なら、日本の大作映画で軽く主演する以上の出演料になる。

シヨウは、マリーとの久しぶりのデートを楽しむため、最高級のホテルを予約していた。もちろん、考えていることはひとつだ。

映画館からすでに、かなりの我慢が続けている。

怒ったような顔でマリーを黙らせようとしたが……。

『シヨウ。エッチなこと考えてるんでしょ？ そんな顔してもダメ

』

お見通しとばかり、マリーにあしらわれているのだから、洒落に
ならない。

『頼むよ、マリー。久しぶりの、しかも、やっと取れた休みな
んだ。年末年始は、撮影でオーストラリアに行く。だから……少し
はカッコつけさせてくれよ』

『いいわよ。じゃ、キスしてくれたら。これ以上はカンベンしてあ
げる』

少しも判ってない。

このままじゃ、その辺のホテルに飛び込むことになりそうだ。

『……マリー』

抗議の声を上げようとしたが、彼女の顔を見た瞬間あきらめ、路
地裏に引っ張り込んだ。

『えっ？』

今度はさすがにマリーも驚いている。

『キス、したらいいんだな。キスだけで済まなくなっても怒るなよ』

『え、あの、待って。ねえ、シヨウ』

マリーは慌てて、冗談よゴメンなさい、と言い掛けたが、シヨウ
はその口を塞いだ。

薄暗い路地裏の、ビルの壁にマリーを押し付け、シヨウは彼女の
唇を貪るように奪い続けた。マリーとのキスは軽い挨拶じゃすまな
くなるのだ。そんなことは判っていたはずなのに……。

シヨウは体をピタリ添わせて、キスを続ける。彼の欲情に触れ
たとき、まさか、本気でこのまま、とマリーは困惑した。

そしてその戸惑いは、重ねた唇を通じて、シヨウにも伝わってい
た。

『マリー、スカートの下は何も着けずに歩く勇氣はあるかい？ マ
イスウィート』

『あ、あの、シヨウ……ここで？ でも、こんな場所じゃ』

本気で悩んでいるマリーを見て、シヨウは吹き出した。

『悪戯が過ぎるぜ、マリー。少しは良い子にしてなきゃ、頭から食
つちまうぞ』

今度はシヨウがしてやったり、とばかりに笑う。三年前とは違っ、
大人の余裕も見え隠れする態度に、マリーは想いを深めて行くのだ
った。

とはいえ、そのあと直行で予約を入れたホテルに飛び込み……デ
イナーをルームサービスに変更する辺りは、まだまだ発展途上とも
言えよう。

第21話 offstage 18 「恋をする時間」

恋も仕事も……底をついて止まっていたシヨウの時間が動き出す。それは見事に、彼自身の予想を覆すほどの上昇力を見せるのだった。

捜査官シリーズで殺人犯の天才ピアニストを演じた俳優と、人気映画「thieves」シリーズのニールツクスが同一人物と判るや否や、それはあちこちで取り上げられ話題になった。

しかも、シヨウ・カザハラは素顔は？ となるとほとんどデータも映像もなく、謎の俳優とすら呼ばれる。

明けて一月、日本で「twelve thieves」が公開されると、日本のマスコミはこぞつてシヨウ・カザハラ、いや、元トップアイドルの風原生のことを書き始めた。

当然、日本からも取材の人間が訪れ、シヨウにインタビューを申し込んだが……。

彼はそのほとんどを断わらざるを得なかった。

理由は、大女優マーガレット・フォスレターとの共演となった「a complex mother」。その契約で日本語だけでなく、日本人を思わせる行動すら禁止されたからだ。

シヨウ・カザハラとしてのインタビューは受けるものの、あくまで英語を使い、昔話は一切しない。一線を画したまま相好を崩さない彼を、日本のマスコミは『風原は日本の芸能界をバカにしている。アメリカ人になったつもりようだ』と書き立てた。

それは、彼が所属していた事務所を、違約金を支払うことで強引に辞めた結果でもあったが……。この時のシヨウにとって、日本の

芸能界は敵だらけで、叩かれるのもやむを得ない状況にあった。

しかし、それは海の向こうでのこと。全米では、その間も、次々に出演作が公開される。

それも、十代の高校生から三十代のインテリ警官　ピュアな少年から嫌われ役までなんでもこなすのだ。どんな役も、まるで無色透明な粘土のようにピッタリ型に嵌まって染まりきる。

アメリカのマスコミは、「本物のシヨウはどれ？」と題して彼の演技力の高さをこぞって褒めた。そして、彼が二十六歳でUCLAの演劇科に通う学生と知ると、ファンが一目見ようと詰め掛けたくらいだ。

それほど、役柄に応じて髪を染め、瞳の色すら変えるので、素顔の彼をファンは知ろうとした。また、そんなシークレット要素が彼の人気を高めていることに気付くと、映画会社は余計に彼を隠そうとしたのだった。

一方、マリーはあまりに急激なシヨウの人気上昇に、気持ちを追いつけずにいた。それに、ようやく交際を再開させたのに、逢う時間がない。とうとうマリーはシヨウに、UCLAを辞めて欲しい、と頼んだが……。

『再渡米のチャンスを買った時に、父と約束したんだ。骨を埋めるつもりなら、専門の大学に入り、ちゃんと卒業すること、って』
『でも、もう成功したのよ。大学に行く時間がもつたじゃないわ』
『俺はそうは思わない。学ぶべきことはたくさんあるよ。それに、約束は守るべきだ』

シヨウは家族の絆を大事にする。それは、マリーが彼を信頼する理由の一つでもあった。

だが、マリー自身はシヨウを選んだことで両親からほぼ絶縁状態だ。

『私は……両親より、あなたを選んだわ！　あなたは私を優先してはくれないの？』

『優先してるさ。いつか君の両親にも必ず認めてもらう。お互いに親を切り捨てることは最良の選択じゃないだろう？』

シヨウの言うことは正しい。わずかな時間を見つけては、マリーに逢いに来てくれる。

だが、ほぼ二十四時間、工作中すらシヨウのことでいっぱい彼女に比べて……。シヨウは彼女から離れた瞬間に、別のことで頭がいっぱいのようなのだ。

それは、仕事がほとんどを占めているが、大学や友達、家族……考えたくないが、マリー以外の女性の存在すら疑ってしまう。

そんな時、ハイエナの如きパラッチが、愛し合うふたりの姿を、強引にスポットライトの下に引き摺り出したのだった。

それは、夏公開のSF映画のヒロインをやるマリーを狙ったものだった。婚約破棄からずっと浮いた噂のないマリー・ドレイクに新しい恋人が出来たらしいと聞き、パラッチが彼女に張り付くと、旬の俳優が引つ掛かったというわけだ。

『セクシー女優マリー・ドレイク、新進俳優シヨウ・カザハラと熱愛中!!』

そんなタイトルでタブロイド紙に掲載された。

二人の記事はこれが二回目だが、前は「日本人のS・K」というインシャルのみだったので、ある意味出世に違いない。

少し前、大学の後期が終了し、進級が確実になったシヨウはマリ
ーを連れてタヒチにバカンスに行った。

ボラボラ島に、シヨウが祖父から相続した別荘がある。そこはプ
ライベートビーチなので、さほど人目も気にせず、水着姿で戯れる
二人の様子を空から盗撮したものだ。掲載された中には、トップレ
スのマリーがシヨウと抱き合い、その“最中”を思わせるポーズも
あり……本紙は飛ぶように売れた。

シヨウは、テレビで演じたメイクラブシーンの印象も強い。ピア
ノを使ったそのシーンを見て、三十〜四十代の既婚女性から『不倫
したいナンバーワン』の称号を貰ったほどだ。

そこに、マリーとの奔放なセックスを見せ付けられ……。彼のイ
メージは、奇しくもマリー同様、セクシー男優に傾いて行くのだっ
た。

第21話 offstage18「恋をする時間」(後書き)

御堂です。ここまでありがとうございます。

執筆時は「盗撮」だったんですが、ブログ掲載時にNGワードに引っ掛かったらしく、仕方なく「空撮」に変更(苦笑)
今回、元に戻させて頂きました。

第22話 offstage 19 「恋人はアメリカン」

マリーは写真に激怒した。撮影したカメラマンと出版社を訴えると言ったが……。

『大したことじゃない。適当に追い払って無視してればいいだろう？ 交際がばれた以上これからも付き纏われる。気にしてたらきりがない』

シヨウは、軽く流して取り合ってくれない。

『どうして？ 私があんなに恥ずかしい思いをしたのに、どうしてシヨウは怒ってくれないの？ とっても個人的な……シヨウにしか見せないようなシーンを撮られたのよ。私たちのセックスを大勢の前に晒されて……どうしてシヨウは怒らないの！？』

『怒ってるさ。でも、他の連中を見てたら判るだろ？ 怒って喚くほうがもっと恥を掻く。訴えたところで、あの写真が記事と相違ないかどうか……本当にセックスしてたのか、と聞かれるほうがよっぽど恥ずかしいだろ？』

『それは……でも、放っておいたらもっと追い回されるわ！ 毅然とした態度をとらないと』

『それが裁判とは繋がらないだろ？』

『シヨウは平気なの？ 信じられない！』

『俺には、そんなにムキになる君のほうが信じられないよ』

はつきりモノを言い、公に白黒つけなければ気がすまないアメリカ人と、物事の決着を精神性に委ね、グレーはグレーのままですせる日本人との差だ。

復縁してから半年が経ち、蜜月は過ぎた。

二人の恋が、新たなステージへと上がるために、再びハードルが

姿を現す。

それは、シヨウの人氣が急上昇したことがきっかけで、国民性の違いとなって立ちはだかり 加えて、日本から届いた「スキヤンダル」で決定的なものとなった。

始まりは、日本国内で発売されたシヨウの過去のセックススキャンダルだった。

アイドル時代に噂のあった女性の名前が次々挙げられ、挙げ句に、ひとりの女性が週刊誌に顔写真入りのフルネームで、シヨウとのセックスの一部始終を暴露したのだ。

日本では、その真偽を巡って、蜂の巣を突いたような騒ぎになっていた。

しかも、それに乗じて同じような告白がたくさん出る。もちろん、ほとんどがヤラセだったが、中には多少なりとも付き合いのあった女性もいて、携帯のツーショットまで持ち出されては何も言えない。

おまけに、シヨウには契約があり、日本人としてのコメントは一切出せなかった。それが、マリーにはやるせなく、過去の噂を現在の浮気にスライドさせ、シヨウを責め始めた。もちろん、シヨウには何の身に覚えもないことだ。

それは、出逢った頃の本音をぶつけあうコミュニケーションとは違い、嫉妬心をむき出しにした醜いもので……この時のマリーの姿は、お世辞にも可愛いとは言えないものであった。

く*く*く*く*

そんなある夜、シヨウの部屋で、二人で過ごしていたところに客があった。

かつてのすきま風だらけのアパートメントとは違い、少しはマシな部屋だ。

日本語の記事をわざわざ英訳して送り届けるという、無神経なファンにご立腹のマリーをようやく宥め、キスしてベッドルームへ、というタイミングに、玄関のベルが鳴った。

『来客の予定ってあった？』

『いや、まさか……』

『ひよっとしてディーブなファン？』

『……』

まさかと言いたいところだが、今年に入ってから、目を追ってシヨウの人気は高まっている。それに伴い、グルーピーのようなファンが増えて困っていた。

管理人がいてオートロックのアパートメントに引越したのも、出入り自由のアパートでは彼らが部屋の前、いや、中まで入ってきて、ヌードで迫ったりするからだ。玄関を通るだけでも、脱いだばかりの下着が投げつけられる始末だ。

誰とでも寝る男だと思われるのは心外だが、再渡米で契約を結んだエージェントのJJ ジェイク・ジェファースンはコレを利用するべきだ、と言う。

『それだけセックスアピールがある、と思われてるんだ。元々、酒もタバコもやらないだろう？ うぶな純愛男より、女慣れしてセックスも上手いイメージの方が仕事が増える。せっかくだ、勘違いさ

せておけばいいさ』

『イメージも勘違いも結構だが、俺はマリーを裏切る気はないぜ』

『ああ、それでいいよ。間違ってもマリーを捨てて日本の女に鞍替えはするな。全米から総スカンを食らうぞ』

『それって……同じアメリカンならOKってことか？』

シヨウを思つての言葉だとは判っている。だが、相変わらず正攻法以外は受け入れるつもりなどない。

『ハリウッドでの成功まで後一步だ。今が最大のチャンスだ。ここを掴めば向こう十年、いや、ハリウッドで成功した初めてのアジア人と呼ばれることになる』

『……日本人にもオスカーを取った女優はいただろ？ 候補なら、ここ数年で何人もいたし、アジアで括るならもつとだ。俺が初めてじゃない』

『バカ言え。そんな連中は、看板を背負つて鳴り物入りでやってくるんだ。ハリウッドにとつちやお客様みたいなものだ。だが、お前は違う。brown eyes at noble (黒い瞳の貴公子)」「A perfect man (完璧な男)」「そう呼ばれている。客ではなく、ホストに立つことが許された お前はハリウッドが生んだスターなんだ。いいか、日本人の恋人だけは作るな。遊びならいいが……マリーと別れても、それだけは忘れるな』

JJにしたら真剣そのものだ。もちろん、ノーと言つつもりはないが……。

『JJ、これだけは覚えておいてくれ。国籍や髪の色で恋人は選ばない。俺は、マリーと結婚する』

『ああ、いいコメントだ。何かあればそれを使おう』

『ミスター・ジェファソン……』

シヨウはそれ以上言つのを止めた。

彼は彼なりにシヨウの成功を願ひ、少しでも有利なように考え、動いてくれている。無論、彼自身の成功も掛かっているのには違ひない。それでも、毛色の違う二十代の若造をセールスするのは相当な苦勞だろう。

その苦勞に報いたい。シヨウは「」を、心から信賴していたのだ。つた。

第23話 of f s t a g e 2 0 「奇襲」

『シヨウ、どうする？ 管理室に電話してみる？』

『いや、ここまで来たんだ。エージェンシーの人間かも知れない。出てみるさ。でも君はこつちに居てくれ』

『私を隠すの？ クローゼットに押し込める？』

言葉が足りなかったのか、マリーは不機嫌になる。シヨウに存在を否定されたと思ったのだ。

『プレゼントが爆弾かもしれないし……頭のいいハイエナの可能性もある。君を守りたいだけだよ。わかったかい、マリー』

シヨウは軽くマリーの腰を引き寄せ、ピツタリ身体を添わせると口づけた。

『すぐに追い出してね。ベッドが冷めないうちに戻ってきて……』

マリーは、彼より熱めのキスを返しながら、膝をシヨウの脚の間に割り込ませる。誘惑の仕草もだいぶ慣れてきた。

『マリー……。そんなやり方は教えてないぜ』

『自習よ。勉強は好きなの』

マリーはクスクス笑うが、その間も忙しなく玄関のベルは鳴っている。シヨウはキスを諦め、マリーを寝室に残し出て行くのだった。

いまだにしつこいハイエナ……パパラッチが彼らの周辺に張り付いている。アメリカ国内で、昼間デートするのは難しくなった。そんな連中が策を弄したのでなければいいが。

シヨウはかなり身構えながら、ドアの前まで来ると短く声を掛けた。

『誰だ？』

「シヨウくん？ 私よ……麻美です。お願い、あなたに会いに来たの……開けて」

シヨウは信じられない声を聞き、思考がフリーズした。

「ねえ、シヨウくんでしょう？今のそうだよ？ねえ、お願い」
「あ……さ、み？麻美って、ちよつと待て……なんで」
覗き穴から彼女の姿を確認すると、シヨウはドアを開ける。

「シヨウ！逢いたかった」

彼女は部屋に飛び込むなり、シヨウに抱きついた。

「麻美……どうしてお前がここにいるんだ？ いったい、何をしに来たんだ？」

「ごめんなさい。でも、どうしても待つていられなくて、不安で……。会いに来たの。ごめんなさい……怒った？」

「ちよつと待てよ、意味がよく……」

目の前に立つ女、結城麻美は日本で活躍する女優だ。超一流とは言いが、実力派と呼ばれる部類だろう。一六〇を切る程度の身長、細身で優しい面差しをしていた。

十六歳、高校二年のときに、一つ年上の彼女と出逢い、そして……麻美はシヨウの初恋の女性で、初体験の相手でもあった。

『シヨウ！ その子は誰？』

無下に突き飛ばす訳にもいかず、立ち竦むシヨウだったが、後ろから喉を含んだ声が投げつけられ、我に返った。

振り返ると、そこには、裸にバスローブを羽織っただけのマリーがいた。

麻美も驚いて声の主に視線を向ける。

「あの人、マリー・ドレイクなの？ 噂は本当だったの？ どうして？」

小さな声で呟くと、責めるようにシヨウを見上げた。

シヨウには訳が判らない。麻美が訪ねてくる理由も、責められる理由も心当たりがない。彼の中では、すでに終わった関係であった。

呆然とするシヨウに、今度はマリーが怒鳴りつける。

『シヨウ、答えて頂戴！ ただのファンなら早く追い出して！』

とりあえず、これ以上マリーの機嫌を損ねるわけにはいかない。

『マリー、彼女は……日本の友人だ。よく判らないけど、何か理由があつてやつてきたみたいなんだ』

『ガールフレンド？ それだけ？』

『ああ、そうだ』

苦しい言い訳だ。それだけの相手が東京からロサンゼルスまで半日掛けてやつては来ないだろう。

「シヨウくん、どういうこと？ どうしてガールフレンドになるの？ 彼女はここに住んでるの？」

今度は麻美から質問が飛ぶ。シヨウは頭の中の自動翻訳機を一旦外し、日本語を呼び出した。

「麻美……いや、結城さん。話は聞くよ。だが、申し訳ないが今日の出直してくれないか？ 明日、時間を作る。だから」

「どうしてそんな風に言うの？ 私を追い出して、彼女を泊めるの？ 酷いわシヨウ、ずっとあなたのこと信じてたのに！」

「待てよ、それがよく……」

どうも話が噛み合わない。シヨウが頭を抱えた時、麻美がマリーに向かって直接話し始めた、それも英語で。

『あの……私はシヨウのフィアンセです。お願い、彼を返して！四年間ずっと愛してきたの。ううん、彼が十六の時からだから、もう十年よ……お願いします』

それにはシヨウも面喰らった。

『ちょっと待て！』『あ、いや、ちょっと待て、何を言い出すんだイキナリ！』『誤解だ、俺にもよく……』

混乱の極致だ。日本語と英語のちゃんぽんになっている。

慌てるシヨウを無視して、マリーは無言で奥に入り、次に出てきたときには洋服に着替えていた。

その間もシヨウは麻美と押し問答だ。だが、シヨウにはマリーのことを気になり、麻美との会話に集中できない。そのためか、一向に話は要領を得ない。

『マリー！ 待て、ちょっと待て！ 説明させてくれ。誤解なんだ』

『もういいわ。痴話げんかなら二人でやって頂戴。もうたくさん！』

『待てよ。彼女は何か誤解してる。とにかく話して……』

その言葉に今度は麻美が反応する。

『誤解ってどういうこと？ 渡米する直前に言ったじゃない。必ず』

戻る、戻ったら結婚しようって！ 私、その言葉を信じてたのよ』

「待てよ、それは」

躊躇するシヨウにマリーが一言……『言ったの？』

『それは……言ったけど』

バシンッ！！ その瞬間、容赦なく平手打ちが飛んできた。

『最低ね、シヨウ。あなたって、最低の男だわ!』

『違う……あ、いや、違わないけど、違うんだ。とにかく俺が好きなのはお前なんだって!』

あの時のことを、この修羅場で一瞬で説明しろと言われても、出来るはずがない。麻美に対する想いが決定的に冷え切った時のことなど、簡単に言えるものか。

『どうしてなの? 愛してる、幸せにするって言ったくせに』

「麻美、いい加減にしてくれ!」

『あなたの婚約者は私よ。浮気なんて許さない!』

出て行くこととするマリーを止めようと、必死の思いから、シヨウはつい余計なことを口にしてしまう。

『麻美、そんなことを英語で言うなっ!』

まさしく……それを英語で言うのはマズイだろう。

自分の失言にハツとして、玄関でヒールを履こうとするマリーを見ると、彼女はシヨウに冷ややかな視線を向けた。

『それって、私に聞かれたくないってことなのね。そう……秘密の話は、日本語でするといいわ』

『違うんだ。聞いてくれ……俺は』

ダンッ! とハイヒールで裸足の足を踏まれ……シヨウは片足を上げて飛び回った。あまりの痛さに声も出ない。

『さようなら! あなたに追いつくほど落ちぶれちゃいないわ!』
合鍵をシヨウに投げつけ、マリーは出て行った。

いつかの、マリーの両親に急襲された時ほど無防備な格好ではないが、上半身は裸だ。ジャケットを手に取り、追いかけてようとするが……。

「行かないで! お願い。捨てないで……シヨウくん」

後ろから抱き止められ……シヨウはかつての恋人を、振り払うた
イミングを逃したのだった。

第24話 of f s t a g e 2 1 「過去の爆弾」

数日後、シヨウは撮影現場でスタッフにコトの顛末を話していた。
『なるほどね、それで……マリー姫のお怒りを買ったわけだ』
そう言っただけは大笑いだ。

案の定、麻美の来訪をパパラッチに撮られ、翌々日には「日本人の恋人発覚」と書かれてしまう。

すぐに日本にも伝わり、騒動は大きくなるだろうと思うと……頭が痛い。

『笑いごとじゃないよ。携帯も出ないし、コンドミニウムも締め出されて……言い訳くらい聞いてくれてもいいだろう。思わないか？』
『すぐに追わないからよ。女はいつだって優先して欲しいのよ。そうしてくれたらライバルがいても許せるものよ』

今回のラブストーリーの相手役である、五歳年上の女優にそう諭される。

『それは……』

確かにまずかったかもしれない。

でも、ちょっとくらい猶予を与えてくれてもいいはずだ。彼女が踏みつけた足は、今も青紫に腫れ上がって走るのも辛い。いくらなんでもやり過ぎだろう。

マリーは感情の表現も激しければ、上下幅の振りも大きい。万事に控えめなシヨウには持て余す時もある。

だが、そこに魅かれているのも確かだった。

『で？ ジャパニーズ・ボムはどう処理したの？』

『まだ解体出来てない』

『家にいるの？』

『出て行かないんだ。日本に帰ろうとしない。無理に追い出して、トラブルでも起こされたらもつと面倒だし……。彼女の事務所の迎えを待ってるんだ。だが、いつ爆発するのかと思ったら、女は怖いよ』

『セックスするために、結婚の約束をしたんじゃないの？ 悪い子ね』

『それは違う。結婚を口にしたのは、抱いた後だ』

自慢にはならないわ、とばかり、彼女は肩をすくめて見せた。

『マリーとは本当に結婚する気？』

『ああ、もちろん。フラれない限りは……』

『なら少しでも早く、爆弾を処理して仲直りするのね』

曖昧な微笑みを見せつつ、誰か爆弾処理班を寄越してくれ、と本気で願うシヨウウだった。

く　＊　＊　＊　＊　＊

あの夜から麻美はシヨウウの部屋にいた。その代わり、彼が家を出てホテルを泊まり歩いている。マリーを訪ねたが、こつも完璧に無視されては、シヨウウにはどうしようもない。

ひとりで部屋にいと、どうでもいいことまで思い出してしまふ。そう、初めて麻美を抱いた時のことか……。

彼女とはデビュー作で共演し、恋人役を演じた。初っ端から軽いキスシーンがあつて、そのせいか、シヨウウは終始彼女を意識し続けることになつてしまふ。共演が終わり、携帯アドレスを聞く機転す

らシヨウにはなく、それきりになるはずの二人だった。

ところがある日、事務所に言われて向かったマンシヨンの一室で、彼女に再会した。

それは、実年齢より上の、女に慣れた役を演じるために、プロデューサーが出した厳命だった。「シヨウに女を抱かせる」と。早く済ませましよう、とさっさと服を脱ぎ始めた彼女に、落胆を感じたシヨウだったが……。拒否しきれず、そのまま麻美を抱いてしまう。シヨウは愛情のない関係を結んだことに落ち込み、その後しばらくは後悔に苛まれた。マリーの初体験に共感したのも、自分自身が似たような思いを経験したせいだ。

そして、一度は途切れた麻美との関係だったが……。

シヨウは彼女を忘れ切れなかった。そして、最初の麻美の行為が、弱小プロダクシヨンゆえの已むに已まれぬ事情があったと知り、あらためて交際を始める。

それが、シヨウが初めてマリーに逢った、あのパーティの少し前のことだった。

「だから、何度も言うけど、結婚の約束はなかったことにして欲しい、と連絡したはずだ。二度と、日本には戻らない、と」

「そんな……。あなたはお互いの両親の前で、結婚させてくださいって言ったのよ。たった一週間で心変わりなんて許せないし、認められないわ」

もちろん、理由はあった。それは、父には援助を頼むために話してあった。だが、それ以外は、母すら詳しくは知らないだろう。

それは、麻美に対しても同じだ。言わないと決めた以上、言うつもりはなかった。

「結婚の意思がなくなったことを、弁護士を通じて連絡したはずだ。それが、婚約解消となるなら、慰謝料も払う、と」

「慰謝料なんて受け取ってないわ。了解してないもの。私たちは婚約したままよ」

「正式にご両親にも連絡が行ったはずだ。いいか麻美、裁判で離婚は決定できても、結婚は誰にも強制できない。俺たちの道は四年前に別れたんだ。いや、本当は……」

シヨウはその先の言葉を飲み込んだ。本当は、最初から重な
つてなかったのかも知れない、と。

「私は、ずっとあなたを思ってきたの。いつか戻ってきてくれるってそう信じてた。ねえ、シヨウくん、もう一度やり直したい。あなたのためなら何でもする。このまま、ここにいてもいいわ。仕事を辞めたって構わない。お願い、マリー・ドレイクとは別れて……お願い」

話し合いは平行線を辿り続けるのだった。

第25話 offstage22「必要な嘘」

誤解を与えた責任は自分にもある、時間を掛けて、麻美を説得しようと思っただが……。気が短く、即断即決のマリーにそんな悠長な対応が、許せるはずもなかった。

「誤解だというなら、すぐにそう伝えて出て行ってもらって。あんな女を家に泊めるなんて信じられない！ それだけでも裏切りよ！」
マリーは電話口で責め立てる。

「今、彼女の事務所の人間に迎えに来てもらってる。話し合いが済み次第出て行くよ。言っとくけど、俺は家では寝てないぜ。誰かさんが泊めてくれないから、ホテルを渡り歩いてるよ」

「他に婚約者がいる男を泊めるわけにはいかないわ！」

「俺は婚約者のいる女を部屋に入れたけどね」

「大失敗だったわね！！」

ガチャン！ と電話は切られた。

全く……ケンカ腰にもほどがある。

その点、麻美はシヨウを追い込むようなことは言わない。だが、決して譲ろうとはせず、無言のプレッシャーで攻撃してくるのだ。

どっちにしても女は怖いし厄介だ……。シヨウは二十七歳にして悟りを開いたような心境だった。

麻美が家に飛び込んできてから一週間後、彼女の所属事務所の社長が迎えに来た。彼らは、JJの用意したホテルの一室で話し合いをすることになる。

この時、日本でのシヨウの評判は落ちるところまで落ちていた。そこを突かれ、どんな事情であれプロポーズしたなら、ちゃんと結

婚すべきだ、と社長から詰め寄られる。

だが、一度言い出したら譲らない、信念を曲げないのが、シヨウの長所でもあり欠点でもあった。断固、麻美と結婚の意思はない、と拒否するが……。膠着する双方の間にJJが入り 考える時間をやって欲しい、仕事がひと段落すれば、必ずシヨウを日本に帰し、話し合いにも応じる。

そんな約束を交わして、麻美らを帰国させたのだった。

「JJ！ 話し合いには応じるが、どれほど時間を貰っても、考えなおすつもりは全くない！ お前だつてそれくらい……」

「判つてる。でも、こうでも言わなきゃ引き取ってくれないだろう？ 後は弁護士に任せればいい。二度と、彼女と二人きりで会うなよ」

JJの言葉に、シヨウの表情は一瞬で曇る。

「騙したのか？ 守るつもりもない約束を……俺に嘘をつかせたのか！」

「人生に必要な駆け引きだ。彼女も、冷静になつて考える時間があったほうがいいだろう？」

「俺は嘘をつく気はない！ そんなのはゴメンだ！」

「いい加減、子供じみた癪癢はやめてくれ！ 大人の対応が出来ないなら、誰彼かまわず口説いてセックスするのはやめろっ！」

「彼女とは……アサミとは真剣な付き合いだった。だから、プロポーズもした。撤回するには、するだけの理由がある」

シヨウはその黒い瞳で、真っ直ぐにJJを睨んで言った。

誰彼かまわず、口説くような真似は一度たりともしたことはない。当時の彼が、若く愚かであったとしても、今と寸分変わりなく真摯で真剣な想いだった。

自分の中の“真実”を否定してしまつたら、マリーに対する想いまで偽りになつてしまつ。

だが、そんなシヨウモJJから見たら、まだまだ青い、としか映らない。

『なら、その理由を教えてください』

『……言いたくない』

『頭を冷やせ、坊や』

JJは呆れた顔で首を振りながら出て行った。

シヨウモ、自分の言うことが奇麗事に過ぎない、と、気付いてはいたのだった。

く*く*く*く*

その夜、マリーがシヨウモの部屋を訪ねてきた。久しぶりに顔を見て、シヨウモもホツとする。

『ご覧の通り、彼女は日本に帰ったよ。もう来ることはない。これでやっと二人で過ごせる。嫌な思いさせて悪かった。許してくれよマリー……愛してる』

珍しく、シヨウモから愛を囁いた。マリーが投げつけた合鍵に軽くキスすると、再び彼女に手渡す　ところが、マリーからは何の反応もない。

『どうした、マリー？』

『彼女に会ったわ』

『え？』

『アサミよ。彼女、あなたの子供を墮ろしたって……ホント？』
『……』

いきなり、後ろから撃たれた気分だ。言葉が出ない。
そんなシヨウを見て、マリーは哀しそうに笑った。

『相変わらず嘘のつけない人ね。そう……だからプロポーズしたのね？』

『マリー……そのことは、いつか話そうと思ってた。でも』

『あなたは、自分の子供を死なせても平気な男なのね』

『違う！ そうじゃない！ アサミは君に何を言った？ 俺が墮胎を望んだって言ったのか？』

『違うの？』

『違う！』

『でも、あなたはハリウッドでチャンスを掴もうとしてた。二十二で、大学生で、彼女はあなたの未来のために諦めた、そう言って泣いてたわ』

『それは……』

全てが嘘じゃない。だが、相手のいない所で非を唱えるのはフェアじゃないし、マリーが信じるとは思えない。

『彼女が何を言ったのかは知らない。でも、俺は知らなかった。もし、聞いてたら、不安な顔はしたと思う……でも、渡米は諦めて、その時に結婚してたさ。嘘はつかない』

『だから、罪の意識でプロポーズしたのね？ でも、申し込んだ以上は、約束を果たすべきよ』

『待てよ。どういう意味だ？』

『彼女と結婚すべきだわ』

『馬鹿な、俺が愛してるのは君だ』

『後から割りこんだのは私よ』

言いながら、マリーはシヨウからその手に戻されたばかりの合鍵

をスツと差し出した。

シヨウはそれを受け取らず、両手を上げて、マリーに背を向ける。

『待てよ。なあ、待ってくれマリー。アサミとはもう終わってる。俺が誰のためにここまで頑張ってきたのか、判ってるだろう？』

『終わってないわ、あなたは責任を取るべきよ。死なせた命に対する責任を取って……お願い、シヨウ』

『君は何も判ってない。俺の言葉を信じないのか？ 俺より、彼女の言葉を信じるのか？』

『シヨウ、私はこれ以上あなたと付き合えない……ごめんなさい。あなたが信じられないの』

それ以上の拒絶はなかった。“愛してない”より“信じられない”は遙かに重い。

『それは……別れたいということか？』

『ええ、そうよ』

『OK、じゃあ行けよ。もう二度と逢えなくて構わないなら、俺以外の誰かに抱かれることが平気なら、行けよ、さあ！』

シヨウはドアを開け放ち、マリーをけしかけた。それは賭けだった。

カトリックで中絶は何より重い罪だ。彼女もそう考えるだろう。だからこそ言えなかった。それに、プロポーズした理由を話せば、取り消した理由も話さなきゃならない。

この時、シヨウはその賭けに、見事に負けたのであった。

第25話 offstage22「必要な嘘」(後書き)

御堂です。ご覧いただき、ありがとうございます。

「奇襲」辺りの三人のやり取りは作品中でもお気に入りのシーンです。シヨウの混乱ぶりを書くのが楽しくて……彼には迷惑でしょうが(苦笑)

全体的に、本作の会話はとても気に入ってます。ハリウッド調のレトリックが好きなので、精一杯イメージしたつもりなのですが……伝わってるかな？

今日はこの辺りで、次回は再び「backstage」です。

第26話 back stage 4「セレモニー直前」

）
）
）
）

「やあ、はじめまして、だよな？ 風原くん」

不意に後ろから日本語で話しかけられ、シヨウは振り返った。

まさか、コダツクシアターのグリーンルームで、日本語が聞けるとは思っていなかった。

そこに立っていたのは、日本人俳優の沖倉瞬だ。四十代後半の彼は、ハリウッド映画数作品に出演している。二年前には、シヨウと同じアカデミー賞助演男優賞にノミネートされた経験もあった。

日本にいた頃、かなりの俳優・女優と共演してきたが、その中に彼はいない。これが全くの初対面だ。

「はい。はじめまして、風原生です。沖倉さんですよ、お目にかかれて光栄です」

そう言うと、シヨウは軽く頭を下げて挨拶する。

「いやいや……こちらこそ。『twelve thieves』で見たときは全く判らなかつたよ。まだ、今回のノミネート作品のほうか、昔のイメージが残ってたかな。いい作品だよな。泣ける作品だ」

「どうもありがとうございます」

こういった日本式の挨拶は久しぶりだ。

シヨウは非常に礼儀正しい男だ。アイドルと呼ばれた十代の頃からそれは変わらない。業界人・仲間うちでは、かなり真面目な人間

で通っていて、同じ事務所の連中からは委員長とニックネームを付けられたほどだ。

だが……なぜか、俳優“風原生”のイメージはそんな彼とは真逆であった。

彼に与えられる役の多くは、家族に恵まれないアウトローな人間がほとんどだ。しかも、それはハリウッドに来ても同じである。

決して、選んでいる訳ではない。少なくともシヨウ自身はそうだが、JJの言った、イメージコントロールは、本来の彼とはかけ離れており、そのストレスはかなりのものである。

「ところで、随分モテてるみたいだけど……さっき一緒にいた金髪の子が、例の彼女かい？ アメリカ人にしちゃ背が低めかな？」

彼が言ってるのは、ローラ・ウィリアムズのことだろう。彼女は公称で身長一六三センチとなってるが、実際は一六〇もないはずだ。例の、といった辺りに力が入る。多分、日本でも尾ひれが付いて相当書かれているのだろう。

「とくに、モテてる訳じゃありませんが。さっきの女性は、CMで共演したミス・ローラ・ウィリアムズです。彼女にとっては、日本人が珍しいのかも知れませんか」

キツパリ、あんな噂はデマです、と言い切りたいところだが……。一つの契約が終わるとまた次の契約書に縛られる事になる。それが、このハリウッドのシステムとはいえ、不慣れなシヨウにはいささか辛い。

沖倉もハリウッドの俳優組合に加入している。もちろん、契約による制限はあるのだろうが、基本的には“お客様”だ。客に厳しいルールを適用するケースは稀であろう。

「じゃあ、本命は……去年騒がれた、もう一人の彼女かな？ それとも、大事な女性はどこかに隠してるのかい？」

いや、君がいないのをいいことに、色々言う連中が多くてね。一度くらい、日本に戻ってハッキリさせてきたほうがいいんじゃないかな？ これ以上、欠席裁判にされちゃ敵わないだろう？」

それほど饒舌なタイプではないはずだが……やはり、同属意識が彼の口を軽くしているようだ。

確かに、彼の言うことにも一理あった。

去年の初めに日本で騒がれ始めてから、真偽問わずゴシップが絶えない。全てに、釈明するのは今更無理だろう。しかし、受賞となれば、いや、ノミネートだけでも一度は帰国して記者会見の一つも開かなければ、各方面に義理が立たない。

「そうですね。でも、もう有罪判決が出てるようで……戻ったら、袋叩きに遭いそうです」

シヨウは軽くかわしながら、沖倉が指してるのは、麻美との一件に違いないと考えていた。

「JJから、賞レースが終わるまでは棚上げの指示が出ていた。

……にも関わらず、彼はそれを無視して、麻美に会いに一度帰国していた。今月初めのことだ。その情報が一部のマスコミに漏れ、再び紙面を賑やかすことになる。

おまけに、その時なんと、ロサンゼルス 東京間を二十四時間で往復した。

仕事のためではあったが、その行動はタブロイド紙に書かれる以前に、税関職員の休憩室にまで広く話題を提供することになってしまった。

「まあ、ほら、去年は契約があったんだから仕方ないよ。でも、これを獲ったら、絶対に変わらと思うよ」

獲ったら……であろう。

もし候補のまままで終わった時、今日の計画は全てがご破算になる。

オスカーだけでも相当なプレッシャーなのに、問題は山積みだ。

(また、胃に穴が開きそうだ……)

シヨウは、ごく自然な動作で、カマーバンドのあたりを擦るのだった。

『シヨウ!』

ハイトーンの甘えるような声は、多くの男性にとって、さぞ魅力的だろう。でも、シヨウの耳には、胃壁を突き刺すドリルの音に聞こえる。

振り返らず、顔をしかめるシヨウを、沖倉はどう思ったのか、

「いいね、若いつてことは。でも、後ろから刺されないように頑張れよ!」

そう言うと、シヨウの肩をポンツと叩いた。

「女に刺されて死ぬなら本望ですよ。でも、こう見えてかなりしぶといんです」

余裕の芝居に気付いたかどうか……沖倉は笑いながら立ち去るのだった。

(マリーを探すために、透明人間のマントが欲しい)

そんなシヨウの願いなど叶うはずもなく……。

『ねえ、シヨウ。会場ではマーガレットのエスコートじゃないんでしょう? 私も共演者のエスコートじゃ寂しいわ。二人で行きましようよ。そのほうがコマーシャルも盛り上がって、スポンサーが喜ぶわ』

『ローラ。今日のエスコートは契約にはないと、さっきも言ったは

『ずだが』

こういつ時のシヨウはクイーンズイングリッシュが出てしまう。かなり冷淡に聞こえているはずだが……ローラの神経はワイヤーロプで出来ているのだろうか？ まるで堪えていないようだ。

『いやだわ、シヨウ。契約なんて。私たちの仲でしょう？』

『どんな仲だったかな？』

『そんなこと……タブロイド紙に書いてあるわ』

『そいつは知らなかった！ アレはいつから台本になったんだい？』

グリーンルームに用意されているのは、最高級のシャンパンだ。ウエイターのトレイから一つ受け取り、彼は口にする。酒は飲めるが、嫌いなのでほとんど飲まない。乾杯以外で飲むのは、特別な時だけだ。

この時、シヨウが思い出していたのは、最初のクリスマスにマリ―と飲んだ、わずか五ドルのスパークリングワインだった。

あれ以上の酒を、今夜は味わうことが出来るだろうか？

『来年あたり、ピアニストの役をやるんでしょう？ オファーが来てるのよ、その恋人役。また楽しめそうね、いろいろと』

ローラの瞳は、逃げる獲物を追いかけるチーターのようだ。

『確かに楽しめそうだ。だがローラ、僕にはそれ以前に、主演の話が二〜三本来ている。君と楽しむのは随分先だ。それに、最後じゃない』

それはまるで、遊んでやるから順番が来るまで待つてる、と言わんばかりであった。さすがのローラも顔色が変わっている。

シヨウは、決して追われるだけの草食動物ではない。

マーガレットに言ったように、彼は追われるより追うほうが性格

に合っていた。それに、マリー相手ならすぐに燃え上がるが、本来は冷静で客観的なほうだ。加えて、ハリウッドスター、シヨウ・カザハラを演じるなら、プレイボーイの役は簡単であった。

『そう……それならいいけど。私にも先のことは判らないわ。あなたまで順番が回らなくても、悪く思わないでねっ！』

紅葉を思わせる色のドレスを翻し、ローラはようやく彼の視界から消えた。

麻美の時と同様、JJからクレームが来そうだ。シヨウはそんなことを考えながら、グラスに残ったシャンパンを飲み干す……その時、開幕を告げるベルが鳴り響いた。

く
く
く
く

第27話 offstage 23 「新しい恋人」

『マリーが？ 誰だよ、ケイン・スチュワートって！』

共通の知人から、マリーが映画制作のスタッフと交際を始めたと聞き、シヨウは驚きの声を上げた。

『前からずっと口説かれてたらしいぜ。製作会社の社長の息子だと三十前だったかな？ フェラーリの横に乗ってたな。もう、ヤツの上にも乗っかってんのかな？』

そう言って、周りの連中は声を上げて笑った。

ガン！！

一瞬で場は静まり返る。シヨウがイスを蹴り倒したのだ。

(何がフェラーリだ！)

シヨウの愛車は中古のローバーだ。それも今年に入ってようやく手に入れた。それまではバイクに乗っていたが、マリーが後ろに乗るのを怖がったため、処分して買い換えたのだ。

今年から、ようやくバイトなしで食えるようになった。それでも、マリーとはまだ十倍近い年収差がある。社長の息子なら、収入は彼女を凌ぐものなのだろう。いずれ、この人気に収入も追いつくだろうが……今が一番厳しい時だ。

考えれば考えるほど頭にきて、そんな時、CMの仕事でローラ・ウィリアムズに出会ったのだった。

日本からは麻美の件で叩かれ、マリーと仲直りしたくても、仕事が忙しく時間が作れない。拳げ句、彼女には新恋人の報道だ。

この最悪の状況で、グアムの開放的な空間に身を置き、金髪美女

に口説かれたら……ノーと言える男は少ない。

『ハアイ、シヨウ。仕事とはいえ、常夏の島に来てるのよ。ちょっとくらいは泳ぎましようよ!』

『遠慮しとくよ。また撮られたら敵わない』

『あら、人気がある証拠よ。デートもパパラッチされなくなったらお終いだわ、ね?』

なんだかんだと押し切られ、ほとんどローラのペースだ。

彼女のアプローチは絶妙だ。自分の魅力を良く判ってるのだろう。ソフトなボディタッチで男のスケベ心をくすぐる。しかも、他のスツフがいる中、堂々とシヨウの腕を取るのだから……美人女優の指名を受けた優越感に、ズボンのベルトも緩むというものだ。

『ねえ、シヨウ、私とセックスしない?』

そんな状態のときに、耳元で囁かれるセリフとしては、最強だろう。

『悪いローラ。どうやら、頭の中の翻訳機が故障したようだ。君に、ベッドに誘われたように聞こえたよ』

冗談でかわそうとしたが、射程距離におさめた獲物を、みすみす逃す気はないらしい。

『壊れてないわよ。誘ってるの。ね、いいでしょ』

『俺たちは、会ったばかりだ』

『だからよ。三年付き合っても判らないことが一度のセックスで判るわ、そうは思わない?』

『思わない。女は謎だ。百回寝ても判らないね』

ふいに、マリーのことを頭をよぎり、いささか投げやりに答えてしまう。予想以上に、マリーとのトラブルは堪えているらしい。

ローラは笑いながら、

『だから楽しいのよ。判ってる相手とばかりじゃ飽きるでしょ?』

セックスはスポーツよ。妊娠と性病にさえ気を配れば、ダイエットにもなるわ』

あまりにマリーとは違う、良く言えば、ハリウッドらしい価値観に、シヨウは開いた口が塞がらない。

『スポンサーの希望で、恋人らしくするように、って言われてるじゃない。イメージって大事よ。それならいっそ、楽しましようよ。それとも何？ 日本人って恋も楽しめないの？』

『いや……日本人にもいろいろ居るよ。俺だって男だから……遊びでも女は抱けるけど』

『じゃあ、しましよう！』

そう言いながら、すでに、シヨウのズボンのベルトに手を掛けている。

『ちよつと、待て！ 待った……よせつて。好きな女がいる。彼女を裏切るつもりはないんだ』

『マリーのこと？ もう別れたんでしょ？ 彼女は他の人とデートしてたわ。フェラーリですって、いいわねえ』

一々言うな！ と怒鳴りたいのを我慢した。

『彼女がどうであれ、俺は違う。好きな女性がいるのに、馬鹿な真似は出来ない』

『そんなこと。黙ってればバレないわ。パパラッチに撮られたって知らないって言えば済むことよ』

『俺が知ってる。自分が吐いた嘘は自分が知ってる。誰を騙せても、自分は騙せないんだよ、ローラ』

それまで、からかうような表情だったローラから笑みが消える。

『逆もあるのよシヨウ。何もなくても、何かあったように言うことも出来る。どっちみち、同じことになるわ。私に恥を掻かせないで』

それは、軽い脅迫だった。してもしなくても、自分がマスコミに

話すことは同じだ、と。

その言葉をシヨウは苦々しい思いで聞いていた。

麻美が最初の時に言った言葉だ。彼女の場合は、ドラマの主演も掛かっていたから、尚のこと必死だった。「私から仕事を奪わないで」と泣きつかれたら……しかも、思いを寄せる女性だったら、経験のない十七歳の少年には抗い難い誘惑だろう。

だが、今のシヨウは十七歳の少年ではない。

ずっと、腰の位置で微妙に動くローラの手を、シヨウは邪険に振り払った。

『同じじゃない。君に何を言われても、少なくとも俺は、自分に恥じる行いはしてない。君に良心があれば、の話だが』

『そんなキレイ事がどこまで通用するか……見ものだわ』

そんな経緯から、帰国後、ローラは度々マスコミにシヨウの名前を挙げるようになったのだった。

く*く*く*く*

『シヨウ、いい加減にしてくれ！ お前は繁殖期のゾウアザラシか？ 少しは自制というものを知らないのか？』

ロスに戻るなり、「J」に怒鳴られた。事情を知らないのだからやむを得ないが、あまりの言われようにシヨウもムツとする。

『あのローラにいきなりベルトを外されそうになったんだぞ！ お前だったら、断わる自信があるか？』

『簡単に外されないように、ズボンにはちゃんと鍵を掛けておけ！』

『あいにく、俺のベルトは鍵付きじゃない。だが、ファスナーには』

ちゃんと鍵を掛けてるさ』

『……どういう意味だ？』

『そう簡単にズボンは脱がないってことだ』

『フーン、結構なことだ。その調子で頑張ってくれ』

『何を、だ？』

不可解なセリフに頭を捻ったが、すぐに理由は判った。なんと、初主演映画の相手役にマリーが決まったのだ。それにはもちろん二人の仲も関係している。

五月にオープンになってから、自然体で交際を続ける二人は、ファンにも好意的に受け取られていた。そう、理想のカップルでナンバーワンに選ばれるくらいに。そこに映画会社が目をつけ、マリーにオファーを出したのだった。

もちろん、その後の別離報道や、お互いの新恋人報道などは予定外のことだ。あまりに急な展開に、関係者も青くなっていたのだった。

第28話 offstage 24「マリーの失敗」

シヨウは、初主演映画のクランクイン直前、映画会社の本社に顔を出した。

同じ場所で久しぶりにマリーに会う。ビル内のおよそ無機質な会議室に、プロデューサーやディレクター、その他映画宣伝のスタッフたちが大勢いた。役者は二人だけだ。監督は諸事情により、同席できないと伝えられた。

マリーは何も言わない。正面に座ったシヨウを見ようとせせず、わざとらしくスタッフに話しかけている。その様子から見ると、ローラとの噂を百パーセント真に受けているようだ。

『まあ、若いんだからね、色々あるだろうが……少なくとも、公開予定の来年夏までは仲良くしてくれよ』

あははは……と、プロデューサーの乾いた笑い声が室内に響いた。関係者も追従するように控え目に笑う。真夏の会議室が、まるで氷点下の寒さだ。この空気を少しは読んでくれ、とシヨウは頭を抱えた。

だが、このまま黙り続けている訳にもいかず……彼は、重い口を開いた。

『僕に、ではなく、彼女に頼んでください。仲良くしてやってくれ、とね』

素直にマリーを見て、「仲良くして欲しい」と言えばいいのに、つついっ皮肉っぽくなってしまふ。

そんなシヨウの態度に、ケンカを売られたとでも思ったのだろうか。『シヨウには仲良くする相手が多くて。私とはもう、仲良くしたくないんじゃないかしら?』

間髪を入れず、マリーも言い返してくる。皮肉は彼以上だ。

そうなるよ………ついついシヨウにも、嫉妬心が頭をもたげて来て、『よく言うよ。フェラーリに乗ったどこぞの坊ちゃんと仲良くしたいんで、年下のジャップはお呼びじゃないって、ハッキリ言ったらどうだい？』

『あら………日本に残してきた婚約者はどうなったの？ハリウッドには女を漁りに来たのかしら？コレクションが増えて楽しそうね』
『渡米前のことは行き違いがあったただけだ。コレクションを増やす気なら、最初にお堅いカトリック女に引っ掛かったのは大きな間違いだっただけ』

『今からでも間に合うわよ。男にだらしないアバズレ女が好みなら、ストリートに立ってるだけで寄ってくるわ。知ってる？ハエつてゴミに集まるんですって』

『なるほど、だから俺に寄ってくる女は口クなのがいないわけだ』

テーブルを挟んで火花が飛び散った。

二人とも、表情はにこやかなだけに、周囲は怖くて口が挟めない。

『ま、まあ………まあ………その、仲良く、ね』

『私より、今のガールフレンドをキャスティングしたほうがいいんじゃないかしら？そのほうが、色々楽しめるでしょうし』

マリーの口調は辛辣で、それはヤキモチを通り越して、シヨウの耳には嫌悪にすら聞こえた。

『別に………撮影中に楽しむつもりなどないさ。それとも、君は撮影中もお楽しみだったわけかい？』

ガタン！とイスが後ろに倒れる。マリーが勢いよく立ち上がったせいで。その顔は真っ赤になっている。

『バカ言わないで！CMロケの………仕事の最中に、楽しんでたのはあなたでしょう！私と違って新しい彼女なら、あなたの好きにさせてくれるんでしょうから！』

『まあね。ようやく、ハリウッドの金髪美女にありつけた気分だ！』

売り言葉に買い言葉だった。

シヨウはただ、ローラとマリーを比べて、マリーは奔放なアメリカ人女性のイメージと違う、と言っただけのつもりだった。

だが、マリーの耳には、ローラの体のほうが良かった、と言われた気がした。

女として劣っている……そんな意味に聞こえ、マリーのプライドは傷ついた。そして、シヨウも同じように傷つけてやりたいと思いは……。

なんと彼女は、バッグからコンドームのケースを取り出すと、シヨウの前に放り投げた。

『ソレ、あなたに返すわ！ 日本製なんて、他の男性には使えないもの！』

会議室内の空気が一瞬で凍りつく。

その場にいたのは、ほとんどが男性だったが、数人の女性もいた。マリーの言わんとすることが判ると……横を向いて口元を押さえる人間もいる。

マリーは、ハツとしてシヨウの顔を見た。

その顔から表情は消え、心なしに青ざめて見えた。彼女は、ティーンエイジャーの少女のように、ムキになってシヨウをやり込めることしか考えてなかったのだ。

シヨウと交際を始めてすぐのことだ。アメリカ製のコンドームではサイズが合わないと言ったとき、彼はかなりシヨックを受けていた。男心に疎いマリーが「Sサイズもあるみたいよ」と言ってしまう、しばらく彼女に触れようとしなかったくらいだ。

結局、日本から通販で取り寄せて解決したが……。機能もさることながら、性能にもまるで問題はない。だが、そのサイズは、女性にとつてのバストと同じ感覚だと聞き、ようやくマリも納得したのだった。

『あ……あの』

ごめんなさい、言い過ぎたわ　そう言って謝ろうとしたが、一度口にした言葉は、そう簡単には消えない。

シヨウは無表情のままケースを取り上げ、

『どうもご親切に。　スモールサイズがお気に召さないなら、そう言ってくれば良かったんだ。悪かったね、充分に満足もさせられないのに、口ばかり偉そうで。以後慎むよ』

歩いてマリーの後ろに来た時、シヨウはケースごとゴミ箱に叩き込んだ。そして、そのまま会議室を出て行ってしまふ。

映画会社はシヨウの評判を落とすようなことはしないだろう。しかし、人の口に戸は立てられない。不名誉な下半身の噂が流れないことを、マリーは祈るだけだった。

く*く*く*く*

『マリー、マリー駄目よ。あれは駄目。あんなことを言ったら、シヨウの立場がないわ』

マリーは女性マネージャーのキャロルに懇々と説教をされた。

『でも、シヨウが言い出したのよ。フェラーリがどうか……だか

ら』

『やめてよ、マリー。シヨウのは全部ヤキモチだわ。ケインとの噂を聞いて妬いただけよ』

『妬いたりしないわ。だって彼にはローラが』

『それはこの際関係ないわ。シヨウはあなたのことを敬虔なカトリックでお堅い女性だと言っただけよ。それは悪口じゃないわ。降板問題にまで発展しかねないことを言ったのは、あなたよマリー。彼は青ざめて震えてたわ。男に取って一番言われたくないことよ。子供じゃないんだから、あなただってそれくらいは判るでしょう!？』

それは、キャロルの言うとおりだった。シヨウが無言で立ち上がったとき、殴られるかと思っただくらいだ。それに、映画関係者の目の前で言ったのだ……名誉毀損で訴えられてもおかしくない。

彼を怒らせた……と言っより、酷く傷つけてしまった。

いてもたってもいられず、マリーはその夜、数ヶ月ぶりにシヨウのアパートを訪ねる。

「〇・四・一・一」オートロックの暗証番号は変わってなかった。

それは、マリーの誕生日だ。ホッとして、玄関の呼び鈴を鳴らす。

だが……部屋から出てきたのは、ローラ・ウィリアムズだった。

第28話 offstage24「マリーの失敗」(後書き)

御堂です。ご覧頂きありがとうございます。

私としては、この回の会議室でのやり取り……書いてて楽しかったです(笑)() ショウは怒ってますが()

でも、「コレは男にはキツイでしょう。よくマリーのことを許せましたね」といったご意見も(^^;)

それは “愛” でしょう！(爆笑)

ちなみに、アメリカ製は日本製より平均を出すと大きいそうです。いや、コンドームのお話ですが……日米各種購入して実際にサイズを測られた方のデータを参考にさせて頂きました。

尚、ショウの名誉？ のために書かせて頂きますが、彼は別に“小さい”わけではありませんので、誤解なきようお願い致します m

() m

第29話 offstage 25 「復縁」

その夜、シヨウは滅多に飲まない酒を飲むため、クラブに出向いた。

そこで、偶然ローラと会ってしまい……キツパリ断われぬまま、気付くとローラは部屋まで入り込んでいた。

『ねえ、私が慰めてあげるわ』

そう言うと、彼女の指は悩ましげにシヨウの背中を上下する。酔いにまかせて、組み敷きそうになる衝動を叩き伏せ、ローラの誘惑を振り払った。

『送ってくれてありがとう。でも、普通は逆だろ？ 言っとくが、今日は飲んでるから車じゃ送れないぜ』

『もうっ！ シヨウってホントに男なの？ 実はゲイなんて言わないでしょうね。多いのよね、この業界』

よっぼど、自分に靡かない男がいることに、納得できないようだ。

シヨウは冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、一気に飲んだ。新しいボトルを差し出すが、ローラは軽く手を振る。

『男だよ。……アメリカンサイズには足りないけど』

ペットボトルに口を付けたまま、小さな声で呟いた。

『え？ 何？』

『なんでもない』

『ねえ、シヨウ。セックスはしなくてもいいから、泊めてよ。明日の朝、家まで送ってちょうだい』

『……ベッドはひとつしかない』

『あら、紳士なんですよ？ もちろん、私は一緒でもかまわないわよ。 シャワー借りるわね』

『おいっ！』

結局、どうあってもローラは出て行こうとせず……。どうもこの部屋は、女が居つきやすいのだろうか？

湯上りのラフな格好でベッドで寝転がるローラを、信じられない思いで見ながら、自分もシャワールームに足を踏み入れる。念のため、ロックも忘れずに……。

冷たい水を浴びると、多少のアルコールなどすぐに消えてしまった。思い切り酔おうと思っていたのに、ローラがいてはそれも出来ない。前後不覚になって、うっかりベッドイン、なんてことになったら……。今度は「」から『ゾウアザラシ』くらいの罵声じゃ済まないだろう。

今日のマリーの一発はかなり効いた。

女を抱く資格もなくせに……と言われた気分だ。これまでの全部が芝居だったと思いたくはないが……。女優相手に何を今更、と言われたら、返す言葉もない。

しばらくすると、シャワーの音に紛れて人の話し声が聞こえる。

まさかローラは電話に出たのか？ それとも来客か？ おとなしくしていてくれる女性じゃないので、彼は慌てて飛び出した。

『ローラ！ 勝手に出てくれるな、頼むから……』

シヨウは息を呑む。そこに、いたのはマリーだった。

『ダーリン、あなたに話があるんですって』

そう言つと、実にわざとらしく、シヨウの腕に指を絡め、零れ落ちそうな胸を摺り寄せた。しかも、なぜかシヨウのシャツを勝手に引っ張り出し、素肌一枚だけ身に着けている。これを見て、情事の後を想像しない人間は皆無だろう。

『ローラ、どうしてそんな格好なんだ』

『だってベッドにいたのよ。人前にあんな格好じゃ出られないわ』

『じゃあ、さっさとベッドに戻ってくれ』

『OKダーリン、愛してるわ。早く戻ってね』

これ幸いに、ローラはマリーを挑発して奥に引っ込む。

『お邪魔、だつたみたいね』

『いや……何？』

『今日のこと、謝ろうと思って』

『別にいいさ。君は嘘は吐いちゃいない。ただ……もっと早く言うて欲しかっただけだ』

『早くつて、何を？』

『女優相手に、ベッドの評価を真に受けた俺がバカなんだろうが…』

…。君を、楽しませていると信じていた。満足してくれてる、と『ベッドの上で芝居なんかしてないわ！ 私はただ……』

シヨウはマリーの言葉を遮ると、

『ケイン・スチュワートによろしく。日本製じゃ入らない彼なら、充分に君を楽しませてくれるだろう』

マリーとは一度も視線を合わさず、シヨウは彼女に、背を向けたのだった。

く*く*く*く*

マリーはアパートを飛び出し、一人で歩き続けた。変装もしていない。何処を歩いているのかも、よく判らない状態だ。

シヨウは追っては来なかった、麻美の時も、そして今回も。

『私……帰るわ。さようなら』
『ああ、気をつけて』

そんな一言で終わった。

これまでにない投げやりなポーズとセリフに、シヨウの心が既に自分から離れてしまったことをマリーは痛感した。

麻美にプロポーズした理由を、説明して欲しかった。すぐにキャンセルしたことが、彼の気まぐれでないなら……麻美とちゃんと決着をつけてから、迎えに来て欲しかっただけなのに。

ほんの少し離れただけで、もうローラのような女性を作るなんて浮気者のニックと大差ないではないか。ニックの時は両親が出てきて、すぐに婚約したが……今回は、両親はマリーの味方ではない。彼女の抱える孤独と不安を、シヨウに判って欲しかった。

マリーが顔を押さえ、その場に座り込みたい衝動に駆られたとき後ろから突然、肩を掴まれたのだ。

『マリー・ドレイクだね？ こんなトコで一人で何やってんの？ あっという間に、二人の男に挟まれた。彼女の肩を掴んだ腕には、蛇のタトウが入っている。』

あまりにも迂闊だった。こんなことなら、まだパラッチに囲まれたほうがましだろう。

『いいとこ知ってるんだ。招待するよ。行こうぜ』

『あ、ありがとう。でも連れがいるの。だから……』

『そう言わずに、酒を飲むだけさ』

強引に腕を引っ張られそうになったとき、横から同じ腕を掴まれ……。人影がマリーと男たちの間に割り込んだ。

『悪いな。こつちが先約なんだ』
それは、シヨウだった。

『へえ、シヨウ・カザハラかい？ 別れたって書いてあったけど』
『いや、ご覧の通りだ』

シヨウはマリーを抱き寄せた。口調は礼儀正しいが、漆黒の瞳は、決して笑ってはいない。その気迫に圧され、男たちは肩をすくめながら立ち去るのだった。

『シヨウ……どうして？ ローラは放っておいていいの？』

『言い忘れたことがあって。追い掛けて来た』

『何？』

この時、マリーの気持ちは九割方、シヨウに傾いていた。そしてその想いは、なんとカトリックの彼女にとって、信じられない言葉を口にさせる。

『あ、待って。お願い、待って。言わないで。私から言わせて。』

シヨウ、別れたくないの。あなたが許してくれるなら、二番目でもいいわ。セックスも、出来る限りあなたの望むようにするから、だから……』

シヨウは機先を制され、面喰らってしまった。最初に、麻美の件で怒らせたのはシヨウのほうだ。さっきのローラのこと、どう考えても、彼のほうから釈明しなければならぬはずだった。

『ローラとは何でもない。グアムも今夜も、抱いたことは一度もない』
『い』

『でも……ローラが』

『俺が一度だって、君を騙したことがあるかい？ 俺にそんな嘘はつけないよ。君が一番よく知ってるだろう？』

そう言った直後、マリーがポロポロ泣き始める。場所が場所だけに、どう対応すればいいのか、シヨウにも判らない。

『泣くなよ、マリー。君に泣かれたら困る』

マリーはそのまま、人目も気にせずシヨウに抱きついた。

『シヨウ……あなたが好き。お願い、私の元に戻ってきて』

『戻るも何も、はじめから何処にも行ってないさ。でも、いいの？ 日本製で』

やはりその点は大いに気になるところだ。

『日本製がいいの。シヨウのじゃなきやイヤなの。ケインとは何も
ないわ。フェラーリなんかに興味はないもの』

必死に訴えるマリーの顔を見ていると、シヨウの我慢は軽く限界を超えた。

『じゃあ今夜、日本製を試してみるかい？』

『今夜だけ？』

涙を拭いながら微笑むマリーの手を取り、二人は近場のホテルに飛び込んだ。

そして タブロイド紙の次号には、部屋まで待ち切れず熱いキスを繰り返すツーシヨットが掲載され、“復縁”と報じられたのだ。
った。

それを見て一番ホットしたのは、映画関係者だったかもしれない。

第29話 of f s t a g e 2 5 「復縁」(後書き)

御堂です、ご覧頂きありがとうございます。

この回は、描写が不足していたので付け足しました。言い回しも読み易く直したつもりです。

内容に変更はありません。

引き続き、ラストまでよろしく願います。

第30話 backstages「シヨウの恋人」

）
）
）
）
）

『かくれんぼは、そろそろ止めにしないか？ マリー』

招待客以外は立ち入り禁止であるグリーンルームの最奥、婦人用のレストルームの正面に、シヨウは壁にもたれて立っていた。

開始のベルは、マリーの耳にも聞こえた。いつまでも、こんなところにいるわけにもいかない。でも、目の前でローラがシヨウに祝福のキスをするのを、おとなしく見ていられるだろうか？

落ち着かせるために、シヨウとの距離を取ったはずだった。それなのに、離れていればいるほど、不安は膨らんでしまい……。

『シヨウ、ごめんなさい。そういつつもりじゃないの……ただ』

マリーは言葉に詰まる。

『俺の隣に立つことはイヤか？』

『違うわ。そうじゃなくて……。ローラがいたじゃない。彼女小柄で、あなたにお似合いだわ』

『俺には君も充分小柄だ。余裕で抱き上げられることくらい、知ってるだろう？』

今日のシヨウはいつもよりイライラしている。アカデミー賞の発表当日なのだから、緊張して当然かも知れない。でも、それとは少し違うものを、マリーは感じていた。

『そんなに怒らなくてもいいじゃない。どうしたの？ いつもなら頼んでも近寄って来ないくせに』

シヨウは優しい。外交官の父親に厳しく躰けられたせい、英国紳士顔負けのフェミニストだ。それに、人前でのスキンシップを拒むだけである。二人きりの時は、クールな表の顔とは違い、マリリーに甘えてくる。そのギャップも魅力ではあるのだが……。

『そつちこそ。いつもは俺が知らん顔したらすぐにふくれるくせに』
『ちよつと……疲れただけ。凄いなだもの、シヨウの周りって』

そう、マリリーは疲れていた。シヨウのあまりに急激な人気の上昇に、彼女は戸惑い翻弄されていた。

それは些細な、ほんの些細なことなのだが……。タブロイド紙のタイトルに『マリリーの恋人シヨウ・カザハラ』と書かれていた文字が、いつの間にか『シヨウの恋人』と書かれるようになってしまったことか……。

シヨウは、一月には前哨戦と呼ばれるゴールドングローブ賞も受賞している。

人種差別の強いアカデミーでは微妙だが、肌の色を差し引いても有力候補と言っているだろう。

そして……シヨウのノミネートを知って、ついにマリリーの両親も折れた。

『彼にまだ求婚の意思があるなら、家に連れて来なさい。時期について話し合おう』

父のそんな言葉に、マリリーは飛び上がって喜んだ。すぐに、シヨウにも伝えたが、

『それは良かった。でも、まだちょっと……。もう少し待ってくれよ。俺には俺の計画もあるからさ』
そう言っつて、両親に会うのを先延ばしにされている。

主演映画は一月末にクランクアップした。夏には全米で、そして世界中で上映されるのもう決まっているのに。シヨウはもう、充分にマリーの隣に立つ資格を手に入れている。

なのにまだ、正式なプロポーズはされてない。もちろん、指輪もまだだ。

今年のクリスマスプレゼントは密かに期待したが……。金額的にはこれまでで一番のものを贈ってくれた。でも、マリーには例え十ドルの指輪でも、永遠の愛の言葉と共に欲しかった。

そして、気がついたのだ。

四年前は逢うたびに結婚を口にしてくれた。でも復縁後、トクに昨年の秋以降は、彼の口から結婚の言葉は出なくなっていた。

それが何を意味するのか……。二十歳の頃なら大声で聞けただろう。でも、今のマリーは、聞きたくない言葉には耳を塞いでしまうほど、シヨウのことを愛していた。

『マリー？ 昨夜、俺が言ったこと……。考えてくれた？』

『ええ、私なりに考えて答えを出したつもりよ』

思い出すだけですぐに緩みだす涙腺を、マリーは必死で我慢するのだった。

～
～
～
～
～

第31話 of f s t a g e 26 「前夜の告白」

『入っていいかな？』

授賞式前夜、二人はコダックシアター近くのホテルにチェックインしていた。

二人ともノミネート俳優なので、ホテル側の用意してくれたスイートに宿泊している。マリーは、シヨウと同じ部屋を希望したが、彼がそれを断った。

その時は、いつもの日本人特有の照れかと思っていたが……あまりに他人行儀なシヨウの態度に、マリーの不安は最大値にまで高まってしまふ。

そして、部屋を訪れたシヨウが切り出した話は……結城麻美の件だった。

麻美がロスに来た時、マリーの元を訪れて話した内容は シヨウがどうしてもハリウッドに挑戦したいと言って墮胎を懇願した、それが事務所やお互いの両親に知れ、必ず結婚すると約束したのだと。

彼女はそんな風に、マリーに伝えたのである。

シヨウは言い訳はしたけど、否定はしなかった。いまだに、詳しい事情を話してはくれない。

マリーの心の奥で、麻美の件がずっと燻っている。なのに、聞くことが出来ないのだ。彼女のように捨てられるのが怖い。ローラるときは自分を追いかけてきてくれた。でも、次は？ それを思うと、恋を知り、弱くなった自分が悲しかった。

『彼女に会いに、日本に帰って来た件だ。理由は、話したと思うけど……』

『ええ、もちろん。話があったって、そう言ったわ。違うの?』
マリーはドキドキが治まらない。出来れば聞きたくない……そう言いたかった。

『いや、違わない。JJには叱られたけどね。でも、どうしても直接話し合いたかったんだ』

君にも聞いて欲しい　そう言ってシヨウは、マリーの胸に掛かる鬘を、少しずつ晴らしてくれたのである。

今から五年前、シヨウは迷いながらも、ハリウッドへの挑戦を決めていた。だが、渡米直前に、恋人である麻美が自分の子供を墮ろしたことを知り……。

シヨウは彼女を責めた。でも、全てはシヨウのためだった、という言葉を信じたのだ。そして、麻美への愛情と自分の責任を考え、プロポーズしたのだった。

『両親や事務所に知られたから、結婚を口にしたわけじゃない。自分で報告したんだ。戻ったら彼女と結婚する、と』

それだけなら、シヨウは約束通り、麻美の元に戻っただろう。問題はその後だった。

『周囲に話した夜に、彼女からメールが届いた。書いてあったのは……』
「シヨウと婚約した。子供の父親は彼になってるから、余計な事は言わないで欲しい。あなたのことはずっと好きだけど、結婚は出来ない。シヨウが渡米したら連絡する」
そんな内容で、俺に

届くはずのないメールだった。彼女が十九の時から付き合ってた男で、俺も面識がある。切れてなかったことを、その時初めて知ったんだ』

『あなたの恋人じゃ、なかったの？』

マリーは搾り出すような声で尋ねた。

『恋人だと思ってたよ。何もかも、彼女が初めてだった。最初にこっぴどくふられて……。一度は諦めたけど、結局、忘れられなかった。五年以上思い続けて、ようやく叶った恋だった。少なくとも、俺はそう思ってたんだ』

マリーにはもう、掛ける言葉がみつからない。

『メールは見なかったことにしようと思った。一生見なかったことにすれば、どんな嘘も真実になる。一生騙されれば済むことだ、って。だから、彼女には何も言わなかった。問いただす事もしなかった。でも……』

彼には座右の銘があった。

嘘はいつか必ずばれる。なぜなら、それが嘘だと自分が知っているから。誰を騙せても自分は騙せない。

『どうしても、自分に嘘は吐けなかった。父にだけ本当のことを話して、弁護士を立てて婚約を解消してもらったんだ。でも、彼女にはメールを見たことは話さなかった。自分の未練を断つためにも、嫌われて罵られたほうがましだと思ったから』

『帰国して、そのことを話してきたの？』

『ああ。彼女にとっては、最初から不本意な関係だったんだ。俺のせいで彼女は利用された……。俺の所属事務所は大手だったからね、うちの社長に睨まれたら芸能界から干される。そうでなきゃ、俺み

たいな融通の利かない男と付き合いたくなかった、そんな風に言っていたな』

そう言っつて彼が浮かべた哀しい笑顔は、今まで見たこともない、ひどく大人びた微笑だった。

ここまでシヨウに愛されて、どうして彼女は裏切れたんだろう？ マリーは、これほど誠実で真摯な愛情を、踏み躪った彼女が許せないと思っただ。

『どうしてなの？ 今になってどうして彼女は……』

『俺を日本に引き戻すため、彼女が餌になる。きつと、そう思われただろうな』

マリーには、とてもそれだけには思えなかった。麻美もシヨウを利用しようとしたに違いない。そうでなければ、シヨウの名がタブロイド紙のトップに載り始めてから、やって来る訳がないだろう。

こんなに傷つけられても、シヨウは麻美を庇っている。その理由は、愛以外には考えられない。

『でも、あなたは愛してたんでしょ？ 結婚したかったんじゃないの？』

『好きだったよ。初めて逢った時からずっと。だからこそ、愛されていないのに結婚は出来ない。嘘の上に本物の愛情は築けない。……そう思っただ』

嘘の上に本物の愛情は築けない。

マリーを不安に陥れた白い煙は見事になくなり、替わって、足元に絶望の淵が広がった。

なぜなら、シヨウの言葉はマリーの耳にこつ聞こえたのだ。

『これ以上嘘を吐いてマリーとの関係が続けて行きたくない。愛されていないから結婚は出来ないけど、今でも麻美を愛している』と。

第31話 offstage26「前夜の告白」(後書き)

この回の裏話です。

実は、この麻美と出逢った頃から別れる辺りまでのプロットもありまして……主に十代の頃の恋ですね。初体験とか、フラれて自棄になつてた頃とか……。

この渡米前のやり取りもあるんですが、そんなものを全部載せる訳にはいかないんで、どんな風に告白させるか悩みました(苦笑)

明日で全部UPできると思います。

もうちょっとお付き合い下さいませm) (m

第32話 Oscar ceremony「サプライズ」

）
）
）
）

『Academy Award for Best Supporting Actor Syo Kazahara』

世界中のマスコミ関係者が詰め寄せるフロア 正面の巨大スクリーンには、ついさっきまで五人の候補者の顔が映し出されていた。しかし、今は、シヨウ・カザハラだけが映っている！

そのフロアの歓声は会場を凌ぐもので、アジア各国のマスコミにとって、まさに、お祭り騒ぎとなった。

）
）
）
）

『私、向こう側に座るわ。あなたは、マーガレットと一緒にの方がいいわよ。じゃあ……頑張ってるね。ずっと応援してるわ』

会場に入るなり、マリーは離れて行った。軽く頬にキスして……あれが彼女の出した答えなのだろうか？

真実を話すと言う事は、自分に罪はないと言い訳することになる。シヨウは“言い訳”は嫌いだ。それでも話したのは、マリーにとって墮胎がいかに重い罪か、判っていたからだ。誤解を解き、婚約を破棄した理由を認め、許して欲しかった。

だが、マリーが麻美の言葉を信じ続けるなら、シヨウは卑怯者な

うえに、嘘つきになるだろう。

シヨウは今日のために、色々な根回しをしてきた。ゴールデングローブ賞を受賞して、オスカーの可能性が出てきた時に、考え付いたことだ。

周りの連中は、一つ発表があるごとに大騒ぎしている。本当なら、シヨウもその中に入るはずだったが……。ようやく様になってきたハリウツドスマイルを見せてはいるが、とても楽しむどころではなかった。

いったい、ここまで何をしてきたのか。何のためにここにいるのか。無論、演じることに惹かれ、一生の仕事にしたいと望んだ。人生を賭けるなら、最高峰の舞台で頂上を目指そうと心に決めた。彼自身が望んでここに居ることは間違いない。

だが……

様々な思いに気を取られる中、自分の名前を呼ばれた瞬間、スポットライトが当たった。

(ああ、候補者の紹介か)

そう思って、片手を挙げ、ニッコリ笑おうとした、が……。

周囲の盛大な拍手と、マーガレットからキスの祝福を受け、強引に立たされる。

『おいおいシヨウ、助演男優賞はいらないのかい？ 僕が貰っちゃ
うよ』

そう、司会者がおどけてみせた。……会場からはドツと笑いが上がる。

可能性はあった。当然だ、ノミネートされてるのだから。宝くじも買わなきゃ当たらない。だが、本当に大当たりなんて誰が思うだろう。

それは、日本人としては五十二年ぶり、男優としては初めての榮譽である。

(どうすればいいんだ)

それが、シヨウが最初に頭に浮かんだ言葉だ。

心に決めたことはある。そのせいで、異様なほど緊張した一日を過ごす事になった。

後ろを振り返ると、ハリウッドデビュー作「*twelve*」*th* *ieves*」で共演した先輩俳優らが、シヨウを見ている。彼らは皆、親指を立て、ゴーサインをしていた。

シヨウが何をしようとしているか、してもいいのか、事前に相談したから全て知っているのだ。

この舞台は世界中に中継されている。

映画を愛する世界中の人間を前に、彼は盛大なサプライズを計画していたのだった。

プレゼンターの手から、オスカー像を渡された。

シヨウは、本当に辿り着けたことに、感動より、安堵のため息をつく。

この時初めて気付いたことがあった。実は、日本からのプレッシャーに、相当なストレスを感じていたのだ、と。

そして、お決まりの受賞スピーチを求められ……

「えっと……あの、どうも、風原生です」

会場から笑い声が漏れる。いや、失笑というべきか。

『シヨウ、どうしたんだい？ 通訳を呼ぼうか？』

そんな司会者の言葉に、自分が日本語で話していたことに気付いた。

(ここまで来て恥を晒してどうするんだ)

やっと、シヨウ・カザハラとしてのプライドが戻ってきた。

『ああ、いや、英語は少しだけなら話せるから……通訳は要らないよ。どうもありがとう』

軽く笑顔を見せ、正面を向いて姿勢を正した。

『ハリウッドで活躍して、オスカー俳優になるのは僕の夢でした、こんなに早く叶っていいのかどうか……今は、ここに立つだけで膝が震える若輩者ですが、頂いた賞に相応しい俳優になりたいと思います。それと、感謝の言葉はやはり心を込めて母国語で言わせて下さい。』「どうもありがとうございました」 皆さん、本当にありがとう!!』

日本語で感謝の言葉を述べた瞬間、頭を下げ、深くお辞儀をした。

ホストもゲストも関係ない。アメリカ人になりに来た訳じゃ

ない。それは、彼なりの、筋の通し方であった。

そんなシヨウの姿をマリーは誇らしい気持ちで見つめた。

彼を好きになって良かった。今日が最後まで、彼を愛したことを決して後悔はしない。

ステージまでの道のりで、彼に祝福のキスをした女優は何人かいた。その中に、ローラの姿もあった。シヨウは別に嫌がる素振りもなく、彼女のキスを受けていた。

『マリーは行かないの?』

隣に座る共演者からそう聞かれたが……。マリーは、小さく笑って首を振る。

シヨウが私を探してくれたら、目が合って、手を差し伸べてくれたら、彼の腕の中に飛び込もう……。そんな幻想も描いていたが。

シヨウは名前を呼ばれてから、ついに一度も、マリーのほうを見ることはなかったのである。

第33話 Oscar ceremony 2「プロポーズ」

早くここから立ち去りたい。マリーはそれだけを考えていた。

シヨウはステージの上に立ち、片手を挙げて会場の拍手に応えている。いつ、舞台から降りるのだろうと思ったが……予想外にシヨウは言葉を続けた。

『それから……この賞が貰えたら、この場を借りて言おうと思っていたことがあります。えっと、あの……』

突然、マリーは腕を掴まれ、立たされた。

『な、なに？ なんなの？』

振り返ると、マリーは共演したことはなかったが、ハリウッドで一、二を争う人気俳優ウィリアム・キングが彼女の腕を掴んでいた。『ハイ、マリー。助演女優賞は残念だったね。でも君は、オスカー像より素晴らしいものを手にすることが出来る。幸運な女性だ』

『それって 何？ 判らないんだけど』

ステージ中央の真ん前まで連れて来られ、ウィリアム・キングはいなくなつた。マリーは急に心細くなり、今日のほとんどを過ごした、あのレストルームに、駆け込みたい心境になる。

その直後、マリーにもスポットが当てられた。何事かと周囲はざわめき始める。

そのざわめきが、更に大きくなつた。それは、シヨウがステージから飛び降りたせいだ。

シヨウは真つ直ぐ、マリーの元に歩いてくる。いったい何が起きているのか、彼女にはさっぱり見当もつかない。

そんなマリーをシヨウは一気に抱き上げた！　そして、マリーを連れてステージに駆け上がったのだ。

会場は、どんなイベントが起こるのか興味津々である。

マリーは、心臓が口から飛び出しそうなほどドキドキしていた。何をするの？　と聞きたいのに、声が出ない。シヨウはそのままステージの中央に、マリーを下ろしたのだった。

再び、シヨウがマイクの前に立ったとき、会場はシーンと水を打ったように静かになった。

『君と出逢った時、僕はオーディションをはしごする自称俳優だった。　ようやく、追いつけた』

それだけ言うとマリーの前に立つ。……そのままスツと床に片膝をついた。

『君に永遠の愛を誓う。マリー、僕と結婚して下さい』

結婚の申し込みと同時に、シヨウは、右手で指輪を差し出した。

会場には驚きと悲鳴の聲が上がる。……だが、マリーの答えを聞くために、再び静まり返った。

マリーは両手で顔を覆ったまま何も言わない。いや……言えない。答えは決まっているのに、声が出なかった。

シヨウにとって、九十九パーセントOKだと信じてのプロポーズだった。そう、計画した時は。

朝からその確率は下がり続け、会場入りした時は、計画を白紙に戻そうか？ と思ったほどだ。

無言のまま 時間は過ぎる。シヨウの背中に、冷たい汗が流れた。

ここでふられたら世紀の赤っ恥だろう……だが、それはそれで諦めがついて潔い。

いい加減、腹を括って立ち上がろうかと思つた瞬間だ。

『イエス……イエス！ イエス！！ イエスよ！！！！ シヨウのバカ。でも大好き！』

マリーに飛びつかれ、もう少しで転ぶところだ。

その瞬間、さっき以上に、会場は異常なくらいのハイテンションで盛り上がった。

この時のマスコミフロアの様子は 後は花火でも打ち上げれば、お祭りとしては完璧であろう。

二人が、これまでの映画で共演した俳優たちがステージまで出てきて、順に祝福してくれた。

『アカデミーでプロポーズなんて語り草になるな。でも、知らないぜ。世界中の人間の前で永遠の愛を誓ったんだ。一生逃げられないぞ。覚悟するんだな』

ウィリアム・キングに肩を抱かれ、そう脅されたが、シヨウは笑って答える。

『 本望だよ』

満場一致のキスコールが、会場から湧き上がった。
そして、シヨウは照れながらもマリーを抱き上げ、周囲の期待以
上のキスで応えたのだった。

く
く
く
く

第33話 Oscar ceremony 2「プロポーズ」(後書き)

アカデミー賞本番 残念ながらノミネートされた経験がないもので(当たり前)

コレ以上書き込むとボロが更に増えそうので、描けませんでした(汗)調べても判らなかつた部分は想像で穴埋めしています。随所に違う点があっても……イジメないでやって下さい(苦笑)

フィギュアスケートの氷上のプロポーズ……をイメージして、目一杯派手で衆人環視のプロポーズが書きたくてアカデミー賞を選んだようなものです。

後はエピソードのみとなりました。

せっかくなので最後までご覧下さいませm()m

第34話 of f s t a g e 27 「エピソード」

夜を徹しての祝賀パーティーだった。主役は間違いなくシヨウだ。そのヒーローが逃げ出すわけには行かず……。

世界中からお祝いの言葉とインタビューの嵐にあい、彼がベッドに転がり込んだのは翌日の昼過ぎだった。

『誰におめでとつって言われて、なんて答えたのか覚えてない。疲れた……眠い』

マリーは、シヨウの髪を撫でながら、優しく微笑んだ。

『いいわよ眠って。五時に起こしてあげる。夜の七時からパーティーだから間に合うでしょ？』

『またパーティー？』

『作品賞を受賞したルー・チャン監督の主催よ。同じ東洋人として出なきゃいけないわ』

『話したこともないけどね』

『だったらいいチャンスじゃない。オスカーを獲ったとはいえ、まだまだ新人なのよ。一人でも多くの監督さんと繋がりをもっておかないと……』

結婚が決まった途端、女は女房気取りになる、と聞いていたが……なるほど、と改めて納得する。

「鵜飼の鵜になった気分だな」

思わず本音が口からこぼれた。

『何それ？ 日本語よね？ どういう意味かしら？』

腰に手を当て、軽く怒ったフリをするが、頬は緩んだままだ。どうやら、今日はどんな望みでも叶えて貰えそうだ。シヨウは前髪をかきあげ、マリーをジッと見つめた。

シヨウが選んだドレスのドレープが、ふわっと風に揺れ……瞬時に、睡眠は別の欲求にとって変わった。

『恋人から婚約者に昇格したのに、ご褒美もなしかい？』

思わせぶりにマリーにウインクしてみる。

『疲れてるんでしょ？ ダーリン』

苦笑しながらも、シヨウの隣に腰を下ろした。

『二人でベッドでゆっくりしたいな』

『眠るんじゃなかったの？』

『君の胸で眠りたい』

シヨウの黒い瞳が、殊更艶めいて光り出す。

そして、マリーはパーティー直前まで、その瞳を独占したのだった。

くくくくくくくくく

二週間後、ロサンゼルス市内の教会でシヨウとマリーは結婚式を挙げた。

アカデミー賞の翌々日、教会に申請して、結婚式の許可が下りたのが、二週間後のこの日だった。

結婚許可証はすぐにもらえだし、ラスベガスの教会に行くと、その日のうちに挙げられたのだ。でも、マリーは子供の頃から通った教会で、正式に挙げたいと望んだのだった。

そして、突然のことに、シヨウの家族は戸惑いながらも駆けつけてくれた。

彼らは青い瞳の花嫁に特別驚くことはなかった。それもそのはず、

シヨウの姉婿は碧眼のスイス人なのである。

シヨウが家族をビックリさせたのは、別のことであった。

なんと……シヨウはマリーに合わせて、カトリックに改宗したのだ。

その途端、マリーの両親は、手放してシヨウを家族に迎えて入れてくれた。娘を誘惑した異教徒の悪魔が、自慢の婿に早替りである。

くくくくくくくく

身内だけが出席した、シンプルだけど厳かな結婚式の数週間後、新婚旅行の代わりにと、二人は東京に向かう飛行機に乗っていた。

シヨウは、日本の新聞を読みながらコーヒーを口に運ぶ。マリーは隣に座るそんな彼の横顔をジッと見つめていた。シヨウの人生のヒロインに選ばれた、アカデミー賞のステージを思い出しながら。今でも、あの一瞬の感動が冷めやらない。

オスカー像は手に入らなかったけれど、あの日、マリーが一番欲しかったものは、彼女の薬指に納まっている。

シヨウはステージから下りた後、放心状態のマリーに向かって笑いながら言ったのだ。

『嘘の上に本物の愛情は築けないって言ったろ？ だから正直に話したんだ』

紛らわしい、さつさとプロポーズしてくれたら良かったのに、そう思いつつ……世界一素敵なプロポーズしてくれたのだから、と簡単に許してしまった。

でも、ハラハラさせられ通しだったのだから、少しだけ

『ねえ、シヨウ。いつがいいかしら?』

『何が?』

シヨウは新聞に視線を落としたまま、怪訝そうな声で答えた。

『約束でしょう? ハリウッド大通りをオールナイトで踊るって』

マリーの言葉に、シヨウは飲んでいたコーヒーを吹き出す。

『まだまだ、皆にも喜んでもらえると思うわ』

『い、いや、俺の負けでいい。何でも言う事を聞くから……それだけは勘弁してくれ』

慌てて視線を上げ、シヨウはマリーの左手を掴んだ。そして懇願するように、手の甲に軽くキスをする。

しばらくは夫婦喧嘩に使えそう……悪戯っぱく微笑むマリーだった。

第34話 offstage 27「エピソード」(後書き)

御堂です。最後までご覧いただき、ありがとうございました。
ラストシーンも結構お気に入りです。

あのセリフはこのシーンのための伏線でした(笑)

この辺りも描写が足りなかったので付け加えました。

ゼツタイこれってこの人ですよね？ 的なツツコミがなくてホッと致しました(苦笑)(終わっても言わないでね、と軽く牽制)

どうしても言いたい！ と仰るあなた(いるのか？)

……どうかメッセージでお願いしますm(_____)mメアドの記載があれば返信させて頂きます。(なるう作家さまにはメッセでお返事致します)

最後に

たくさん作品の中から、本作を選んでお読み頂き、本当にありがとうございました。

少しでも楽しんで頂けたでしょうか？

今は必死で和風ファンタジーわんぷんちやうていを書いておりますが、そちらが終わり次第、ロマンスに取り掛かりたいと思っております。

その時には、ぜひ、よろしくお願い致します。

ご愛読ありがとうございました。

09/09/05 御堂志生

ニユーイヤ―休暇（前編） （前書き）

大居志穂様へ

キリ番リクエストの番外編です。

お気に召していただけたら幸いです（笑）

「」は日本語、『』は英語です。

後編、性的描写あり。全編R15指定です。苦手な方はご注意ください

い m () m

ニューイヤール休暇（前編）

『日本人初のオスカー俳優となった風原生かざはらしゅうさんが、ニューイヤール休暇を日本で過ごすべく、本日帰国されました。夫人のマリー・ドレイクさんと十一月に生まれたばかりの長男・仁君じんも一緒です。成田空港には多くの報道陣が詰めかけ……………」

シヨウは、自分たちの姿がテレビに映るやいなや、ピツとりモコ
ンで電源を切った。

マリーは隣の部屋でジンを寝かせている最中だ。交替しよう
か、と言いたいが…………今より夜中に交替するほうがマリーも喜ぶだ
ろう、とシヨウは考えた。

彼らの長男オバダイア・ジン・ドレイク「カザハラは結婚式から
八カ月後に生まれた。

生まれながらに“オスカーベビー”の称号を貰った息子だ。逆算
すると、ちょうどその辺りにコウノトリが飛んできた計算になると
いう。シヨウ自身、身に覚えのあることなのでとくに反論するつも
りはなかった。

栗色の髪とインディゴブルーの瞳を持つ、マリーそっくりの可愛
い息子だ。しかし、今は夜泣きチャンピオンである。

マリーは母親として完璧になろうと頑張っていた。こういう時の
父親の役目は「母親の邪魔をせず、気づかれないようにフォローす
ること」だと父は言う。シヨウ自身、父親として息子にしてやりた
いことはたくさんあるが…………どうやら、出番はずっと後のようだ。

それに、マリーも近い将来、女優に復帰するだろう。シヨウもそ
れは充分に理解していて、協力は惜しまないつもりである。

当初、結婚して最初のニューイヤール休暇は、マリーの実家に戻る予定であった。

だが彼女の兄嫁の出産が重なり……。ハリウッドスターの娘夫婦には、間違いなくマスコミとさらに質の悪いパパラッチがもれなく付いて来る。兄嫁は三度目の妊娠で前二回は流産しており、家族は全員神経質になっていた。落ち着いた環境で……と言われたら、戻れるはずがない。

一方、シヨウの実家は両親と兄一家のみで正月休暇を迎えるという。オーストリア在住のシヨウの姉夫婦は滅多に日本には戻らず、妹はオックスフォード大学に留学中で今年は帰国しないと聞いた。加えて、警備の面からも日本のほうが安心だ。

田園調布の風原邸は明治初期に建てられた洋館で、国の重要文化財に指定されている。敷地も広く、由緒ある骨董品や美術品も多いだけに、警備はかなり厳重だ。また、柄の悪い外国人がカメラを持ってうろつくには分の悪い土地柄でもあった。

オスカー以降、シヨウを取り巻く環境は激変した。

八月に全米で、九月には日本で初主演映画「Black Knight」が封切られ、興行は世界各国でロングランとなる。全米では既に興行収入三億ドルに手が届きそうな勢いだ。もちろん日本でも二百億円を突破している。

それはオスカー俳優、シヨウ・カザハラの名を世界的なものとし、彼をハリウッドトッププランクの俳優に押し上げた。

「Black Knight」は二作目と三作目も決定。年末には二本目の主演作「アジアン・プリンス」も公開され。

ほんの数年前、端役のオーディションすら門前払いだった男が、今では三年先の主演映画まで予約が入るくらいであった。

得たものが多ければ、当然、失ったものも多い。

何処にいても、何をしていても注目される。ヒースロー空港で自動販売機からコーラを買っている姿すら、インターネットに流れた時は驚いた。だが、驚きはそんなものでは済まなかった。

幼児期から二十代前半まで、シヨウの写った様々な写真が……言いは悪いが換金されたのである。それも業界関係者だけでなく、友人・知人・親戚関係や果ては学校関係者まで。本人すら覚えていないあらゆるシーンが出て来て、シヨウは言葉を失った。

それはまるで、マスコミの前で丸裸にされ、晒し者にされた気分だ。

シヨウは目の前にある暖炉型の電気ヒーターの温度を強に上げた。この家は、内外装とも補修程度で大幅な改築は出来ない。その為、セントラルヒーティングをはじめ空調設備が整ってはいなかった。冷暖房とも各部屋で個別に対応だ。

シヨウが渡米前に使っていた部屋はそのまま残っている。だが、三人で使うには些か狭いので、スイート仕様になっている客間を使っていた。客間は全体的に十八世紀のフランス・ルイ十五世様式の家具がほとんどだ。シヨウの父の曾祖母が明治の頃に集めたものらしい。

その中で40V型の液晶テレビはかなり浮いている。普段は特注の棚に収納されるようになっていたが、開けると“二十一世紀にようこそ”といった印象だ。

ヒーターの前に陣取り、シヨウは濡れた髪をタオルで荒々しく拭いた。

(大丈夫、ここは大丈夫だ。ここには、俺を売るような人間はいない)

警備上の問題とパパラッチ対策を理由に、友人との新年会をキャンセルした。かつて所属した事務所の同期や先輩後輩たちだ。だが、彼らしか知らないような情報もマスコミに流れた。疑心暗鬼な表情を見せるくらいなら、“ハリウッドスター様”と揶揄されるほうがましだろう。

そこまで考え、シヨウは大きいため息を吐いた。

仕事も私生活も充実しているはずが、精神的にはかなり堪えていない。シヨウはそんな自分が女々しくて嫌だった。

その瞬間、ふいに目の前が真っ暗になる。

「だ〜れだ？」

ちよつと舌の回らない日本語だ。

『やあ、ハニー。君の可愛い息子はもう夢の中かい？』

マリーはそのまま後ろから抱きつき、

『あなたの可愛い息子は“やっと”夢の中よ』

どうやらシヨウの“もう”がお気に召さなかつたらしい。苦笑いを浮かべつつ、そのままマリーを膝の上に抱き寄せた。

『初めての日本の正月で疲れただろう？ マッサージでも致しましょうか、マダム？』

『どんなマッサージをしてくれるのかしら？』

『性感マッサージでOK？』

『急に日本語にしたってことは……いやらしいことなのね？』

『正解』

二人は顔を見合すとクスクス笑って軽くキスを交わす。

マリーに目隠しを教えたのは、五歳になるシヨウの兄の長女・未散^{ちる}である。三歳の弟・昂^{こう}と一緒に、産まれたばかりの従弟に盛ん

に話しかけていた。未散は客が来ると「だーれだ」とするのがマイブームだという。

『二人とも可愛いわ。ねえシヨウ、次は女の子がいいと思わない？』
たまに苛々しているが、基本的に子供が好きなのだろう。マリーはしきりに二人目のことを話したがる。

『そりゃ俺はいいけど……。産後のボディラインが戻った所なのに、もう次かい？』

『やっぱりシヨウも弛んだお腹は嫌なのね。でも、私は子供はたくさん欲しいわ。セクシー女優なんて呼ばれたかったわけじゃないもの。今度こそ、演技力で役を勝ち取って見せるわ！』

シヨウがスタイルについて一言も言った覚えはない。だが……。産後一ヶ月くらいの頃、パパラッチに隠し撮りをされたのだ。

タブロイド紙のタイトルは『産後ダイエットに失敗したマリー・ドレイク』 客観的に自分の姿を見せつけられ、マリーはダイエットに必死になった。

いまだに気になるのか、一度もシヨウの前で脱ごうとはしない。そう“一度も”である。

ニユーイヤ―休暇（後編）（前書き）

性的描写あり、R15指定でよろしくお願ひ致しますm（――）

m

ニユーイヤ―休暇（後編）

『待てよ、マリー。ノーって言ったのはそっちだろ？ 俺は通算四ヶ月も禁欲生活を余儀なくされてるんだぜ。これで二人目は無理だろ』

『だって……そう言えば、私もまだだわ。産後一度も……二人目はまだ無理ね』

マリーを抱き締めたまま、今度はもう少し深く唇を重ねる。

シヨウが舌を押し込み、離れようとした時、マリーが名残惜しそうに舌先を絡めてきた。そうなれば、もちろん応えずにいられないのが男というものだ。甘いキスの応酬に、マリーの唇は赤味を帯び艶めいてくる。

『ってことは……ゴムなしでOK？』

シヨウの声は上ずっている。そんな夫の様子を見て、マリーは少し口を尖らせた。

『ホントに好きね。それともローラの言った通り、着けるのが嫌いなだけ？』

『こんな時に“恐怖のローラ”を思い出させないでくれ。俺はいつだって、彼女からは必死で逃げてるんだからな』

ローラ・ウィリアムズ、マリーとライバル関係にある女優だ。

ローラとは日本の自動車メーカーのCMにカップルで出演した。恋人同士のように振舞って欲しいと言われ、契約書通りにレセプションでエスコートしたり、デートもした。もちろんセックス抜きだ。

だが、ローラはそれが面白くなかったのだらう。彼女の誘いを断わり、マリーを追い続けて結婚までしたシヨウが憎くて仕方ないのだ。

無視してくれればいいのだが、何としてもシヨウを落としてマリ
ーに一泡吹かせたいらしい。

契約が延長された為、去年の夏もローラと撮影があった。

マリーのヤキモチはお腹の大きさと比例して……。シヨウは
ロケの間中、暇さえあればマリーに電話を掛け続けたのだった。

『ねえ、ダーリン……以前と同じスタイルじゃなくても、嫌いにな
らないでね。それに、浮気もイヤ』

『浮気は一度もしてないし、これからもない。君に永遠の愛を誓っ
たはずだぜ、マリー』

ヒーターの前で、シヨウはマリーのガウンを脱がした。そして、
上から順に剥ぎ取っていく。

元々、張りのある豊かなバストをしていたが……今はさらに張り
詰めオリーブ色の肌が輝いていた。思わず、シヨウはその片方にむ
しゃぶりついてしまう。そして、もう片方を強く掴んだ瞬間……な
んと、先端から母乳が飛び出した。

『あまり強くは触らないで……これ以上張ったら熱が出るから』
『ごめん。優しくする』

驚いて腰の引けるシヨウを見て、マリーはクスツと笑った。

『大丈夫よ。じゃあ、コレなら気に入ってくれる？』

そういつてマリーの始めたことは……。

最初にマリーがソレをしてくれたのは、結婚式を挙げたその夜だ
った。

結婚前は酷く嫌がり、一度もしてくれなかったことはなかった。それが
あの夜、彼女は豊満な胸の谷間にまで挟んでくれたのである。噂に
は聞いたことがあった。だが、本当にして貰ったのは初めてだ。シ
ヨウはあっという間に降参したのを思い出していた。

シャワーから出てすぐで、シヨウはバスローブ一枚だ。マリーが探り当てた時には既に引き返せないサイズになっていた。

『マリー……いいのかい？ ホントに、こんな……』

『いいの。神様には目を瞑っていて貰うわ。私、あなたが悦ぶことは何でもしてあげたいから』

マリーの胸は信じられないほどの弾力があつた。その肌触りだけでも十分に素晴らしい。だがそれ以上に、彼に官能を与えたのは……最高の感触を味わいながら、マリーが先端を口に含む姿を目にすることがだろう。

何と言っても四ヶ月ぶりである。この刺激的なシチュエーションに、シヨウの神経は焼き切れそうだ。

『マ、マリー、ストップ！ もういいから、待ってくれ』

『私なら構わないわ』

『ダメだ。……君を悦ばせたい』

『……シヨウ』

『愛してる、マリー』

マリーの下半身も全部脱がせ、自身も裸になった。

床の上……センターマットの上で、二人は全裸で抱き合った。唇だけでなく、隙間がないほど身体を重ね、腕や脚を絡ませる。

『君は素晴らしい。最高だ、俺だけのマリー』

『あなたもよ……シヨウ……素敵』

『俺は君の虜だ。マリー、君以外はいらない！』

シヨウは妻を抱き締めながら最高の賛辞を送る。マリーの脚がシヨウの腰に巻き付き……四ヶ月ぶりにシヨウを迎え入れた瞬間、彼女の背中が大きく反り返った。

二年空けてもここまで切羽詰ったことはなかった。

だが今は……二人は床の上で激しくもつれ合う。まるでサンバを踊るように、腰を押し付けて相手の最も深い部分を求め合った。どうやら、マリーもシヨウに負けないくらい、この日を待ち侘びていたようだ。汗ばむ胸の谷間に顔を埋め、二人は同じタイミングで昇り詰める。

その直後、互いを見つめ合い、愛しみ合うように唇を重ねる二人であった。

それは可愛い息子の泣き声を挟んで、朝方まで続き……。

く*く*く*く*

『予定日が十月ってことは……二人は丸一年も違わないってことか』

それに気づいたのは三月の終わりだった。

さすがに来ないのはおかしいと思い、出向いた病院で告げられたのである。

『まあ、おめでとう！ 十月には二人目のベビー誕生よ』

という女性ドクターのお祝いの声であった。

妊娠が判れば授乳はストップだ。生後六カ月で卒乳は早過ぎる。

強制的に離乳食と粉ミルクに切り替えられ、ジンはご機嫌ナナメであった。

『いいかい、仁。アレは元々パパのモノなんだ。それを君に貸してあげただけなんだからね』

哺乳瓶を愚図る息子にシヨウは説得を試みる。だが、声を限りに

泣くばかりだ。

『ああ、判った。オービイ、パパが悪かった。だが君も男なら判るはずだ。コレが判らないと、一人前の男にはなれないぞ』

『ダデイ！ 頑張つて！』

マリーは微笑みながらシヨウに声援を送る。

『もちろん、あのオツパイが恋しい気持ちはよく判るよ。だがオービイ、君が大きくなってから、自分で素敵なおツパイを見つけてるんだ』

シヨウはこの先は日本語に切り替えて話しかけた。

「大丈夫、俺の息子なら選り取りみどりだ！ いやいや、今のパパにはママだけさ。でも、君がこれ以上ごねるなら……パパは他のオツパイを探しに行くかも知れないな」

ジンは日本語を聞くなり、ピタツと泣き止みミルクを飲み始めた。

相変わらずマスコミは煩い。少しでもマリーと喧嘩すれば、『離婚？ 別居？』と騒ぎ立てる。このジンの写真すら、プライベートのスリーショットなら日本円で数百万円だと聞いた。

だが、全てシヨウが望み選んだ道だ。責任はシヨウが持たねばならない。

過ちを犯したことはある。気づかずに間違えたままのこともあるだろう。それでも……誰に何を言われても、どんな過去を暴かれても、公明正大に生きてきた自分を信じよう。

将来、子供たちから『尊敬する父』と呼ばれるために。

「だろ？ マイ・ボーイ」

シヨウは母親思いの息子に微笑んだ。

}
f
i
n
}

ニユーイヤ―休暇（後編） （後書き）

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

サイトのアクセス333333のキリ番を踏んでいただいた大居志穂様のリクエストで書かせて頂きました。

「黒い瞳」はこの程度の性描写でご容赦くださいませ（苦笑）
オバダイア・ジン（仁）君の名付け親も“シヨウ・カザハラ”のファンクラブの会長”大居様です（笑）

なるうさんでも、お気に入り登録して下さいの方がいらっしやいますので、投稿させていただきました。

彼らのその後を少しでも楽しんで頂けましたら嬉しいです。

どうもありがとうございます（平伏）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8242h/>

黒い瞳の貴公子 ~brown eyes at noble~

2011年5月18日14時01分発行